



熊本大学応援団創立 50 周年記念号

# 熊本大学応援団 OB 会誌

# 剛毅



熊本大学応援団 OB 会

URUTAN.100

# 目 次

写真でたどる50年の歴史

熊本大学ホームページ  
WEBマガジンから(団員1名の応援団)

贈 呈

50周年を迎えるにあたって	1
祝辞	3
ご指導いただいている方からのメッセージ	7
OBからメッセージ	9
熊本大学ホームページWEBマガジンから (BLAZES)	45
金守先生の思い出	47
和田先輩の思い出	50
各代の出来事	53
今も伝わる応援団の熱き想い	121
太鼓リズム表・歌集	150
編集後記	153
OB会規約	154

## 表紙の写真

(左上)	昭和44年(1969年)2月 2代 追い出し会 (武夫原)	(右上)	昭和44年(1969年)5月 第1回五大学総合体育大会 結成記念前夜祭(水前寺体育館)
(左下)	平成16年(2004年)11月 熊粋祭 熊本大学特設ステージ	(右下)	平成16年(2004年)11月 熊粋祭 熊本大学特設ステージ

URUTANとはOB会誌「剛毅」の愛称で第2号から使用された。この会誌は第25号まで発行されている。今回の記念号の表紙にURUTANの愛称を復活させ、永遠に熊大応援団が継続する気持ちを込めて“100”の数字につなげた。

# 写真でたどる50年の歴史 1



熊本大学応援団結成記念 昭和43年2月10日

昭和43年2月10日 応援団結成記念写真



昭和43年11月23日 第1回対商大定期戦開会式

昭和43年11月 対商大定期戦開会式



昭和43年夏頃



昭和44年2月頃



昭和44年11月 対商大定期戦市中パレード



昭和46年9月 第2回OB会

## 写真でたどる50年の歴史 2



昭和48年4月 春合宿(宮崎大学)



昭和49年4月 春合宿(九州大学)



昭和51年11月 阿蘇遠歩



昭和53年7月 インカレ応援(長崎)



昭和54年12月 第11回演武会



昭和58年1月 第14回演武会

### 写真でたどる50年の歴史 3



昭和59年5月 水泳応援(熊大プール)



昭和59年8月 夏合宿(武夫原)



昭和61年8月 夏合宿



平成元年3月 追い出し会(武夫原)



平成2年3月 春合宿(武夫原)

祝 熊本大学応援団創立50周年  
贈 呈

熊本大学応援団創立50周年のお祝いとして お贈り申し上げます

平成28年5月7日

熊本大学応援団OB会会長 河村 久幸

一 応援団旗 200cm × 300cm



一 BLAZESフラッグ

120cm × 180cm



創立50周年の記念品としての制作物



応援団旗。BLAZESフラッグのデザインをアレンジした日本手拭

熊本大学応援団創立 50 周年記念号

# 熊本大学応援団 OB 会誌



熊本大学応援団 OB 会

# URUTAN.100



## 熊本大学応援団創立 50 周年を迎えるにあたって

熊本大学応援団OB会会長

河村 久幸

(7代目団長)

熊本大学応援団創立 50 周年を迎えるにあたりまして御挨拶申し上げます。

この 50 周年を迎えることができますのも熊本大学関係者、他大学応援団、熊本大学体育会本部ならびに各サークルのご支援のお蔭だと深く感謝申し上げます。

振り返りますれば、50 年前、昭和 41 年 5 月（1966 年）対熊商大定期戦の開会式のエール交歓において、「初代の和田英樹団長は一人乗り込んでいき一人でエールを切った。太鼓も団旗も一人のバックもなくエールを切った。」まさにその時の、そのエールが熊本大学応援団の産声でした。

応援団創成期（初代～4 代）は、周りに応援団を認知してもらうために始まった厳しい練習がありました。団旗が欲しく、部室が…、演武が…、練習場が…、太鼓が…、そして何よりも団員が欲しくて求め続けた厳しい練習の日々。その姿勢が熊本大学、熊本大学体育会の他サークルからも認められ、ついに熊本大学応援団は名実ともに熊本大学体育会の底辺を支える存在まで成長しました。

和田先輩の想いは「勝利を目指す他のサークルと違って、応援団は勝利を目指すのではなく、この応援団という集いは厳しい練習の中で、常に団員同士の人間と人間のぶつかりあいによって支えられている。応援団とは何か、生きることは何かを考えながら人間的成長の場、それが応援団である。」この和田先輩の想いが今日まで私たちの心に脈々と引き継がれています。

5 代目以降は、応援団活動も全盛期を迎え、名実共に熊本大学からも十分認められ、体育会各サークルの中で中心的な存在になり、そして他大学応援団の中でも九州に「熊大応援団あり」と孤高とした存在感を発揮できるようになりました。

しかしながら、30 年間継続していた応援団活動も、時代の流れには応援団も例外ではなく平成 7 年（1995 年、29 代）には団員ゼロという厳しい冬の時代がおとずれました。

その後、8 年間の空白期がありましたが、平成 15 年（2003 年）に理学部の梅木君とチアリーディングの徳永さんを中心として応援団の中に、リーダー部、チアリーダー部が一体となった新生応援団が発足しました。マスコミにも取り上げられて応援団復活を OB 全員が喜びました。しかし、団員 2～3 名の時が続き、現在は応援のスタイルはチアリーディングが中心になり今日に至っています。

50 年の歴史の中で時代と共に応援団の形もかなり変わってきました。時代、時代で変わるのは当然だし、更に 10 年後、30 年後には、また昔の私達の現役のような時代がくるかもしれませんし、想像できないような形になっているかもしれません。形はともあれ、応援団の本分は応援することです。このことは応援団である以上不変だと思います。応援団が仲間の勝利を一緒になって喜び、仲間に勇気と感動を与え続けることができれば素晴らしいと思いますし、仲間を応援する集団が必要だと思います。



そこで「熊大応援団OB会の存在意義」をもう一度考えなければならないと思います。その時期が来ていると思います。今までOB会は現役に対して、創団 20 周年の時は団旗を、30 周年の時は太鼓を贈呈し、毎年現役活動費として金銭の支援を行ってきました。そして今回 50 周年では、熊大応援団団旗、チアリーディングの横断幕（BLAZES）を贈呈します。物はある程度は揃ってきたと思います。

そのことは、それで素晴らしいことだと思いますが、今現在の応援団の一番の課題は何か？ それは、団員不足です。この課題解決のために、「団員の確保の面」から現役に対して何かできないか？ それを考えていきたいと思っています。この 50 周年の OB 会の位置づけを「団員確保の面から応援するスタートの記念日」にしたいと思っています。

学生にまだまだ応援団に誤解があるのではないか、応援団を正しく理解してもらうために広報活動が必要ではないか？ 新入団勧誘チラシ作成を支援できないか？ チアリーディングの場合でもユニホームが高価なため退部するというケースもあったそうですので、その支援ができないか？ 皆で考えていきますので、これからもOBの皆様の意見をどんどん出していただくようお願いいたします。

今回の 50 周年記念事業には、本当に多くの OB 諸君がご参集していただきありがとうございました。例年の OB 会は約 50 名程度の参加でしたが、今回はその約 2 倍の参加者がありました。多く方が集まることで現役時代の思い出がより鮮明になると思います。青春時代を思い出し、新しい血が全身に通い、勇気と感動を明日への活力の源と感じていただき楽しい一日を過ごして下さい。

そして、50 周年記念事業として 1. 記念演武会の開催・記念式典、2. 団旗・横断幕の現役への贈呈、3. 創立 50 周年記念誌「剛毅」の発行を行います。これまでの皆様のご協力に感謝申し上げます。

なお、今回の参加者の皆様には 50 周年記念誌、新しい団旗デザインの記念品を制作しましたので、ぜひお持ち帰りください。また、記念演武会の様子を DVD 作成予定です。現役時代と比べてください

最後になりましたが、熊本大学応援団が、学生から信頼され各サークルの支えとなり、永久に存続するように皆様方のご支援をお願いしますと共に、皆様の益々のご活躍を期待いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。



## 熊本大学応援団創立 50 周年によせて

剛毅と胆力

熊本大学長 原田 信志

熊本大学の教育戦略は「旧制第五高等学校以来の剛毅木訥の気風を受け継ぎ、我が国の地域社会や国際社会の中でグローバルな視野で思考し、果敢に行動できる、知力と胆力（人間力）を有する人物をつくる」です。正に、剛毅と胆力を持ち合わせたものが応援団ではないでしょうか。

私は熊本大学医学部の学生の時（1969年から1975年）、ほぼ6年間医学部の、今ではソフトテニスと呼ばれる軟式庭球部に属していました。当時、全学の軟式庭球部とはほとんど交流はありませんでしたが、今ではもう存在しない工学部の白川沿いのコートや養教のコートで合宿や練習をしていました。我々が在籍していた時代は、医学部の庭球部は強く、様々な医学部の大会で優勝していました。試合後あるいは祝賀会やコンパの時、我々自身がエールを交換したり武夫原を歌ったりしていたのを今でも鮮明に思い出します。我々はまた、応援団も兼ねていたのです。

医学部を卒業し、大学院の時代、竹下次郎先生と同じ研究室であり、一緒に研究をしました。後で彼が応援団員であったのを知り、ビックリしました。しかし、言われてみると、当時から剛毅木訥であり、困難な研究も粛々とやり通す胆力を持ち合わせた人物でした。

平成元年、熊本大学医学部の教授として着任しました。学生時代クラブ活動をやっていた縁もあり、医学部のバレー部とソフトテニス部の部長を務めました。我々の時代とは、学生の気質は幾分柔らかくなったような気がします。しかし、コンパの時（両方のクラブ共）エールを交換し武夫原を歌うのを聞き、伝統は残っているのだなと思ったものでした。

6年前から、黒髪の事務局で働いています。副学長・理事の時から、ホームカミングデーや熊本大学の連合同窓会などで本物の応援団の演技を見せてもらいました。我々の士気を十二分に高揚させ、若返ったものでした。また、チアリーディングの素晴らしい演技にも目を見張りました。今後、応援団のますますの活躍を期待いたします。



## 熊本大学応援団創立 50 周年によせて

### 時流に逆らう反逆の精神

熊本大学副学長 古島 幹雄

熊本大学応援団結成 50 周年おめでとうございます。結成 50 年という事は、私が熊本大学理学部に入学した 1970 年代前半には既に応援団は結成され活動もされていたわけですが、全くそういう記憶がないのは私自身体育系サークルに所属していなかったからでしょうか。結成された当時は、国立大学は学生運動のさなかで、大学全体に左翼臭が漂い、血気盛んな学生がハンドマイク片手に角棒持って暴れまわっていた時代です。

その一方で、日本の「こころ」とか「伝統的精神」とは何なのだろうか、と自問自答を繰り返し、しまいには右翼活動に傾倒して行った学生も少なからずいました。勿論、応援団と右翼思想とは全く別物であり、当時は社会の理解もそうでしたが、大学の伝統とか名誉や絆といった、その保守的（守旧的）なフレーバーは、当時の社会に心地よく受け入れられた面はあるかと思います。このように、右左入り混じった混沌とした時代の中で、応援団が結成されたというはある意味必然だったのかも知れません。応援団結成に尽力された当時の有志の方には同じ時代を生きたものとして敬意を払いたいと思います。

発足当時の応援団員の「こころ・精神」と旧制五高の「剛毅朴訥の精神」は同じところから来ているように思えます。それは、わが日ノ本の麗しき伝統に根ざすもので、今日の日本人や政治家からも忘れ去られようとしている「もの」ではないかと思います。この 50 年、世の中は「硬派」から「軟派」へ「肉食系」から「草食系」へと変わり、五高以来の「剛毅木訥」の気風は風化の一途を辿っているかのように思える昨今、本学出身の初の学長である原田学長の下での熊本大学の第 3 期中期目標・計画の中に「剛毅木訥」の 4 文字が蘇ったのは特筆すべき事かと思います。平成の御代に「剛毅木訥」の精神を本学学生とともに如何に実現してゆくのか、熊本大学の第 2 のステージが始まったと言っても過言ではありません。その一端を担うのは、やはり、「熊本大学応援団」でなくてははいけません。ところが非常に残念なことに現在応援団員は、Web マガジン「KUMADAI NOW」よりもすと、団員かつリーダーの西本徹君（理学部 4 年）1 名だそうです（特集記事が掲載されていますので是非ご覧ください）。今、応援団は、危機的状況に陥っているということですが、これも時世と嘆くにはあまりにも失うものが大きいような気がします。

応援のスタイルは五高当時の再現に近いものであり、その伝統を引き継ぐことは大事である一方、やはり新制大学としての熊本大学応援団の新しい形を作ってゆく事も必要だと思います。とはいえ、時流に流されてしまっただけでは応援団のイメージも値打ちも下がってしまいます。時流に逆らう「反逆の精神」を持って、グローバル化が進む中、熊本大学あるいは日本の大学の文化としての応援団またはその活動を世界に知らしめることも大事です。気骨ある学生を団旗はためく下にどれだけ結集させられるか、残された我々の課題であると思います。熊本大学応援団の今後の活躍と発展を祈念しています。



## 熊本大学応援団創立 50 周年によせて

熊本大学体育会応援団 顧問 中川 保敬

熊本大学応援団 50 周年おめでとうございます

新年度を迎えフレッシュマンが熊本大学構内に見られ活気あふれるこの季節に、熊本大学応援団におかれましては、記念すべき 50 周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。これも代々引き継いでこられました熊本大学応援団OB・OGの皆様の熱い貢献があったことの証だと頭を垂れるばかりです。

思い返せば、私が熊本大学に赴任した昭和 62 年には、金守新一先生が御退官になられ池田一徳先生が顧問になられた時であったように思います。その後一門恵子先生が顧問になられ、その後一門先生からの依頼を受け私が顧問を引き受けて、今日に至っています。

私が顧問を引き受けた時は、応援団の部員も多く活発な状態で演舞会も年一回市民会館などで行われていました。その後数名に減り一時期は、体育会にお願いした経緯があり、ここ数年間は、少ないながらも五大学戦や熊本学園大学との定期戦で応援団の演舞魂を行いながら部運営を行ってきております。またこの間に、応援団にチアリーディングを加えまして新しい応援団に発展しております。

応援団の目的（精神）は、50 年前と現在でもその重要さは少しも変化しておらず、いや益々その精神は重要になっていると考えます。現代社会に於いて自己中心的な人間が増加し、他への支援など考えもしない場面が多々感じられる現代社会像が浮かぶのは私だけではないように思えます。

初代団長であった故和田英樹団長に最初にお目にかかって以来、その姿は当に応援団でありレジェンドであり、和田会長のその熱い思いと応援団魂がぐんぐんと胸に迫ってくる感動を受け、顧問として身の引き締まる思いがお会いするたびに感じたことを思い出します。また、和田会長とゴルフをご一緒した思い出は、ゴルフに携わっている関係（九州ゴルフ学会事務局担当）からゴルフの良さや楽しさを理解して頂き、一日ゴルフを楽しんだ思い出と共に幅広い人生観を感じることができました。

現役の応援団の学生は、顧問就任時の秋田団長を始め現在の西本団長まで、各年度の団長・団員は礼儀正しく、自己研鑽力が高く、他の人のためへ支援出来る情に厚い団員諸君に数多く会うことができたことに感謝しております。ただ、実直で責任感が強くみんなに慕われていた間宮君を亡くしたことは、本当に悔まれ、悲しい思いを忘れてはならないと思います。

これから未来に向けて、河村OB会長を始めOB会員の皆様の引き継ぎの継続的支援をお願いいたしますと共に、熊本大学体育会応援団が、今後 70 年、100 年と応援団精神が引き継がれ、発展することを心から祈念いたしまして、50 周年の記念に当たり粗文であります但寄稿とさせていただきます。



## 熊本大学応援団創立 50 周年によせて

熊本大学体育会本部 第 57 代委員長 吉本 昌幸

この度は応援団創設 50 周年おめでとうございます。今回『熊本大学応援団 50 周年の歩み』を読ませていただき、応援団の誕生秘話を初めて知ることになりました。様々な苦難を乗り越え、現在まで長い歴史を紡いでこられたのも初代団長の和田英樹さんの情熱が脈々と引き継がれているからだと思えます。

我々熊本大学体育会も応援団とは長い歴史をともに歩み、数々のご協力頂いてきました。これからも互いに力を合わせて熊本大学の発展に力を入れていきたいと考えております。

現在、団員が少ないという状況だとは思いますが初代団長の時がそうであったように再び応援団が盛り上がっていくことを祈っております。

## ご指導いただいている方からのメッセージ

## 出 会 い

元顧問 池田 一徳

50年の伝統に輝く熊本大学応援団に心からお祝いを申し上げます。「剛毅」第17号に熊大応援団の基本理念が述べられていますが「友情、愛校、敬意」の精神は、これから先も変わることはないだろうと書かれています。ともすれば、自分本位に走りがちな現在の世の中に、最も大事なこの精神を応援団が身をもって示してくれていると思います。

私は僅かな期間であります、伝統に輝く素晴らしい応援団の部長を、前部長の金守先生からご推薦いただき勤めることが出来たことに感謝いたしております。



人生にはいろいろな出会いがありますが、私と熊大応援団との出会いは、不思議な縁で結ばれていました。私の少年時代の心の支えであった叔父が、旧制第五高等

学校の応援団の団長をしていたと言っていました。したがって、「武夫原頭に草萌えて」などの寮歌をよく聞かされました。

また、私の前任校の北九州高等専門学校では、初代団員の森下純昭先生とも一緒に仕事をしましたが、いろいろな面で助けてもらいました。初代団長の和田英樹先生とも森下先生との関係でお会いをして酒をともにしました。そして、お二人の教育に対する情熱に敬服をいたしました。

その時、まさか熊大へ赴任して応援団の部長になるなど夢にも思っていませんでした。不思議な縁を感じます。

不易流行、変わる事のない応援団の基本理念と新しい形を求めて創造発展している熊大応援団が、70年、いや100年と、この素晴らしい伝統をより輝くものにするよう、益々の精神と健闘をお祈りいたします。

## 応援団勇士の皆様へ

元顧問 一門 恵子

応援団50周年、おめでとうございます。その汗の歴史に心より敬意を表し、皆様の努力に万雷の拍手を送ります。



金守先生のご退官に伴う短い期間、顧問をさせていただきましたが、目を閉じれば、当時の部長の牧野君や鬼ヶ原君の凛とした雄姿が浮かび、「易水流れ、寒うして〜」のメロディーが聴こえてきます。特に、閑散とした市民会館のホールでの演武は、「この入りでもやるんかい？」との悔しい思いと共に、忘れ得ぬ光景となりました。その胸を張っての懸命な演武は、ハードな動きのEXILEなどの演技よりも遙かに心を打つものでありました。

その後も、私の出遭った応援団の皆様、立派な社会人として、それぞれの職場の仲間やご家族にエールを送り続けておられるお姿に、懐かしく、また、嬉しく思っております。「人生は、己の幸福の追求のためにあるのではなく、他者に尽くすためにある」等と、独り身の私はうそぶいて生きて参りました。

どうぞ、皆さまも生涯において出遭えた人々を大切に、全身全霊で「フレー フレー！」と

力強くエールを送り続けてください。私も生ある限り、武夫原のある黒髪から、チアの皆様も含めて応援団に連なる皆様にエールを送り続けます！

50周年、誠におめでとうございました！

## チアリーダーBLAZESとの歩み

応援団チアリーダー部監督 石崎 佳菜子

熊本大学応援団OBの皆様、50周年誠におめでとうございます。幸い、チアリーダー部も10周年を迎えることができ嬉しく思っております。これも応援団の皆様の長い歴史があってこそだと感じています。

私は熊本大学応援団チアリーダー部BLAZESの監督に就任して早いもので8年経ちます。平成28年4月にBLAZESは13代目となり、卒業生・在学生は100名ほどとなっています。少子化などの影響もあり無くなる部活も多い中、今現在でも部活が続いていることがとても嬉しいです。私は3代目から携わらせていただいておりますが、1,2代目の皆さんも応援に駆けつけてくださることもあり、現在でも繋がりがあるところを喜ばしく思います。特に1代目の皆さんは私と同級生ということもあり、強いご縁を感じています。



私がBLAZESを担当したきっかけは九州チアリーダー連盟から「熊本大学から監督(コーチ)を募集しているので、やってみないか」と要請があったことでした。佐賀県出身、

福岡大学卒業、福岡在住の私にとって未知の場所でしたが、これも何かのご縁ではないかとすぐにやってみたくと決断しました。まだ新しいチームで、国公立ということもあり、私立大学でチアをしていた私は不安な気持ちもありましたが、学生一人一人がとても暖かく、思いやりのあるチームの雰囲気をみて「このチームでやりたい！」そして「このチームは絶対強くなる！」と確信しました。彼女たちの努力あって次々に新しい技を習得し、初年でJAPANCUPフライデートーナメント出場を決めることができました。また、各代のメンバーが積み重ねてきてくれたもののお陰で6代目では念願の全国大学選手権・決勝進出し(現在でいう準決勝)、それは現在まで5年間継続されています。

BLAZESの強みはチーム力です。他の私立大のようにチア推薦・遠征費などの資金援助・競技マットはありません。その中でも全国大会で実力を発揮できるのは、各代の先輩方から受け継がれてきたチーム内外での思いやりなのではないかと思えます。現在のチームは男性メンバーも在籍し、学部も多様で理系の学生も多数、運動経験も様々です。中には「国公立大学でチアリーダー部をしたいから熊本大学を受験しました！」という学生もいます。これまでチームで培ってきたものが、学内外に伝わっているようでとても嬉しいです。

熊本大学チアリーダーは先輩方が築きあげてきた基盤を守り、ここから更に発展するべく努力していきたいと思えます。応援団OBの皆様、チアリーダーOB、OGの皆様のお力を貸していただければ幸いです。是非お時間のある時に練習や演技会に足をお運びいただければと思います。これからも学生、監督だけでなく先輩方と一丸となったチーム力で15年、20年と頑張っていきたいです。今後とも宜しくお願い致します。

## OBからのメッセージ

## 熊大応援団と私

初代 副島 靖英

人生が長い、短いとは議論の余地があると思う。人それぞれだと思うが、私にとっては短く感じる。短く感じることに幸せを感じる。時間が短く感じられるのは、楽しいことの多かった証のように思うからだ。

初代団長の和田英樹は、真っ直ぐに生きた男で人に悪意があると信じてないようなあけっぴろげなところがあつた。この例は枚挙にいとまがない。なかでも、ドイツ人のホルムート教授の件は、今でも思い出しては笑っている。

早朝練習を学生会館の屋上で、毎日熱心に心を込めて、あらん限りの大きな声で演武の練習をやっていた。朝練を始めて一週間ばかり経た頃、くだんの教授が来られて、ドイツ語で何事か、和田団長に大きな声で話している。団長は「ありがとうございます」と顔を赤くして感謝している。自分たちの毎日の努力を認めてくれた人がいたと嬉しかったのだろう。

ところがである。実際は毎日毎日、朝早くから心を込めて、あらん限りの声で睡眠を妨害していることに、教授は抗議をしに来られたのだ。

二代目の原、田川はにやりと笑い、一年生坊主は呆れて黙し、3代の南はいっそう目を細め、一人古賀だけが「カッカ」と笑った。和田英樹、渾名が「ウルタン」…ウルトラ単細胞という意味に確定したのも、やむを得ないことだと思う。彼も「ま、しょうがないか」と甘んじて受け容れていた様子であつた。その証拠に一切の反論はなかつた。

先日、佐村君のところへ河村会長はじめ4、5名でお参りに行った。その時、奥さんが、佐村君もこの件でよく笑っていたと話された。人の記憶というものは、かなりの部分、同じ環境、おなじ目的の中では共通していると思われる。

50年前に和田団長の“自分を信じて自分が善と思うものに真っ直ぐ歩む、そんなところから熊大応援団は出発した”という思いを自分も遅ればせながら歩いてきた。年を取ると用心深くなるが、裏を返せば人を疑ったりすることにもなる。世の中には、まったく善というのはなかなかない。どこかにマイナスがくっついている。しかし、初心忘るるべからず、応援団の仲間と会うといつもそう思う。

誰の言葉か忘れたが、料理人の料理、坊主の説教、教員の授業（これは私に当てはめたもの）ほど詰まらぬものはない、と言われている。今、不登校の学習支援センターというところで、お手伝いをさせてもらっている。もう一度、素人のような純粋な気持ちをもって仕事を見直すことが必要だと痛感している。

年を取った今、新しく毎日生きるために、応援団の50年を一区切りとして二度目の人生と思ひ直し、また、ポチポチ（ヨチヨチ？）歩いていきたいと思っている。

皆様の健康を祈ります。 一期一会、合掌。



(昭和43年2月 応援団結成記念撮影)

## 50周年記念誌によせて

2代 田川 義隆

おめでとうございます。早いものですね。あつという間の50年間。懐かしい思い出と現在の心境を述べさせていただきます。

思い出すのは、50数年前の正月過ぎ、阿蘇青年の家で次期体育会役員のリリーダースhipト



レーニングの時であった。次期役員候補として私と同僚の故原誠君と共に参加し、指導教官として故金守先生も同席されていた。丁度九州大学の体育会もリーダーシップトレーニング中であった。ある夜、キャンドルサービスがあり、参加団体を代表して演武か校歌かを行うことになった。先に九大の応援団が前に出てエールをして全員で校歌を歌い、その素晴らしいこと。

次に我が熊大体育会は例の円陣を組んで五高寮歌を披露したがその差は歴然としていた。その時に熊大体育会として何をなすべきか？心に感じるものがあり、応援団を作ろうと決意した。

その後、空手道部キャプテンを工藤先輩に譲った和田先輩に正式にお願いし、快く引き受けて頂き、空手道部の新入部員全員で即席の応援団を結成した。そして、既に活動していた熊本商科大学に学び、団旗を作り、福岡・長崎のインカレの応援に出かけ精一杯応援した。そして正式組織化した。お借りしていた空手道部へ部員を帰し、残留した古賀君と、委員長の私と副委員長の原君は元のクラブへ戻らず応援団に加わった。その時のメンバーが副島先輩、南君等である。そして新しく参加者を募集し正式に熊大応援団として再出発した。

そして「応援団とは何のためのクラブか」「我々熊大の応援団はどうあるべきか」日々自問自答しながら応援団魂を培い、応援団活動を通して自分を鍛え、熊本大学全学の為に応援する精神を養ってきたと自負している。3年毎のOB会で応援団の近況を知り、紆余曲折し、究極の休部もあつたりした。最近でこそ、女子チアリーダーで盛り返し現在に至っている。時代に相応しいクラブに変身し人気を博していることは、大変喜ばしいことである。

私事で申し訳ないが、昭和40年代の東大紛争に代表される学生運動が盛んな時代を経験し、卒業後某電器グループ企業に就職し、日本のあの高度成長期を支えてきた。その企業も成長が伸び悩み、海外展開・円高・・・そして1995

年、地球環境問題が注目を浴びだした。国際規格ISO-14001も注目を浴び、我が社もその取得に向けて動きだした。その時、私は52歳。開発研究部門から品質管理部門へ配置転換を申請したが適わず、それならと早期退職をした。当時の私は一企業のために働くのではなく、多くの企業に役立つISO登録支援企業に再就職した。折をみて独立し10年近く働き、遂3年前に廃業をした。その間ボランティアで生活環境調査会を立ち上げ、現在も環境社会新聞社で、地球温暖化問題とエネルギー問題の論説委員を無報酬で行っている。



(昭和43年4月 新入生歓迎コンパ)

地球温暖化問題は、今や待った無しの状況であるにも関わらず、政府や企業は遠い世界のように感じており、なんら具体的政策を真剣に打とうとしない。企業活動の傍ら地球温暖化対策のために全国60回の講演計画を立て30回まで活動したが資金が尽き中断している現状だ。従来のやり方通りでは徒労に終わると判断し取り組み方を変更し、活動を再開している。皆が知っているつもりが、全く解かってないのが地球温暖化だ。宗教と同じだ。再度云う。いまや地球温暖化問題は待った無しの状況だ。しかし米国、中国、ロシア、日本・・・等は経済成長や儲け話や株価の上下で一喜一憂し混迷を続けている。このような社会情勢は、近年では幕末から明治維新、そして先の二回の世界大戦と似てきている。2028年2℃突破、2100年4℃突破は、受ける被災のレベルはその比ではないことを警告しておく。この状況の中で我々は何を

なすべきか、我々の使命は何か、真剣に考える時である。私の最近の思いは、大規模な妄想型の温暖化防止策でなく、逆に小規模の実施可能な方法の取り組みすなわち「地域分散の完全完結型の資源循環型社会の構築」に向けて環境社会新聞社の友人と行っている。それは我々がこの地球を痛め続けた償いであり、このように考え行動する精神こそ応援団魂であり、いまも我が心に生きている。最後に、故金守教授、故和田先輩、故原誠君と共に、この応援団魂を大事に頑張られることを祈りたい。 押忍

### 応援団の50周年誌によせて

3代 古賀 正博

今でも、19歳の春の事をよく覚えています。

初代の和田さんに誘われ空手部の1年生が応援団員となり熊商大グラウンドに合同練習に行き、お手手フリフリ、しこ立ち、発声練習などを1週間やりました。しかしそれが今応援団の練習の基礎となっているわけですね。

2年になる時には、和田さんは空手部に戻るか、応援団に残るかを全員に選択決定するように言われました。その結果私だけが残る事になりました。何とすばらしい選択だった事か今も当時の自分に感謝しています。



(昭和43年11月 商大秋季定期戦)

人生の絆をずーと感じながら生きられる事の楽しさは、計り知れません。今私の部屋には

和田さんが受けた平成17年3月教育者文部大臣表彰記念の「垂れ幕」があります。みつお作“しあわせは いつもじぶんの ころろがきめる”が飾ってますが、私に言わせるとみつお作ではなく、わだ作と感しています。

卒業をして46年経ちますが今も尚応援団の精神で生きています。人のために何かをしなくてはと自分自身に言いながら、美味しい焼酎を飲んでます。孫に男の子が一人居ますが、彼が来るのが楽しみです。泊まる時は必ず横に来て眠っていますが、夜中けられたり布団から飛び出したりよく眠れませんが実に楽しいものです。心が真っ白の時こそ、真剣に語り行動し学んでほしいと思います。最後になりますが、応援団の50周年を心よりお祝いいたします。

### 近況報告

3代 南 茂司

半世紀・50年の重みを感じながら、改めて当時のことを思い出そうとするが、断片的にしか思い出すことができなくなった。もう、既にボケが始まっているようだ。

団の身近な先輩・後輩の中には亡くなられた方もおられる。本当に悲しいことだ。私もそろそろ準備をする時期に来ているようだ。……”終活”……でも何か自分の性格としてバタバタしながら死んでいくような気がする。ま、それでも良いか!!

皆様も健康に留意され、長生きしてください。



OB会を毎年楽しみにしています。

(写真は昭和45年3月 追い出し会)

## 遠い昔のありし日のエピソード

3代 (吹奏楽初代主持) 野田 浩

### エピソード1

古賀と南が子飼橋近くの古賀の下宿で飲んでいました。私の下宿で飲みなおそうという話になって、南のバイクで桜山中学校裏の私の下宿に向かっていた。古賀はドテラを着て一升瓶を片手に持って後ろ向きに座っていた。熊本大学に来たあたりでパトカーから追いかけられた。古賀曰く「南シャン飛ばせ、パトカーがきたぞ!」と言いつつパトカーに向かっておいでおいでをしてからかっている。125ccのバイクがパトカーにかなうはずもなく、すぐに捕まった。お巡りさん曰く、「今日は酔っているようだから明日署に出頭しなさい。」ということで私の下宿で飲みなおした。翌日二人が出頭するとお巡りさん曰く、「おまえらみたいにはばかな人間は見たことがない。今度から注意するように」ということで、おしかりだけで放免された。…遠い昔の古き良き時代のハナシ。

### エピソード2

立田山登り口の角にある下宿の2階、犬童の部屋で古賀と私と3人で雑談していた。古賀が窓辺に座って道路を見下ろしていたら団員が自転車で通りかかった。古賀が名前を呼んだが自動車の騒音にかき消されて聞こえなかったのか、だまって走り去った。古賀は突然窓枠を乗り越えて道路に飛び降り、はだしのまま団員を走って追いかけていった。…遠い昔の野生の団長のハナシ。

### エピソード3

ある団員が辞めたいと言って来なくなった。南は練習終了後誰にも言わずに酒を持ってそ

の団員の下宿に行った。朝まで飲んでずっと話をしていた。団員がその後戻ってきたのかどうかは記憶にない。南の場合、相手をなだめたり怒ったりしない。ただ、静かに相手の話を聞いて、相手の身になって物事を考える。誰にでもできそうで、誰もまねできないゆるやかさとおおらかさがあった。

…遠い昔の吞兵衛の副団長のハナシ。

3代目幹部の昭和43年(1968年)は70年安保闘争の嵐が吹いていた。あの学園紛争の前後で学生の気風も町の人たちや警察官が学生を見る目も大きく変わったとを感じる。ただ、学生運動にかかわった団員も、そうでない団員も応援団では分け隔てなく包み込んでいた、そんな包容力のある集団であったと思う。

## 創立50周年を振り返って

4代 上城 洋一

約50年前の自分を振り返ると、まず高校時代の自分が目に浮かんでくる。行きたい大学、学部(分野)等何も考えず何となくがむしゃらに理系向きの勉強をさせられ、入れそうな大学、学部を何となく選び、結果的に願書をだした学部は理系から文系にわたり全て異なっていた。



(昭和46年2月 追い出し会)

たまたま、熊本大学の薬学部合格したことでのその後の方向性が自分の意思にかかわらず決まったように思える。しかしながら、大学に入ってから、逆にあまり流されずに自分の意

思で動いたように思われる。

応援団とのかかわりは「和田先輩の追悼の辞」に記載したように、豊津高校出身者は何が何でも応援団へという道筋がしかれていて多少抵抗したが、最終的には気持ちが引き込まれるように入団していた。4代目は、新入生として初めて応援団に入り、応援団としての創成期であり、組織等の基盤が固まった年代である。当時は、初代の和田先輩、副島先輩、2代の田川先輩、原先輩、3代の古賀先輩、南先輩の方々でお分かりのように個性の塊の方たちばかりで、和田先輩＝ウルタン（ウルトラ単細胞の略）と呼ばれ、基本的には応援団はウルタンでないとやれないという印象であった。

4代目の4年間の活動では、新しい演武の創作、応援団団祭開催、遠歩参加、立田山駅伝参加、ボシタ祭りでの鶴屋神輿バイト参加、火の国祭り参加、県外(豊津高校)での合宿、阿蘇新入生歓迎コンパ、正月のほうらく饅頭会、武蔵塚へのランニング、OB会誌「剛毅;URUTAN」の発行等が思い出される。

大学卒業時の自分を振り返ると、4年間応援団に所属して何が自分によかったか？

- ・なんといっても「根性」がついた。
- ・何事にも集中できるようになった。
- ・あきらめない気持ちがもてるようになった。
- ・継続して練習すれば何とかさまになる。
- ・心身ともに以前より強くなれた。
- ・本当の意味のチームワーク、団結心とは？が理解できた。

現在の熊本大学の他の体育会の部でのOB会は、途中で途切れたり、活動もほとんどしていないとことが多いように聞くが、応援団がなぜ50周年記念行事ができるのか？

- ・熊本大学応援団の心意気が脈々と各年代の団員に引き継がれてきている。
- ・俗にいう応援団団員の絆が50年間続いている。
- ・10年前よりチアリーダー一部が発足し、リーダー一部と協力体制になり、新生応援団の型として、

継続している。

- ・特にチアリーダー一部の躍進により応援団活動が大学全体に認知されている。

ここで、是非申し上げておきたいことは、チアリーダー部の実力である。常に全国大会でトップクラスにあり、他の部活動でこれだけのレベルを維持している部はないと思われる。これはリーダー部と同様に、日々地道に繰り返し練習に明け暮れていることによると思われる。

今後の熊本大学応援団活動のポイントは、いかにリーダー部の団員を増やすかにかかっている。OBも現役とともにこの問題に取り組んでいくことが重要である。さらに50年後を予想すると応援団は、団員のほとんどは女性がリーダー部・チアリーダー部を占めて、OB会の形も大きく変化しているかもしれないが、OB会はだけは永遠に継続していただきたい。

最後に現在の自分を振り返ると、熊本大学に入学し、応援団活動ができ、薬学部で学べたことが今の自分の心身の形成に大きく影響をしていることはまちがいない。残念なことは、この50周年記念の祝賀会で、和田先輩、同期の佐村氏と共に祝うことができないことです。

熊本大学応援団本当にありがとう！ 応援団が50年も継続しておめでとう！ これからも熊本大学の応援をよろしく！ そして、OB会のこれからの存続もよろしく！ 押忍

## 応援団創設50周年、おめでとう

4代 児倉 静二

あの日からもうすぐ50年…

入学式を待たずに合宿に参加した日のことが忘れられない。立田山に広がる白い雲、青い空、楠木の香りが咽ぶ春の日差しの中で、胸の奥底で秘かに血が沸き立った青春の日のことを。先輩の罵声に励まされ、際限のない反復運動の日々…

自分の倍もありそうな後輩を背負って三桁

を超える階段を駆け上がった日々のなんと楽しかったことか。部費稼ぎのアルバイト、雑魚寝の合宿、18勝19敗の定期戦、寒風の江津湖駅伝、真夏のインカレ、阿蘇遠歩、数多の壮行会に演武会、学ランの汗のにおいがなつかしい。酒もよく飲んだな～、いつも皆一生懸命だった。50年の歴史を共に刻んだ一人一人の仲間や顧問先生…

団の活動を支えてくれた体育会や各クラブの面々、陰で支えてくれた人たちにも心から感謝しよう。みなさんの努力と支援の賜物だと思う。応援団などというおよそ誰も進んで入りそうもないクラブがこれほど永く続くなど、だれが想像したであろう。いま、キャンパスには躍動するチアの軍団あり…

ほとぼしるエネルギーと歓喜の声は今も昔も変わらない。彼らの俊敏さは、青春のあかし。武夫原には薫風が今もそよいでいる。昭和世代よ、あともう少し頑張ろう、後輩たちのために。



(昭和46年2月 追い出し会)

好漢犬童君、田尻君、中川君、内田君、紅顔の間宮君、そして和田先輩、原先輩、佐村君、金守先生も、共に肩を組み思いっきり歌っているだろうか、天国にて…

「易水流れ寒うして」を…

## 今、思うこと < 当時を振り返って >

4代 桃坂 恵次

熊本大学応援団、創団50周年、おめでとうございます。歳月の流れは本当に早いものですね。我々も年をとるはずです。昨年観た映画「母と暮らせば」の中で、「武夫原頭に草萌えて」を歌うシーンがあって、あらためて武夫原で過ごした日々を思い出しました。

ここに、当時の日記を参考に、あの時代を綴ってみようと思います。1967年(昭和42年)4月11日に熊本大学の入学式、そして入学すると同時に選択の余地なく、応援団に入団しました。4月15日から講義開始、4月17日から応援団の練習が始まりました。それからというもの、あの過酷な練習は皆さんも経験したと思います。

「いつそう応援団を辞めてしまおうか。応援団を辞めようと思ったことは、これで何回目かなあ。しかし俺には辞められない理由がある。それは、和田さん、副島さん、古賀先輩たちが俺をしかっているからだ。『桃坂のバカ、今辞めて何になるか、それでもお前は男か』…と、でも今の俺にとって応援団なんてそれほど魅力がなくなった。練習に出てもあまり張り合いがない。これから俺は何を目標にすればいいのか。」…そんなことを日記に書いていました。

そして、11月24日、「熊本大学応援団結成記念演武会」が当時の水前寺体育館で盛大に開催されました。今までの血のにじむような練習の成果を、和田団長以下18名の団員が一丸となって成功させたことに、何とも言えない感動を覚えたことを記憶しています。もうひとつ、特に記憶が残っていることは、太鼓が寄贈された時のことです。花畑公園で、学長も参加して寄贈式があり、お礼に演武も披露し、下通り、上通りを通して熊本大学まで運ばれました。その間、鼓手として大太鼓をたたきながら行進するのはきつかったけど、ちょっと優越感に浸ったことを思い出します。そして、1969年(昭和

44年)、いよいよ3年生、第4代として活動することになりました。

★6月 幹部交代—総務長になる

・全九州応援団連盟会議出席(於：福岡市)

★7月 九州地区インカレ(熊大主管)

・インカレのための強化合宿(17日間)

・九州地区大学応援団市中パレード

・全九州学生応援団連盟祭参加(招待)

・インカレ応援

・体育会機関紙「武夫原」に掲載

＝応援団に感謝の拍手を＝熊大応援団は、このインカレ期間中、熊大チームの応援のために、この暑さの中を競技場から競技場へと駆けまわってくれた。我々は、彼らの応援にどれほど励まされたことだろう。彼らの努力に対して、今度は我々が感謝の拍手を送ろうではないか。応援団の諸君ありがとう！

★8月 天草白鶴浜海水浴場合宿：3泊4日

★9月 金守先生の教授昇進のお祝い

★10月 第1回熊大応援団団祭

(県立図書館大ホール)

・熊大応援団OB会誌「剛毅」発行(第1号)

★11月 阿蘇～熊大(60km)遠歩レース参加

・応援団は、4位、6位、7位、9位、10位

・定期戦前夜祭)



(昭和45年11月 阿蘇遠歩)

★12月 応援団練習納め(ぜんざい会)

思い出として、どうしても忘れられないのは4年次の遠歩レースに安倍さんと沖さんの三人で参加、服装は剣道着に高下駄、手には一升瓶

と替え高下駄を持って、阿蘇山頂から熊大まで歩き通しました。誰も完歩でいるとは思っていませんでしたが、何とか13時間50分でゴール。足の甲まで腫れて大変だったことを思い出します。最後に、「結成記念演武会」に記されていた熊大応援団の“心”というべき言葉を載せておきます。

「我が熊本大学応援団は、学園の発展並びに社会のために寄与し、結成当時の当団のあるべき姿と精神を一層究明し、学園の中にその精神を取り入れ、学生の模範たらんことを誓う」

## 和田さんとの思い出

4代 木村 英美

和田さんは豊津高校の先輩です。

2013年6月に東京同窓会にてエールを切る和田さんの最後の勇姿です。

応援団結成時、和田さんとの出会いは受験最終日にあります。試験終了後、武夫原、先輩



の下宿先に案内され、夜には当時辛島町電停前にあった「後樂園」で未成年の酒盛り、下宿でごろ寝でした。晴れて合格したあかつきには、豊津出身の第4代7名(佐村、児倉、上城、桃坂、吉田、吉松、木村)は武夫原の一角で基礎体力、発声練習の日々を送っていた。

先輩の気魄の巻頭言の勇姿が思い出されます。私は2回生の時退団し、5大学体育連盟の役員をしました。

## 50周年OB会は懐古に浸りたい

5代 田村 俊充

泥臭い猛者集団が華やかなメッチェンに彩られるようになると当時、誰が想像出来ただろうか。最近「なでしこジャパン」を筆頭にレスリングや柔道他スポーツ界に於いても女性の躍進が著しい。



(昭和45年11月 商大定期戦)

また、私が従事してきた建設業界でも現場監督にドボジョが現れ、重機運転手や鉄筋工等一般作業員にも女性の進出が当たり前になってきている。今は男女の棲み分けが

あらゆる分野で接近してきているのではなかろうか。そう考えると応援団の様変わりも特に不思議な現象でもなく、当世風だとも理解できなくもない。応援団創設50周年記念OB会の当日はただひたすら、45年前にタイムトリップして単細胞集団の一員なり、懐古に浸りたいと思っている。

## 50周年によせて

5代目 野村 敏秋

早いもので50周年を迎えるとは、いささか感慨深い気がします。当時、私の髪の毛も角刈り、今では大分少なくなり白髪andハゲになっています。

私が入団したのは、創設期の後の5代目です。

大学に入って何かスポーツをやろうと思っていた時に誘われたのが始まりです。長い付き合いになりました。あの濃緑の森の中、蒸し返すような暑さの中での発声練習、腕立て伏せ等、今ではできないが、あの頃が青春だったのかと思っています。

春には阿蘇での歓迎会、若葉に映える草千里、根子岳…。夏の子飼いのお寺の合宿では、リヤカー、学館の朝食と牛乳…。秋の遠歩では夜0時に阿蘇から大学まで、暗い夜道を行けども、行けども着かず参ってしまったこと…今ではいろんなことが走馬灯のように思い出されます。

今では学部の異なるいろんな人達と沢山の行動が一緒にできた事が財産と思っています。大学を卒業してから、東京(製薬会社)で14年、宮崎(製薬会社)13年、福岡(薬剤師)豊前市で11年、豊津で3年となり、ようやく出身地で有機農業をやっています。

春には菜の花ロードを歩き、夏には早朝の稲穂の道を、秋にはコスモスの風に吹かれて散歩しています。6000歩～10000歩/日が目標です。これからも応援団の会があれば、時間の許すかぎり参加したいと思います。 “押忍”



(昭和46年2月 第2回応援団演武会)

## 『役割』

5代 茅畑 篤

奇しくも 44 年のサラリーマン生活を卒業する今春、創立 50 周年を迎える記念の年となりました。顧みると、熊本大学入学・応援団入団が私の人生最大の転換点でした。爾来、今日まで、一貫通貫の道程でありました。そして、此処からまた如何様な道のりを歩むことか……。



(昭和 46 年 2 月  
第 2 回応援団演武会)

OB 会誌寄稿のことは、その都度、念頭にありながら、なかなか文字にならぬままに、ご無沙汰にうち過ぎてしまい、我ながら残念なことでした。この度も早くからあれこれと思い

を回らしているうちに、よもやの提出期限切れとなり、相も変らぬ不甲斐なさに落胆していたところ、締め切りの期限延長の案内を見てついに只今書き始めた次第です。ところが、入団以来 48 年も経って、今や前期高齢者ともなると書きたいことが膨大にあって、超長編小説になってしまいそうです。(ここで三日が過ぎてしまった)

表題にした「役割」ということについて、書くことにしました。抽象的・観念的な話となりそうで、些か申し訳ない気がいたしますが、この根っ子には熊大応援団に在ったればこそ、様々積み重ねてきたことが山々あってのことです。

気力・体力の限界を超えるひたすら厳しい

練習の日々。一度に数億の脳細胞が消滅し、ついには一個になってしまったらしい酒の日々。同期で最も基礎体力・運動能力に乏しかった自分が幹部交代でまさかのリーダー長。不思議なことに先頭に立つと意外にも何とかなったことでした。心身ともに、ゆとりすら感じることもありました。初めての人事らしい下命を受けた事でしたが、今更ながら単細胞集団ならではのことであったかと感じています。

課題はまさに乗り越えるために与えられる。「役割」を果たしていくということ。それは人生そのものであります。そして、必ず支えてくれる仲間が居てチームワークで組織が、社会が存在し続けていくということは何時の間にか学習させていただいていたと思います。

応援団の四年間で、この「役割」なるものが誰氏にもあって、それは様々ですが、これを全うするために只管努力することの大切さ、意義深さを叩き込まれ、そのことで何ものにも代えがたい大きな沢山の財産を得ることができました。

この後は組織の一員として与えられた役割ではなく個人として果たすべき役割を自ら明確にして歩いていこうと思っています。これから先の人生行路にも団で培ったこの思いが屹度大いなる推進力となってくれることと確信しています。とても嬉しくありがたいことです。

今までもそうでしたが、これからも此処一番に際して、事ある毎に、腹の底で太く小さく「押忍」と呟くことにしています。 押忍 (追伸)

熊本大学応援団創立 50 周年、誠におめでとうございます。これからも小生の宝物であり続けてください。会員各位並びに現役諸君のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。河村 OB 会長はじめ役員の方々には会務の企画運営に当たり大変なご苦勞を、ご熱心に努めていただき感謝いたしております。



## 50周年記念に寄せて

5代 犬童 正仁

私は5代統制長であった故犬童一昭の弟です。年代から云えば、7代の現河村会長他、竹下、前島、原田他総勢9名と同期で法文学部法学科を昭和49年3月に卒業しました。特に、河村、前島両君とは大学の4年間ずっとクラスも一緒でした。兄が昭和54年1月に亡くなり、しばらくしてから河村君から応援団OB会の準会員にならないか、と誘われ、兄があれ程熱中していた応援団に些かでも関わり続けたい、少しは兄の代わりが務まるかも、と考え入会させて戴きました。初めてOB会に参加した時、初代副団長の副島先輩から「マーチンよく来てくれた」と言われた時は涙が出ました。

実際、学生時代は応援団員では無いにも拘わらず、兄に連れられて、草千里での新入団員歓迎コンパ他、藤崎ホテルでの各代幹部交代式、三校定期演武会、阿蘇の遠歩等の各行事には殆ど同席、参加し、(演武、練習を除いて)先輩、後輩(10代まで)の皆さんとよく酒を酌み交わしたものです。ボシタ祭りの鶴屋の御輿担ぎのバイトもしました。あれは何処か浄行寺近くの皆が合宿しているお寺に4代の安倍さんと深夜酔っぱらって押し入り、皆からひんしゅくを買ったこともあったなあ。



(昭和46年4月 新入生歓迎コンパ)

古き良き時代を今でもよく思い出します。応援団の先輩後輩の皆さんとのこの長い付き合いは、もう47年にもなりましたが、私の人生

の良き糧となっており私の自慢の一つでもあります。大好きだった佐村先輩も亡くなり、少し寂しくなりましたが、未だ健在の諸氏には今後とも、宜しくお付き合い戴きます様お願い申し上げます。ちなみに昨年のOB会総会の後、応援歌を収録しましたが、私は殆どの歌を歌う事が出来ました。記念演武会では演武は出来ませんが、身体障害認定の三小田君のサポートをしながら、応援歌を高らかに歌いたいと思っています。

私は、地元宮崎銀行勤務から、(中小企業庁)再生支援協議会、を経て(独法)航空大学校(非常勤)監事を昨年3月に退職して、現在は年金生活者。妻と宮崎市内に二人暮らし。息子は熊本法学部を平成11年3月に卒業し、財務省から格付投資情報センター(略称、R&I)を経て、現在野村アセットマネジメントのポートフォリオマネージャーとして働いております。平成25年5月ようやく結婚。ちなみに嫁さんは早稲田大の文学部卒で在学中はチアリーダー部にいたらしい。今のところ、子供無し。娘は西南学院文学部外国語学科英語専攻を平成15年3月卒業後、東京海上保険に入社し、平成15年7月職場結婚。婿殿は、北九州市出身、神戸大学経営学部卒、歳は息子と同じ。今は京都支店勤務。子供は、現在5歳の娘が一人だけ。この子が滅法可愛い唯一の孫であります。

なんと、少子高齢化の現代を地で行く我が近況であります。このままでは我が栄光の犬童家が絶えてしまうのでは、と危惧している今日この頃です。

## 新たなるスタート TTPで!

6代 福岡 潤

立春を過ぎたが、まだ底冷えがするこの時期に、早朝家の外に出てまだ明けぬ満天の星空を眺めるのが好きだ。夜が明けると庭の水仙、ツバキ、桃、金柑、畑の大根、白菜、キャベツ、

ブロッコリ達も皆凛とした佇まいである。昨年帰郷し一年が経過したが、一日の活力を得るには十分な光景である。

思えば47年前に熊本での生活が始まったのだ。当時は全国的な学生運動の最中であり、我が熊大も例外でなく、夢にまで見た学生生活とは程遠く、専ら「練習」に明け暮れていた。ああ！思い出したくもない立田山の階段のうさぎ跳び、市街地に向かって叫んだ発声練習、なぜかコツを掴むと腕が軽くなったお手振り振り。それぞれにタフな先輩が居て憎いやら、呆れるやら…。阿蘇～熊大間の遠歩、ボシタまつりでのバイトも懐かしい思い出だ。



(昭和46年7月 インカレ応援：大分)

人生67年の中の僅か4年間だったが、熊本では今までにない苦痛、悩み、喜びを経験した。数限りない語らいの場には、いつも先輩をはじめ個性的な同志（敢えて同志と呼ぼう）がいたなあ～そんな時に感じた、お互いを思いやる

(T: Thoughtful) 気持ちとあらゆるものに対し感謝する心 (T: Thanks) が、その後の礎になった様な気がする。

先日、田舎の小中高校の音楽祭に触れる機会があった。何しろ素朴な子供たちなので野暮ったさは残るものの真摯な立ち振る舞いに感動した。今回彼らの行動に接し、もっと地道に、丁寧に (P: Politely) 歩を進めたいと思った。そして自らが経験したことを少しでも後進に繋げていけたらと思う。初代団長の和田英樹氏が「剛毅」10周年記念号で述べておられる。

一生懸命生きる

力いっぱい生きる

己を信じて精一杯生きてきたことに喜びと誇りを感じる日がきつとくる

必ずくる

その日まで

黙って歩け

の心をあらためて嘯みしめる。

新たなるスタートは、万感の思いで、静かに、TTPで行く！

## 応援団は続く

6代 野上 敬文

40数年前、学生会館に食事に行き、偶然書かされた一枚の誓約書が思いもよらぬ流れに巻き込まれた。

阿蘇草千里での歓迎会、武夫原頭、龍田山、熊本城の練習、武蔵塚、菊池水源地、熊本空港への遠出、大学対抗江津湖駅伝参加、倶楽部対抗立田山駅伝、阿蘇の遠歩参加、合宿（豊津高校、天草、地獄温泉、鹿児島大学 etc）、藤崎台野球応援、インカレ（大分、福岡）、演武会（熊本図書館、市民会館）などいろいろあった。倶楽部のバイトでは土方、上熊本駅での貨物車からのセメント降ろし、ボシタ祭りの鶴屋神輿担ぎがあった。小倉駅、博多駅、熊本駅での祝いの演武を披露した。一人では出会えない行動が、一人ではできない行動が次々と実行された。驚きの行動が不思議な体験です。



(昭和46年7月 インカレ応援：大分)

一番よかったのは、卒業後の出会いです。長崎県へ、知り合いのいない対馬へ9年間出張。その後、長崎市へ。ここからが再出発が始まる。長崎県には、知っている人、面識のない人等々の仲間がいた。時々集まって宴会をすること、私にとっては大事なひと時になった。年代は違いますが同じような時間を過ごした仲間は良いものだと思い、不思議な気持ちになった。これからもよろしくお願いします。

## 輝いた時間 団に感謝

6代 林 和徳

今している事が今春には終了するので、4月からは身の周りの整理(断捨離)をぼちぼちやろうと思っていた矢先に五十周年事業に使用する各代の写真を10枚程度選択して送って欲しいと事務局から要請があり、整理に取掛るには少し早いですが学生時代5年間のアルバムの写真をパソコンに取り込み、事務局が必要とするものは定かではなかったがデータをUSBに落とし事務局へお渡ししました。写真の整理をしながら、40年以上昔を懐かしく思い起こしました。

当時は1968年の東大闘争そして全共闘運動で大学紛争の真っただ中で、熊大も例外ではありませんでした。1969年3月卒業式に重なった入試で行った時には学内が騒然としているというような印象はなかったかに記憶しておりましたが、4月再び来熊した時には学舎が占拠されており、学校は通常の運営ができておらず、入学式はなく授業もないという状況で、受験勉強しかしてこなかった私には全く思ってもみなかった学生生活の幕開けでした。

入試で来熊時には、母校豊津高校(現育徳館高校)の先輩方が駅でのお出迎え・宿泊所への案内・試験会場の案内等々とても親切な対応をして頂き好印象を持っておりましたが、我高出身者は空手道部か応援団に入部するのが決ま

りの如く言われ二者択一を迫られ同級生のほぼ全員どちらかに入部せざるを得ない状況でした。私も何故だか今では定かではありませんが応援団を選択しました。こうして私の団生活が幕を開けました。



(昭和45年7月 インカレ in 福岡)

日々授業がないので夕刻武夫原のグラウンドに出かけ、受験生活で肉体は運動に極めて不適格な体型をしていた当時の私には厳しい練習の日々でした。入団初期には立田山へのランニング・魔の階段のランニング・お手で振り振り・発声練習等基礎体力作りを中心とした練習メニューの繰り返し、その後定期戦に備え学生歌・必勝の歌・実践演武を合宿もして習得し戦場へ臨みました。これでやっと応援団の一員らしくなれました。練習の苦しさはあったものの、合宿での集団生活・部費稼ぎのバイト・阿蘇遠歩・公私の飲み会等々楽しいことが多々あり、まさに学生生活は団生活そのものでした。

一方勉学の方は、私の工学部化学系学科だけが先行して夏頃にいきなり専門課程の授業を開始されやっと正常な学生生活になるはずなのですが時すでに遅く勉学意欲は減退しており、時には同期に助けられて取得した単位もあり、学業でも団にお世話になりました。結果1年ダブリはしましたが無事所要単位数を確保でき学校を卒業出来ました。

しかし、就職先の入社日が3月中旬であり卒業式に出席できず、またか！高校の卒業以来入学・卒業の公式行事には縁がなかったが、団では新入生歓迎コンパに始まり追出しコンパ

であり、この間公私にわたりいろいろとお世話になり輝いた時間を過ごすことができました。先輩・同期・後輩に感謝！感謝！です

それぞれの年代にその年代でしか放つことのできない輝きがある

(齋藤茂太先生の言葉)

## これからも応援団のつながりを求めて

6代 遠山 栄二

学館の前で声を掛けられたのは47年も前のことである。それからこの歳まで応援団と関わってこられ、さまざまな世代の人たちと応援団での経験・思いを共有出来るのは感慨深いことである。



(昭和46年3月 春合宿-中津)

私は58歳の時に、民間会社からある財団に移った。ここは同年配の各種企業の出身者が主体で、様々な趣味・特技を持った人・その道の達人も多く、サークル活動が盛んである。私も楽走会とハムクラブに入り、新たにアマチュア無線も始めたが、ランニングは50歳の頃、太りすぎのため始めたが、ずっと走っている。走りの延長で山にも年2~3回は登っている。現在、自由な時間もある程度確保出来、体力も維持できている。これも応援団の基礎体力のおかげと思っている。これからも応援団を通じて、皆さんとのつながりを広めていきたいと思っている。

## 感謝、感謝、皆の応援団を目指す！！

7代目 河村 久幸

熊大応援団が50周年を迎えることができ本当に嬉しいです。熊本に住んでいるということでOB会の役員を当初からさせていただいた関係もあり特に感無量です。

昭和49年、応援団に入団するとき有吉先輩(6代)にしつこく勧誘されました。周りから応援団に入部するなんて、とかなり反対されたのを覚えています。しかし何か魅力を感じたんだと思いますが、何か分からず何故か入団してしまいました。後でなんと軽率な行動を取ったのだろうと反省しましたが、今は、有吉先輩に大変感謝しています。

1回生、2回生時代は厳しい練習が辛くて、キツクてしかたがありませんでしたが、退部しようとは思いませんでした。それは自分の周りの団員が次ぎ次ぎに退部の話が出てしまい自分のことまで考えが及ばなかったことと、掛け替えのない友を失うことが考えられなかったからです。

そして厳しい練習で自分は自分が少しずつ強くなっていくのが実感でき、今まで自分に自信がなかったのですが、少しずつ自分に自信ができてきたのを実感し嬉しく思いました。



(昭和45年9月 ポシタ祭り)

幹部時代の我々7代目は、応援団が大きな節目を迎えていると感じました。それは初代から直接指導を受けた最後の代は4代目、その4代目から指導を受けた最後の代が我々7代目です。

応援団の初代からの精神を引き継ぎ後世に伝えることが我々7代目の責任だと感じ、当時の応援団は部室、団旗、太鼓、団員全て揃って恵まれた環境でしたが、何もなかった初代の頃を振り返り、7代目の方針を「初心に帰る」としました。厳しい練習がスタートしました。その練習が我々の自信となり応援団の伝統と押忍の精神を引き継ぎ更なる発展を遂げたと思っています。

大学卒業と同時に肥後銀行に入行し、今、肥後銀行を退職し関連会社に勤務していますが、銀行時代、関連会社時代共に、自分は大学時代熊大応援団でしたので、社会人になっても、お客様を含め自分の周りの人の応援団になると心に決め日々努力してきました。

どれだけでできたかはお客様と行員が判断することだと思いますが、自分としてはやりきった満足感は十分あります。今後も引き続き周りの応援団であり続けたいと思います。

今確実に言えることは、熊大応援団に在籍したから、熊大応援団員の先輩、同輩、後輩と練習、実践応援、酒を痛飲しながら、人間と人間のぶつかり合いができた皆のお蔭で今の自分があります。ありがとう熊大応援団。熊大応援団永遠なれ。

## 私の応援団員時代

7代 竹下 次郎

OB会員の皆様、現役の皆様、お元気ですか？私は昭和45年に熊本大学に入学しまして、当時の熊本市民会館での入学式が終わり、昼飯を食べようとして黒髪の学生会館の前を通る時に、新入学生を勧誘していた応援団の先輩に捕まったのが御縁でした。その時の4代目団長佐村さんが、私の坊主頭と学生服に目を止められたとのことでした。

御存じのように応援団の練習は大変厳しいものでした。私は高校時代に、肺炎から生死の

間をさまよう状態となり、1年近く療養生活をしましたので、大学に入った時には、まだ体力が十分には回復していなかったようです。練習では特に走るのがきつかったですね。でも、応援団の練習のお蔭で体力に自信が持てるようになりました。後から考えると、これは本当に有難いことでした。

応援団では、顧問の金守先生、先輩、同輩、後輩の方々に本当に良くしていただきました。感謝の言葉しかありません。酒もたくさん飲みました。飲み過ぎました。応援団を止めた後も飲み続けて、17年前の48歳の3月31日を最後に禁酒しました。仕事を止めたら飲みたいと思いますが、何時になるかまだ分かりません。でも、楽しみにしています。

当たり前のことですが、大学には勉強をするために入学しました。しかし、最初からつまづきました。劣等感に苛まれました。自分は大学に居るべき資格はないのではないかと苦しみました。医学部進学課程の2年間は何とか通過しましたが、3年目の専門課程1年になり遂に足が学校に向かわなくなりました。朝から様々なアルバイトをし、夕方には応援団の練習、夜は酒を飲むという生活になりました。仕事がない日には、龍田山や熊本城、金峰山などに出かけて迷いや不安を紛らわすような毎日でした。先の見えない暗い日々でした。でも、応援団の練習と仲間のお蔭で大学を止めずに済みました。



(昭和46年9月 阿蘇地獄温泉合宿)

4回生となるのが近づくころ、応援団の同輩

達は社会に巣立つ準備を始めました。私もやっ  
とのこと、もう一回勉強に全力で取り組んでみ  
よう、再度挑戦してみようと気持ちを切り替え  
ました。当然のことながら、出席日数不足で1  
年留年となりましたが、その後、何とか学業を  
続け、仕事に付き、今日に至っています。

40年以上も前のことです。熊本大学応援団員  
となり苦しいことも多かった筈ですが、仲間と  
一緒に貴重な青春時代を送れたことは本当に  
幸せなことだと思います。

熊本大学応援団の形は時代とともに変わっ  
ても、若い方々が悩み、苦しみながら、勉強と  
ともに学生時代に様々な経験をして社会人とし  
ての力を付けていかれるのは、今も昔も変わ  
りはないことでしょう。カ一杯やってください。

お忙しい中、OB会の御世話をされている  
方々に心から感謝申し上げます。OB会の皆様、  
現役の皆様の御健勝をお祈りします。

### 応援団を卒業してからの、その後と近況

7代 前島 光幸

これまで、いろいろありましたが、思いつく  
ままに述べてみます。故郷に帰って社会人(佐世  
保重工業)になったのが昭和49年4月、入社  
早々、オイルショックで会社は不況になり、数  
年後は、倒産するかどうかの悲劇に見舞われま  
した。その後、幸か不幸か会社を辞めずに現在  
に至っています。大きな転機は東京勤務(平成2  
年)です。九州の田舎者が東京に行って、価値観  
が一変しました。当時の社宅の都合で、今も鎌  
倉市(大船)で生活しています。熊本は遠くにな  
り、自然とOB会にも疎遠になりましたが、  
応援団が、私の心の拠り所という点では、今も  
変わっていません。

3人の息子は、関東の大学を卒業し、今、東  
京勤務です。長男、次男は結婚し、孫も3人(男  
の子)います。60歳で大病を患いましたが、今  
年の1月で5年無事経過しました。その意味で、

応援団50周年記念は、今年65歳の私の記念の  
年でもあるのです。今回、久しぶりにOB会に  
出席させていただきます。皆様方と一杯飲みながら  
お話できる事に、期待と感謝をし、お礼と近況  
報告に代えさせていただきます。 押忍



(昭和47年12月 第4回応援団演武会)

### 自分を鍛えてくれた応援団

8代 長谷 政晴

応援団創立50周年おめでとうございます。  
和田初代団長と副島副団長をはじめとする草  
創期の先輩方、金守先生をはじめ顧問を引き受  
けて頂いた先生方、そして多くのOB諸氏、現  
役の皆さんに心からお祝いと感謝を述べさせ  
て頂きます。



(昭和48年12月 第5回応援団演武会)

私が最初に応援団に出会ってから、すでに  
45年が過ぎました。遙かな時間が過ぎたと思  
います。今回50周年の取り組みによって、事

務局の一人として会議に参加し、また中野君の尽力によりHPに掲載された古い写真や演武会の様子、過去の剛毅の文などを読む中で、記憶の中に埋もれかけていたさまざまの若い日々の思いが呼び起こされました。

練習開始前の心臓のあたりが「きゅっ」と圧迫される感じ、きつくて、きつくてたまらなかつた練習と練習が終わったあとの安堵感、合宿やインカレの応援の苦しさ、あこがれの先輩と飲んだOB会、先輩方や8代目との苦しくも楽しい思い出…思い出せばきりがありません。体もそう強くなかつた自分にとっては苦しい日々が多かつた。しかしこの貴重な体験は、あとの人生の中で確実に自分を助けてくれました。

社会に出てからは、毎日の仕事に精一杯で、学生時代のことを振り返る余裕はありませんでした。しかし私がともすれば日々の仕事や暮らしに埋没するなかでも、応援団は後輩達に受け継がれ、熊大生を応援し続けて本日にいたっていることはすごいことだと思いました。初代から受け継がれた応援団のDNAが今も受け継がれていることを認識できたことが私にとってはこの50周年の一番の収穫だろうと思っています。その大きな歴史の中に自分がおれたということを誇りに思えます。

思い返せば、私の現役時代の最大の危機は、2年生の時の春の鹿児島大学合宿でした。前年の遠歩で足を痛めた私は、以後ランニングや階段では常に別メニューでした。そのことは自分にとってかなり精神的に苦しいことで、なんとか我慢して足を休ませました。翌春の鹿児島合宿で、もうよかろうと久しぶりに、ランニングやウサギ跳びに参加した結果、再び走れなくなり、私の気持ちはついに切れてしまいました。退部を申し出た私でしたが、当時の福岡団長からは「そう結論を急がずに鹿児島の実家に帰ってすこし休んでこい」と言っていたいただきました。

しかしその時私は完全に退部するつもりでした。実家に帰ると、私の予想に反して母は「辞

めたい」という私を逆に励ましました。「人間は体が故障することはまあある。それは養生すればもとに戻る。だけど心が故障して折れてしまったら、なかなか立ち直るのは難しい。そんなに悲観せずに、体が治ってからまた一緒に練習すればいいんじゃないか。あれほどやりたいと言っていた応援団なのだから」と。入団当初は「体は大丈夫か、きつければ辞めれば」と心配性の母だったのですが意外でした。これをきっかけに、自分の中で何かが変わったようです。私は「そうだ、どうしても足が悪ければ、マネージャーでもいいじゃないか。仲間と一緒にいることが大事なんじゃないか」と思えるようになったのです。そう思えると一刻も早く、熊大へ帰りたくなりました。大学に帰ると、丁度新入団員勧誘の真っ最中でした。その後も、膝の経過を見ながら活動を続け、応援団員として最後まで活動することができました。あのとき辞めずに良かったと感謝しています。

私もすでに定年を迎え、今は臨時採用で仕事をしていますが、応援団OBとして自分を応援し励ましながら頑張っていきたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いします。押忍。

## 二つの50周年記念

8代 高橋 敬一

大学を卒業して40年が経つ。今の心境は、数年後に控えた定年退職を静かに待っているというところですか。そんな折りに、今年は奇しくも二つの団体の50周年記念を迎えることになりました。

ひとつは、大学を出て、そのまま就職をした福岡女子短期大学が創立50周年記念の年に当たり、いろいろな記念行事が行われることになっています。それこそ右も左も分からないままスタートした教員生活でしたが、今にして思えば、私にとってとても幸せであったのは、当時、副学長であった林禎二郎先生に出会った

ことです。今、私が、教育者として定年退職を迎えられるのは、先生との出会いがあったからです。



(昭和48年12月 第5回応援団演武会)

出会って初めの頃に、かけて下さった印象的な言葉は、「高橋君、応援団という集団はどのようにして維持されているのかね」ということでした。しどろもどろになりながら答えたのですが、先生が納得された様子はなかったことだけは鮮明に覚えています。今日までに、いろいろな団体、集団に属してきましたが、答えは未だに出ません。

もうひとつは、熊大応援団です。和田英樹先生との出会いがそのまま熊大応援団に繋がったわけです。高校時代に憧れた和田先生がつくった熊大応援団を知ることが先生の生き方を知る第一歩だと思い入部しました。先生は、熊大応援団とかけがえのない友との出会いを導いて下さった大恩人です。

和田先生そして熊本大学応援団に感謝申し上げます。

## OB会事務局を担った喜び

8代 中野 和夫

50周年を迎えるにあたり、その事務局の一員をさせていただきました。50周年記念誌を作るには、OBの総意となるその方針を考えなければいけませんでした。なかなか皆さんの意見も伺う機会もなく編集に着手しました。幸い、

今も現存する部室には、膨大な大学ノートに貼り巡らされた写真集、そして毎年発行されたウルタン1号から25号のOB会誌がありました。ウルタンには、現役団員の心の動きが鮮明に記録されていました。材料は一杯です。あとはそれを記念集として残せる時間と手間があるかどうかです。

その課題に直面した時、あとはやるしかないと思いました。そして、今がその時だ、あるいは最後の機会だと思いました。そして取り組みました。思った以上に写真のデジタル化は時間がかかりました。必要な写真だけを取り込めばもっと楽でしたが、一枚一枚の写真が記録に残して欲しいと訴えているみたいで、莫大な写真のデジタル化をしました。その数は1代あたり100枚にしても、トータル3000枚になりました。

その作業途中にも、うれしい出来事もありました。その作業の報告や写真をホームページに掲載していたら、OBからたくさんの写真や記録が送られてきました。本当にうれしい悩みでした。でもそのお陰で、50年の歴史の空白部分を埋めることができました。本当の意味での50周年誌に近づいたのは嬉しかったです。

そして、編集集中に思ったことは時間が足りない、もっといいものを作りたいという思いの中で考えたこともありました。



(昭和48年12月 立山山駅伝)

一つは、熊大応援団は優しい集合体であったこと。弱い者の優しく、強い者にも優しさを求める集合体であったこと。心の葛藤を推奨しそ



れを乗り越える精神を培う集合体であったこと。(過去形にしたのは単に危機感からです)

二つは、OBにとって、熊大応援団は精神的支えであり、「熊大応援団の精神」とその時の仲間が人生の中で大きな支えになっていること。これは自分の経験からも実感できます。

そのような中で、現在、熊大応援団の存続が厳しい状況になっていることはご承知と思いますが、やはり熊大応援団が存続して欲しいということです。我々自身が心の中で「熊大応援団の心を引き継いでいる」と思っても、やはり現役の応援団が元気に活動していることが前提です。

我々の「OB会」が昔の仲間と語る場から、これからの熊大応援団を語る場に変革していかなければ…と思っています。そのきっかけが今回の50周年記念事業であって欲しいと思います。

## 熊本大学応援団創立50周年に寄せて

9代 戸上 勝喜

熊本大学応援団との出会いは昭和47年の4月で、今年で44年になる。私の年は、今年の2月で62歳になったので、これまでの人生の4分3が熊本大学応援団とのつながりで占めている。当然のことながら妻より長いつながりになっている。今、仕事の関係で東京に単身赴任中であり、2年目になる。昨年もOB会のために帰省したが、今年は何が何でも帰省すると妻に話しをすると、「本当に好き者ね」と言わんばかりの反応を見せる。妻とのつながりは35年である。

10周年の記念OB会を昭和49年12月に幹部として盛大に行ったが、その時、50周年まで続くとは想像すらしていなかったと思う。「熊大応援団を次の代につなげよう」という一念だったような気がする。まさに、「継続は力なり」である。一人ひとりの小さなつながり、努力が

50周年を迎えるという大きな実を結んだことになった。しっかりとここまでつないでいただいた皆さんに賛辞と感謝を申し上げます。



(昭和50年4月 学館前の新入生勧誘)

ところで、「継続は力なり」という格言の出典は、住岡夜晃(すみおか やこう)という大正から昭和初期にかけて広島で活動した宗教家の詩の中にある。あまり知られていない。

『讃嘆の詩』

青年よ 強くなれ 牛のごとく 象のごとく強くなれ  
真に強いとは、一道を行き抜くことである

性格の弱さ悲しむなかれ 性格の強さ必ずしも誇るに  
足らず

「念願は 人格を決定す 継続は力なり」

真の強さは正しい念願を貫くにある

50年を節目として、これから我々OBが熊本大学応援団に対して「継続して」取り組むことは何かと考えれば、現役団員の復活に向けて最大限の物心両面からの協力を行うことに尽きると思う。私も、微力ではあるが、精一杯努力したい。最後に、熊本大学応援団の飛躍とOB・OGの皆さんのご多幸とご健勝をお祈りいたします。 押忍

## あれから40年…

9代 金子 昌夫

熊大応援団創立50周年おめでとうございます。一口に50年といっても一人の人生の大半の長さです。その間、それこそ何百人という先

輩後輩が応援団に集い、そして巣立っていった  
ということは、大変すばらしいことですね。



(昭和49年8月 夏合宿)

思い起こせば40年前の昭和49年、私たち9代目が幹部の時、創立10周年の記念OB会を開催し(於:神水苑)、10周年記念団誌を発行しました。というと格好よく聞こえますが、当時幹事役の渉内部長であった私にとってわからないことが多すぎて、全くの手探り状態で右往左往していたのでした。そんな時、初代の副島先輩はじめ多くの先輩方に貴重なアドバイスをいただき、アシストしていただきました。そしてようやく何とか開催と発行にこぎつけたのでした。本当にありがたいことでした。大変感謝しています。当時のことが懐かしく思い出されます。

私ごとですが、一昨年30年以上勤めた警視庁を定年退職し、現在同庁の非常勤の身の上ですが、この度住み慣れた東京の地を離れ、帰熊することにしました。皆さま、今後よろしくお願いします。

## 今、思うこと

9代 佐藤 又次

50周年とは凄いですね。私ども9代目の時に10周年を迎えて以来40年ですか…。「卒業後、OB会に出席した？」と自問しても記憶が定かではありません。滞らずにOB会費を納めるだ

けの最低限の対応をし、時々ネットで熊本大学応援団を見るくらいでご無沙汰しています。

ただ、神宮球場や東京ドームでの甥の野球の応援で、応援団やチアリーダーディングを見ると現役の諸君は、元気かな…と思っていました。

近況ですが、自活してひとり暮らしをしている母が入



(昭和49年8月 夏合宿)

院することが増え、急遽長崎に帰省したり、宇都宮にいる時は市最古の俳句会の代表をしたり、市教育委員会等の依頼で居住外国人に、日本語を教えるボランティアをしています。

「OB会に来い！」と毎年言われ続け、今年は特に沢山のOBから「OB会来いよ！」の賀状を頂き大変感謝しています。

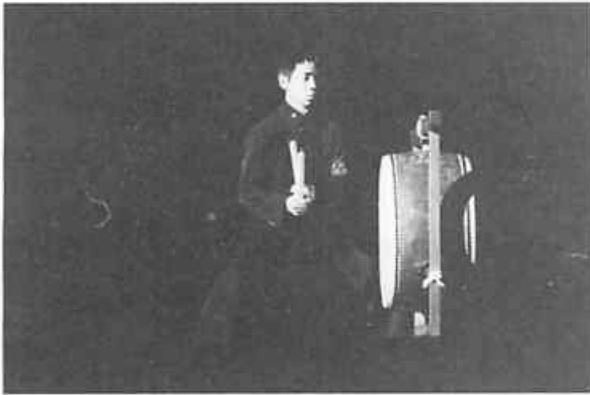
## 応援団との出会い

9代 阿南 一喜

卒業してから40年、私が応援団として思い出すのは、1回生として参加した演武会、そして、第9代として行なった10周年記念演武会のことです。1回生として初めての演武会、緞帳の裏で聞いた故和田先輩の挨拶、「人生いわく不可解」ということから話され始めたことを今でも鮮明に思い出します。そして、第9代幹部としてちょうど10周年にあたるということで今までどおりでは済まされないという思いで取り組んだことを思い出します。

私の入団のきっかけは、大学入試のために宿泊していた旅館に出身校の先輩が激励にいら

した時にお会いした江藤先輩とたまたま通りかかった団員勧誘席で捕まったことでした。



(昭和47年12月 第4回応援団演武会)

今思えば、この後の様々な出会いが私の人生の根幹を作ったといえれば大げさになるかもしれませんが、間違いなく大きな影響を与えています。社会人となり、OB会にも疎遠がちであったにもかかわらず、毎年ご連絡をいただきありがとうございます。応援団がいつまでも続いていくことを願っています

## 長年、私を支えてくれた応援団

10代 村瀬 弘幸

私は昨年、還暦を迎えるとともに38年勤務しました長崎県を定年退職し、第二の人生を歩んでおります。人生の転換期に、応援団創立50周年記念OB会の開催案内をいただき、たいへん嬉しく、また、意義深く感じています。

地方公共団体は厳しい行財政改革の動向下、年々、施策展開、業務執行、人事・組織管理とも厳しくなり、在職中は様々な出来事、困難な局面に遭遇しましたが、何とか乗り切れました。これは、在学(現役)当時の厳しい練習や団体運営を経験できたこと。また、卒業後はOB会において、現役団員・OB・OGとの懇談や交流を通じて、元気と勇気をもらえたことも大きな要因です。

応援団と出会い43年を経過します。その間、多くの先輩、同輩、後輩との出会いがあり、な

かには入学(団)以来、ご交誼を重ねてきた方もいます。私には、応援団の現役当時の体験は「宝」であり、応援団の団員・OB・OGは「人財」であり、将来もそうあり続けます。



(昭和50年6月 幹部交代)

私には、長年、私を支えてくれた応援団がありました。現在、私は奈良大学の通信教育、健康づくり活動(最寄りの小学校で地域の人たちとのラジオ体操、ウォーキング、国体競技場室内練習場での週3回のトレーニング)、ボランティア活動に取り組んでいます。

※ インターネットで「諫早清掃愛護クラブ」と検索して 下さい。私が運営するボランティア団体を紹介してます。

5月の50周年OB会では、懐かしいメンバーと久しぶりに再会できることを楽しみにしています。最後になりますが、熊本大学応援団の今後益々の発展と現役団員・OB・OG皆様のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

## 50周年OB会によせて

11代 岡本 久男

月日が経つのは早いもので、会社に入社し35年になり、昨年、昨年還暦を迎えました。熊大応援団も50周年を迎えるとのことで、学生時代のことが懐かしく感じられます。年をとると1年があつという間ですね。それに比べて、入団当初は、1日、1週間が長く感じられた気が

します。練習が嫌だったこともあり、余計そう感じたのかも知れません。



(昭和 53 年 3 月  
第 11 代追い出し会)

今回、久しぶりに OB 会に参加する予定です。我々みたいな応援団員は少ないが、チアリーダーの活躍がすごいらしいですね。確かに、チアリーダーは華やかですよね。子供が東京六大学に通ったので、何度か神

宮球場に六大学野球を見に行ったことがあり、エール交換以外は、チアリーダーが目立っていました。また、M 大では父母会の役員をやったので、学生と同じ席で応援しました。立ったり座ったり、忙しくて声も嘎れましたが、試合後に役員で飲む酒のうまいこと。

今回、演武練習、演武会開催ということでありますが、参加してみようと思います。演武会に備えて、体育館で練習したことを思い出します。このような企画を立てて頂き、役員の方々に感謝申し上げます。熊大応援団の益々の発展と OB の皆様及びご家族の皆様のご健勝、ご多幸を心からお祈り申し上げます。

### もし、私が応援団に入っていなかったら

12 代マネージャー 島子 志津子

熊本大学応援団 50 周年おめでとうございます。私にとって応援団は、人生を決めた大きなものです。もし、私が応援団に入っていなかったら……。

高校の先輩の浅見さんに「今年マネージャーが辞めたけん、2人でなって」と言われました。応援団って「花の応援団」のイメージしかなかったのですが、浅見さんが入っているのだったら多分いい部活なんだろうと（先輩が西さんなら速攻断ったかも……西さんごめんなさい！）志保美と2人で入りました。

マネージャーの一番の仕事は部活の「花」であること。そして先輩への金の無心兼連絡。今のように、パソコンもない時代だったので、幹部交代、演武会のお知らせ、ウルタン原稿依頼、年賀状と授業中よく手紙を書いていた。

そんなある日、金守先生の体育の授業の時、先生が突然「ここに応援団のマネージャーがいるでしょう。手を挙げて。君か！君はあの中から結婚相手を選びなさい。」と言われ、「彼らは、人のためにあんなにつらい練習を毎日やっている。あんないい連中はいない！」と付け加えられました。



(昭和 52 年 4 月 新入生歓迎コンパ-阿蘇草千里)

その教えを守り、下駄履き、黒縁メガネ、ラップズボンの腹巻男だった島子と結婚しました。結婚式の日、現役の皆さんが結婚式場の中庭でタキシードとウエディングドレス姿の私たちを前に巻頭言を切り、「武夫原頭に草萌えて」の演武でお祝いしてくださったことを覚えています。あれから 35 年。私は私のやりたい放題させてくれる夫の応援団で培った「押忍」の心のお陰で、一度も結婚したことを後悔したことはないほど幸せに暮らしています。夫は鹿児島から出てきてすぐ、私服も持っていなかつ

たので学生服で歩いていて、第2学生会館の前で村瀬さんにつかまったことが人生の敗因だと言っています。もし、二人が応援団に入っていなかったら…。熊本大学応援団 50 周年本当におめでとうございます。そして本当にありがとうございます。

## No Run No Life

13代 清水 豪

先日(2/21)、第5回熊本城マラソン(フルマラソン)に出走してきた。2012年に熊本市の政令指定都市移行を記念して始まった大会である。目標としていた4時間を、なんとか切ることができた。実は、これまでに出走したフルマラソンは、今回で29回目となる。板についた市民ランナーである。

きっかけは、31歳の時(昭和63年)、忘年会での酔っぱらいの会話の成り行きで、年明けに熊本市で開催される10kmのマラソン大会に出ることとなってしまった。いざトレーニングを始めたものの、団の現役引退後、10年近く運動というものから離れていた体にとっては、1km程でさえ息は切れて足は動かなくなるような有様。それでも、人間の体はよくできていて、「慣れる」ということは、良きにつけ悪きにつけ人間の大きな能力だ。どうにか10kmを走り切れるようになり、遅いながらも目標タイムをわずかだがクリアしてゴール。これがいわゆる「達成感」というものだったのか。そこから私のランニングライフが始まった。その年の夏には阿蘇で開催された10kmレースに参加し、以降、平成の年数と同じ数のキャリアを重ね、5kmのから100kmのウルトラマラソンまで、これまでに出走したレースは、86となった。

折に触れて、「遠歩」のことを思い出す。本当にきつかった。足は遅く、練習の時もリーダーについていけず、よく幹部にマンツーマンの伴走をされていた。走るのが苦手な嫌だった自

分の生活の一部を、ランニングが占めることになるとは……なんということでしょう。



(昭和55年3月 第13代追い出し会)

楽しんで走るということをしばしば耳にするけども、どうも自分には眉唾だ。走るとやっぱりきつい。きつさの向こうにある「ゴール」、「やり遂げ感」、目標をクリアした時の「充足感」…こんなものがすべてなのだと思う。

これまで出たレースの中で1回だけリタイアしたことがある。ゴールに向かって走るランナーたちを眺めながら、収容バスで連れ戻されるというのは実に虚しく実に無念なものだった。ゴールした時の喜びというか充実感というか、残念ながら自分の語彙力では表現できないけれど、実際に体感してみないと分かってもらえないものかもしれない。

No Lifeなどと大それたものではないけれど、その感覚を味わいたくて、また次のレースにエントリーしている。

(余談) こんな物好きの満足感を満たしてくれる場を提供していただいている、各大会運営の関係者の方々や休日返上で交通整理などに当たってくれているスタッフやボランティアの皆様には、ほんとうにありがたい限りである。

## 熊大応援団創団 50 周年によせて

13代 立邊 宏美

第13代は、団長の清水君、副団長兼渉外長の田中君、統制長の波多野君、総務長の吉野君、リーダー長の下田君と私の6名で出発しました。応援団の練習は体力、気力の面で弱かった私にとって大変厳しいものでした。やめたいと何度も思いましたが、同期で入団した5名の仲間や先輩の励ましをもらい、何とか1年間を過ごすことができました。2年になり後輩ができる、練習や酒などいろいろ教える事ができますので、応援団の活動が楽しくなってきた、やめたいという気持ちはなくなり、最後まで頑張る事ができました。第13代は誰一人やめることなく現役を引退することができたことは、私にとってありがたいことであるし、大きな自慢です。



(昭和55年3月 第13代追い出し会)

就職してからはOB会に参加することが楽しみであり、励みになっています。先輩方の貴重な話、名言や後輩の諸君との会話がありたく今の生活のよりどころになっています。これからも体が達者なうちはOB会に参加して、たくさんの元気、喜びをいただいきたいと思えます。最後になりましたが、熊大応援団創団50周年本当におめでとうございます。

## 創設 50 周年おめでとうございます

18代 天本 真臣

私達が現役を引退した直後に20周年OB会が開催され、OB一年生として出席させていただいた時から30年。時の流れの早さを改めて感じています。

現役一回生の頃を振り返ってみますと、私も厳しい練習になかなかついて行けず「辞めたい」と思ったことは数知れません。しかし退団を思い止まらせたのは「人」でした。先輩方、周りの方々はとても個性豊かで人間味にあふれた素晴らしい方々ばかりで、高校時代にまともに部活動ができなかった私にとって、こんな方々との出会いはただただ驚きでした。



(昭和58年5月 五月強化合宿)

ですから、退団によってこの皆さんとのご縁を失ってしまうことが非常に残念に思えたのです。そして、その判断は間違っていなかったと思いますし、多くの仲間が周りになっていることが今の私の財産であると確信しています。

ただ、最近はOB会への出席も減り気味で大変申し訳ございません。しかし、この数年新たなご縁もできて驚いています。宇治野先輩とは子供どうしが同じ高校の陸上部でチームメイトになったり、また渋谷先輩とは元々別の勤務先であったのが合併により同じ銀行になって以降よく飲みに行ったりと、改めてご縁を感じて嬉しくもあり驚きでもあります。

私も人生の後半、定年もそろそろ近い年代となくなってきました。現役時代は団に対して何も貢

献できませんでしたが、今後は「人」という財産、そして団に対して僅かでもお力になればと思います。また新しい出会い、楽しみが生まれますよう今後ともお付き合いいただければ幸いですので、どうぞよろしく願いいたします。押忍

### 春弥生！肥後のれいざん、たつたの山と…

18代 前川 良介

団長「ぬしら、わしらが何で応援団やらやっちゃよるか、ワカッチョルとかっ？」

新入団員：団長の迫力に圧倒されて、声も出ない。

統制長「黙っちゃってもわからんどがー」

3回生「押忍、学内の士気を高める為と理解しとります、押忍」

団長「ば一たれ一、そげな当たり前のことば訊いとるとやなか一」

副団長「何か、難しげなことば言いそうやね」

新入団員：団室内の空気のちょっとした緩みにちょっとだけ息を継ぐ。

2回生「自分は、自分が必死でやれば、必ず気持ちは通じると思いますっ、押忍」

団長「おっ、ようゆうたな金川。そぎゃんたい、わしらはわしらの限界に挑戦し続けんといかんったい」

新入団員：大学生の会話は難しい、と、ひたすらビビる。

リーダー長「ま一、君たちは練習についてくることだけを考えればいいんだよ」

総務長「も一これ以上できん、と思ったらそこでやめてんよかとぞ」

新入団員：やめたら、何が待つとるとやろか一、と不安を掻き立てられる。

渉外長：遅れて団室に現れる「ごめんごめん、実験が終わらんで」

新入団員：まだ、現実が存在していたことに引き戻される。

統制長「なんや、成功したとや」

渉外長「よかった一、2晩徹夜たい」

新入団員：徹夜しても練習せんといかんとか一、と気を引き締める。

団長「ぬしら、嗚呼、花の応援団みたいなものば想像して入って来たとやなかやろうな」

副団長「ちょんわ、ちゃんわ一、

ねんのねん、か一。ありや、商大っぼかな」

新入団員：青田赤道が、現実に存在する可能性を恐れる。

団長「何か質問はなかか一」

新入団員A「飲み会とかあるとですか？」

リーダー長「何だ、酒を飲みたいのか。この後コンパするぞ」

新入団員B「僕は酒やら飲んだことなかですけど」

副団長「飲めん奴は無理して飲まんでもよか、その内飲めるようにさせちやるけん」

リーダー長「酒は百薬の長やけん一」

3回生「酒の一滴は血の一滴ですね」

団長「お一、柴漬けはつまみにちゃんとこーとけよ」

2回生全員「押忍」

副団長「今夜は星が綺麗に見えそうやな。知つとるか、オリオン座の一等星のベテルギウスは赤色巨星やけど、500年前にもう爆発しとるかかもしれんとぞ」

新入団員：酒、夜空、柴漬け、限界、血液、青田赤道、500年、商大……………



(昭和58年4月 強化合宿)

## 創立 50 周年おめでとうございます

19代 梶島 正利

50年が経過して、それを祝う会が開催されるって結構すごいことじゃないでしょうか。

いつもながら、OB 諸氏の行動力には敬服いたします。

私が大学に入学したのは、1982年。第6回のOB会が開催されるという年でした。暑い中、頭から水をかけてもらいながら演武練習をした夏合宿のことが思い出されます。今なら、塩飴でもなめさせてくれるのでしょうか？



(昭和 59 年 4 月 春休み合宿)

私の中で  
応援団の記憶でまず思い出すのは、入団した頃の、毎日午前中が憂鬱で仕方なかったことです。憂鬱で仕方ないのに、壮行会がある日には昼休みいったん帰宅し学

ランに着替えて午後の授業を受けていました。けど、その憂鬱感がいつの間にかなくなっていたのも不思議なことです。いつなくなったのかよくわかりません。5月合宿以降でしょうか、インカレ以降でしょうか。

にもかかわらず、不思議と私の中に辞めるという選択肢が出てくることはありませんでした。辛いことにも増して、楽しいことがいっぱいあったかという、そうでもないように思うのですよね。思い出すのは、辛いことばかりで、いろいろ考えていると、ある時のことを思い出しました。

金峰山まで走ったことがありました。武夫原まで帰ってきた後、ある先輩が、西方の金峰山を見て「あそこまで走って来たんやな～」と言われ、みんな西方を眺めました。この時の充足感！やりきった後のすがすがしさ。これだと思います。何も取り得がなかったことも幸いしたのかもしれませんが。無事4年間やり通すことができました。

応援団のおかげで、充実した学生時代を過ごすことができ、今ではたくさんの先輩後輩を得ることができたことに感謝しております。

卒業して30年が経ちました。現在は、2人の娘が大学生になっています。OB会で拝見するチアの皆さんの生き生きした姿は、まぶしいばかりです。我が娘も、有意義な学生生活を送ってくれることを期待しています。

最後に、5月7日に向けて準備してこられた皆様に敬意を表し、万全の体調で参加することをお約束いたします。

## 今も伝わる応援団の熱き想い

19代 木村 誠司

創団 50 周年おめでとうございます。

熊本大学応援団 OB 会ホームページを拝見しながら応援団生活を振り返っています。

PC 版トップページの写真は、草千里での新入生歓迎演武「逍遥歌」が掲載されています。そこには、新3回生となった自分の姿と懐かしい面々がいました。

「応援団熱き想い」のコーナーには、写真とともに団誌「剛毅」の文章があり自分の代とは異なるものの自分らの代はどうだったかと重ねてみてしまいます。みなさんの素直な気持ちが述べられており共感するとともに衝撃を受けます。また、自分らの代の写真もありますが、見ているとあれから30年経過しているにも関わらず、違和感なくあの時代にワープできそうです。



1回生の時、OB会がもしなかったら応援団を続けられていたかどうかわかりません。やはりOB諸先輩の方々との出会いが大きかったと思っています。2回生の時、1回生を引っ張ること、フォローすること、負けないこととか考えていたような気がします。3回生幹部の時、練習、壮行会、応援で後輩にいかにか全力を出させるかを考えていました。



(昭和59年4月 春休み合宿)

今も後輩から現役時代厳しかったと言われますが、団員20名くらいの安定時代でしたから応援団の先行きではなく熊大応援団員としてどのような心で活動していくべきか自分なりに悩み真剣に取り組んだ結果の行動でした。

今では違うやり方、付き合い方があったのではないかと当時を振り返ることもあります。そのほか以下の記憶が蘇ってきました。

壮行会や応援の時に、遠くまで太鼓や校旗を運ぶのが重くて大変だった記憶があります。近所の居酒屋で焼酎一升瓶をキープして団員と飲んで語り合ったことが楽しい思い出です。阿蘇遠歩は10位以内で走って帰れたことに満足し、足を引きずりながら黒髪祭で飲み歩いていました。八景水谷、江津湖、本妙寺、金蜂山、武蔵塚、熊本城などへ合宿や強化練習でよく走りに行きました。

熊本商科大学、九州東海大学の応援団との顔合わせ、二の丸公園での五大学定期戦エール交換など他大学との交流もありました。

最後になりますが、和田先輩、佐村先輩、先に逝かれた先輩方および藤川にお礼を申し上

げたいとともにご冥福をお祈り申し上げます。現役のみなさまにおかれましては、元気一杯に学生生活を過ごしていただきたいと思います。

押忍

## 熊大応援団 50周年記念誌「剛毅」に寄せて

20代 平原 一幸

「フレ〜、フレ〜……」

精一杯の声をはりあげた団長のエールが、グラウンドに響き渡る。体育祭が終わり、お互いの健闘をたたえ合う瞬間だ。子どもたちの顔は、自信と誇りに満ち満ちている。

中学校現場で教職について、28年。このような光景に出会える私は、本当に幸せ者だと思う。「ああ、今年も熊大応援団で学んだ『剛毅木訥』の精神を、子どもたちに伝えることができた……」

私は入団当初、よく思った。

「何でこんなきつい練習をするのだろうか。」事実、練習についていけない私は、体調もこわし「自分には無理だ」と思うようになった。そして、入団後わずか1ヶ月で「退部届」を提出したのだ。



(昭和60年8月 強化練習)

「とにかく5月合宿まで続けてみろ！」その日、先輩方の説得は深夜まで続いた。今考えると、あの時やめていたら、自分はどんな人生を歩んでいただろうかと思う。5月合宿を終えた時、不思議と私の中から「やめたい」という気持ちはなくなっていた。逆に「自分にも壁を越えられるのではないか」という、ちょっとした自

信を持つことができていた。熊大応援団の「剛毅木訥」の精神を学んだのは、これが最初の時だったと思う。

その後も、多くの先輩から「剛毅木訥」の精神を学んだ。熊大応援団として伝統を守り築く中でも、「剛毅木訥」の精神を学んだ。今なら言える。「きつい練習を黙々とする応援団だからこそ、相手に思いが届くのだ。」という事を。

今、学校現場で、子どもたちに伝えている。「カッコじゃないぞ、中身で勝負だ!」「途中で諦めるな!」「きついときこそ、声を出せ!」「お前ならできる!」「時にはバカになれ!」「仲間を信じろ!」すべて熊大応援団で学んだことである。

「自分はこれまでも、そしてこれからも、ずっと根っからの『応援団』なんだ。そして改めてこう思うのである。

あの時、深夜まで説得をしてくれた先輩方に、そして「剛毅木訥」の精神に出会わせてくれた熊大応援団に、そして自分を今でも応援団でい続けさせてくれるすべての方々に、深く深く感謝し、熊大応援団創設 50 周年を心から祝福したい。

## OB 会の事務局をして考えたこと

21代 山中 和之

ついに応援団も 50 周年を迎えることとなりました。昨年私も 50 歳の誕生日を迎えました。いまの自分の 50 年を振り返って生まれて今までの間 応援団はずっと続いてきたことを考えると改めてその存在に感心させられます。

OB になってしばらくして OB 会の連絡係をやることになりました。あの時、なぜやるようになったかは忘れましたが、改めて考えると、応援団に入団した時にも似た「やってしまった!」という後悔の気持ちを OB になって再び味わうことになるなんてと思いませんでした。

しかし、引き受けたからには、やらなければなりません。頂いた当時は、1 年間に暑中、年賀、幹部交代などすべて報告していたためかなりのハガキを出していた記憶があります。河村会長へ電話や、FAX をしたりしながら、原稿の確認や郵便代等の世話も随分していただきました。

まず、最初の仕事は名簿作りでした。その当時は現役も少なくなっていたのでしばらく連絡の取れていない OB の方も多かったように思います。ことあるごとに、ハガキに同じ代、同じ職場で所在の分からない方々の連絡先をご存じないか尋ねてみたり帰省先にハガキを出したりもして何とか連絡が取れないかと思考錯誤しましたが



(昭和 59 年 8 月 強化練習)

なかなか思うように成果はえられずがっかりすることも多くありました。OB 会の返事が〆切日になっても一向に戻ってこない状況に悶々とする日々もありました。そんな状況でも戻ってくる返信の中のちょっとしたコメントがとても嬉しくて、またよし頑張ろう! という気持ちになったりもしていました。

そうして何年か続けていくうちに名簿も幾らか不明欄が少なくなり、段々と名前と顔が分かるようになり、お会いした時も「連絡係の山中君か? いつもありがとう!」と温かい言葉を掛けていただけようになりました。

また夫婦で OB 会に行った時には、妻も和田先生に初めてお会いでき、温かい声を掛けていただき、一変でファンになって帰ってきました。

活動は短い間だったと思いますが、もう何年も経った今でも年賀をくださるOBの方もいらっしゃるようでとても感謝しています。

今では貴重な経験をさせていただき本当に良かったと思います。それなのに今ではすっかりそんなことも忘れて急いで返信のハガキとこの原稿を書いています。

## 嵐の夜も灯火消えず

21代 池田 章広

先日の福岡地区OB会で、藤川さんが亡くなられたと伺い、驚いています。

藤川さんは、私が一回生の時の幹部で、同じ機械系の学科だったので大変お世話になりました。入団した当初、練習最初のランニングで遅れる私によくついて下さり、叱咤激励していただきました。立田山の階段を登りながら歌った第二学生歌と中腹から見た熊本市街の光景はとても印象に残っています。ご冥福をお祈り致します。



(昭和61年3月 春合宿)

## 応援団の50周年を迎えるにあたり

22代 松原 賢

現在50歳の私も今一度自分にとって熊本大学体育会応援団とは何だったかを思い出しながらこの原稿を書いてみようと思います。

社会人となって27年、最初の赴任地福岡から名古屋→埼玉→札幌→盛岡、そして今の名古屋と各地を転々としながらも、結婚生活17年、妻と16歳になる息子と3人で暮らしているのも応援団での3年余りの経験が生きていることを感じます。特に5年前の3月11日、当時の赴任地盛岡での東日本大地震の折、不安がる妻や子供と、「大丈夫、何とかなる」精神で乗り越えられたことは応援団での辛く厳しい練習に耐えられたからこそだと思っています。



(平成元年3月 第22代追い出し会)

振り返れば 昭和59年4月に一浪を経て入学した私は生協前で勧誘を受け、そのときはあまり深く考えずに入団を決めました。幹部になるまでは日々の練習はきつく苦しく、何でもこんな思いをしてまでの日々の連続でした。武夫原にどれほどの汗と涙と酒をしみこませたことでしょうか。入団当時7人いた同期も3年次には副団長となる中村と2人になっていました。何度もやめようと思っていましたが、なぜ続けることができたのか、今でも不思議です。ただ一ついえることはすばらしい応援団の先輩や

同期・後輩、そして他の体育会系クラブの人たちに囲まれていたとからだと思います。

熊本、福岡にいた20代のころ、正月に和田先輩や佐村先輩のお宅で酒を飲んだり、演武を披露したり楽しい時間を何度となく過ごさせていただきました。中川先輩には熊本の夜の街を堪能させていただきました。多くの出会い・経験そして別れも心の中に生きています。

今時の若者は……と言われることがありますが、今いる場所をしっかりと見つめ、出会いを大切に、夢に向かって励んでほしいと思います。60周年のときは還暦祝いもかねて、妻と参加したいと思います。 押忍

## 熊本大学応援団50周年に寄せて

22代 中村 泰博

熊大を平成元年に卒業して今年で28年目。年齢もたまたま応援団と同じ50歳。本人的には、まだまだ若いつもりだが、膝や肩の痛みが出る様になり、飲み会も午前様になると翌日は仕事にならなくなるなど、体力の衰えは否定しようが無い。

応援団の頃のハードトレーニングで鍛え上げられていた肉体も、日頃の不摂生で見る影もなく、何とかしようと思うが、色々自分に都合をつけて動こうとしない今日この頃。

今回の寄稿にあたり、熊大時代のキーワードをいくつか思い浮かべながら、当時の気分に反



(昭和62年5月 水泳応援)

つてみたい。

### ①学生会館前

応援団の勧誘場所。綺麗なお姉さん(マネージャー)にみとれて、ふらふらと勧誘の机の前に座ったのが運のつき。

### ②立田山

日常の練習場所。ウサギ、アヒル、カメ、おんぶ。今、あの頃の体力があれば……。

### ③春合宿、夏合宿

大江で1週間監禁される地獄の合宿。夜のミーティングの正座が長かった……。

### ④八景水谷、武蔵塚、すかいら一く、本妙寺

いずれも行楽の名所だが、当時は周りを見る余裕無し。

### ⑤美少年、白波、織月

熊大時代の主な常用酒。あれだけ飲んでアル中にならなかったのが不思議。

### ⑥メルモ、紅丸、煉瓦亭、とん八、もっこす、かわだ、下通り、上通り

当時の飲み屋、もしくは遊び場所。今は、無くなった店もあるし、子飼商店街も寂れてしまってる。

### ⑦ボシタ祭り

最初は酒を飲みながらのバイトで楽勝と思っていたが、丸一日飲みながら大声を張り上げる応援団の練習並みにハードな祭り。はっぴを着た綺麗なお姉さん達と一緒に飲みたかった。

「ボシタ、ボシタ」の掛け声が「ドーカイ、ドーカイ」に変わったのは残念。

### ⑧黒髪祭

阿蘇遠歩で疲れた身体にアルコールを夜中まで充填させる祭り。普通の学園祭は面白いのだろうが、酔いつぶれた記憶しかない。

### ⑨寮で、土木で応援団

学生寮での寮祭、赤ふんストーム、土木工学科での上下関係の厳しさ、応援団での練習・飲み会。当時のこの組み合わせが、今の自分を支えてくれていると思っている。

もっと、色々キーワードが出てくるかと思ったが、なかなか浮かんでこない。これも年齢

的に物忘れがひどくなって来ているのが影響していると思われる。50年の歳月を重ねてきた応援団。自分がいた当時と今の状況は大きく変わってきているが、先輩や後輩の絆が更に深くなっていくことを祈念しています。

## 熊大応援団に出会えて

24代 村上 俊樹

まずは、応援団創設50周年、おめでとうございます。今回、50周年記念「剛毅」を発売されるときき、大学を卒業して約22年が経ちますが、当時を振り返りペンをとらせていただきます。

私が応援団に入ったきっかけは以下の3つ。

その1、高校の応援団長だった同級生と、熊大の同学科に入学したこと（彼は勧誘され入団したが、その後退団）

その2、土木工学科の新歓コンパで私の世話をしてくれた先輩の人柄に惚れ、その先輩が応援団員（第23代副団長の衛藤さん）だったこと。

その3、高校時代バスケットボール部でレギュラーになれず悔しい思いをしたが、応援団なら全員レギュラーになれると思ったこと。

このきっかけにより、自ら志願して武夫原の部室に行きました。ここから、熊大応援団との出会いがはじまりますが、今振り返って特に印象に残っていることを書き出してみました。

① 応援団の練習の意味を尋ねたら、「試合で友だちがきついとき苦しいときに応援するのだから、誰よりもきつく苦しい練習をしないと、応援できんやろ」と教えてもらったこと。

② 幹部になって、最初の夏に熊大のプールで水泳部の応援が終わった後、水泳部の友人に学ランのままプールに落とされて気持ちよかったこと。いまでも、その水泳部の友人とは飲んでます。

③ 正月に和田先輩の家にあいさつに行き、しこたま飲んでつぶれて、翌朝、隣のビニールハウスでイチゴを摘んで頬張ったこと。そのイチ

ゴのうまかったこと、カラカラの喉に絶品でした。

④ 毎年、ボンタ祭りで鶴屋デパートのバイトとして参加させてもらったが、あんな大きな祭りに、見る側でなく、する側になれたこと。

⑤ 深夜0時に阿蘇山頂の駐車場をスタートして、熊大までの60kmを夜通しかけて走破するという阿蘇の遠歩に参加し、最高順位は、10位以内だったこと。



（平成元年5月 五月強化合宿）

⑥ 現役の時、阿蘇と普賢岳と噴火を2度経験したこと。特に阿蘇の噴火は、練習中、空が暗くなり、真っ黒な雨が降ってきて、全員、頭から灰だらけになったこと。

⑦ 入部したての頃、よく先輩から夕飯をごちそうになったこと。紅丸、清香園、かわだ等々。特に、金欠で実家から送ってきた米を炊いて、マヨネーズとしょうゆをかけて食べていることを知った先輩に、黒髪定食をごちそうしてもらい、涙が出るくらい嬉しかったこと。

⑧ 市民体育館という大きなステージで、演武会を経験したこと etc.

とにかく思い出はつきません。応援団は卒業した今でも、私の心と体の大きな支えになっています。応援団と出会えたことを、心の底から感謝しています。この応援団との出会いを大切に、今後もしっかり自分の人生に活かしていきたいと思います。 押忍

## 応援団での経験が生きた

25代 清水 秀彦

押忍 ご無沙汰しております。25代で団長を務めました清水です。現役時代は夕方5時近くになると憂鬱で仕方ありませんでしたが不思議とやめようとは思いませんでした。

結局大学は中退しましたが、応援団に在籍していたことで、現在の会社に入社することができました。60名の応募者から最終2名に絞られ、最終面接で学生時代の活動を聞かれ、応援団に在籍していたことが決め手だったそうです。今思えば、仕事でいくらつらい思いをしても、当時のキツさに比べれば何でも乗り越えられるような気になります。

福岡採用で転勤三昧でしたが、この4月にも大阪異動の内示がありました。3度目の大阪ですが根性でやり遂げます。OB会には是非参加させていただきます。押忍



(平成元年5月 水泳応援)

## 「元気」「勇気」「笑顔」

(チアリーダー部初代キャプテン)

32代 川林 菜穂子

熊本大学応援団が創部50周年を迎えられたこと、心からお祝い申し上げます。

私は、平成16年にリーダー部とチアリーダー部が一体となった新生応援団の発足時、チア

リーダー部の初代キャプテンをさせていただきました。約10年が過ぎようとしていますが、ただチアに夢中で過ごしていた日々がこの間のことのように思い出されます。

私がチアリーディングと出会ったのは、高校生の頃です。目をキラキラさせてステージに立つチアリーダー達に圧倒されました。

「カッコいい！私もやりたい！」と思い、大学受験を終えた春、市内で活動する社会人チームに入部しました。社会人チームでの練習は想像していた以上に厳しいものでした。それでも、初めて大会で演技をした時、観客も他のチームのメンバーも一緒に声を出し、会場が一体となる感覚に感激しました。



(平成17年 夏合宿-天草苅北)

当時、社会人チームには熊本大学の学生は私1人きりだったため、熊本大学の学生を増やしたくて友達にたくさん声をかけました。数ヵ月後に3人が入部し、私を含め熊本大学の学生は4人となりました。それが初代チアリーダー部メンバーとの出会いです。私たちは社会人チームで練習を重ねながら、「熊本大学にもチームを作りたいね。」と話すようになりました。

そして、実際にチームを作るために動き出すことにしました。練習は、主に社会人チームで行うことにし、熊本大学では授業の空き時間に集まって自主練習をしたり、体育館の予約がとれない時には他の部活動にお願いし、すみっこをお借りして行ったこともありました。チームの名前やユニフォームは、英語辞書やカタロ

グを手に学食に集まり、ああでもないこうでもないと言いながら、4人で決めました。

そして、同好会や部活として活動するため体育会本部に相談する中で、体育会本部役員の前原さんたちから、応援団が復活すること、その応援団でチアリーダー部として活動しないかというお話をいただきました。OB会の先輩方には、チアリーディングへの情熱だけしか伝えられなかったかもしれません。それでもあたたかく迎えてくださり、応援団部とともに、チアリーダー部 BLAZES として活動することになりました。



(平成 17 年 熊粋祭後の新生応援団、チアたち)

OBの先輩方と一緒に部室に入ると、団旗や太鼓、たくさんの写真が残されていました。当時の思い出を語る先輩からは、今でも変わらない応援団への熱い思いが伝わってきました。長い歴史のある応援団で活動していくのだと身が引き締まる思いでしたが、同時に、先輩方に見守っていただけることを心強く感じました。

新生応援団2年目には、私たちにも後輩ができました。合宿では、応援団部とチアリーダー部と一緒に練習をしました。その演技は、熊粋祭（現在の紫熊祭）のステージでお披露目することができました。チアリーディングの演技は、社会人チームの仲間にお手伝いをお願いし、一緒に演技をしました。

その翌年にも、新たにたくさんのメンバーが応援団に入部してくれました。チアリーダー部の練習も、熊本大学の体育館で計画的に行うこ

とができるようになり、その年の熊粋祭では、自分たちで演技をすることができました。私たちが幹部交代をして引退した後、チアリーダー部は協会に登録し、競技チームとして活動を続けていくことを決めました。ちひろさんやかんちゃんなどコーチにも恵まれ、たくさんの幹部が少しずつ BLAZES を作り上げてきてくれました。何より、チアリーダー部の現在の活躍があるのは、先輩方が応援団に迎え入れてくださったからだと感謝しています。

チアへの情熱に燃え、時に燃え尽きそうになりそうな時も、私は常に仲間を支えられていました。本音でぶつかりあって、一緒に泣いて、たくさん笑いました。大好きな仲間と応援団で出会えたことが、「元気」「勇気」「笑顔」となり、今でも自分を強くしてくれています。私以外のチアリーダーも、仲間との思い出と絆を大切に、それぞれの場所で活躍していると思います。これからはチアリーダー部OBも、先輩方とともに現役の応援団をしっかり支えていきたいです。

最後になりましたが、熊本大学応援団の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 熊大応援団復活へ

32代 梅木 久義

私は2003年4月熊本大学に入学しました。当時、大学に入学したからには自分が熊本大学にいたということを何か残すべきだと考えていたのを覚えています。そう意気込んでいたのと応援団との出会いは偶然でした。

私の入学当時応援団は活動をしておらず8年間部員もいない状態でした。初めて応援団の存在を知ったのは、体育会本部が毎年発行している新入生向けのサークル紹介冊子でした。応援団のページだけ活動写真も活動内容も記載無く、部員募集中という言葉が入っていたと思い

ます。それを見て応援団をやってみるかと思い、そのまま体育会本部室に一人で出向き応援団をやろうと思うということを申し出に行きました。偶々卒業されていた体育会本部役員の方々とお会いし、その旨を伝えたところ非常に興奮されていたのを覚えています。

そこで出会ったのが前原啓太さんをはじめとする体育会本部役員兼第31代応援団の方々でした。前原さん達、体育会本部役員の皆さんは、活動実態が長期間ない部活でも応援団だけは残すべきだと部室もいつでも使える状態で残して頂いており、実際の応援活動や部員の募集を精力的にされてきておりました。勿論本部役員としての活動や自身の部活活動も行っている中なので、非常に苦勞されたことと思いますが、それも応援団が廃部にならないようにする為でした。しかし、前原さんの在学中に部員が入らないまま復活が叶わずという状態で今後応援団をどうしようかといったところだったようです。そのような経緯を聞き決意が一層固まったのが4月の入団の時です。



(平成16年 熊粋祭)

#### ◎団員募集とチアリーダー募集

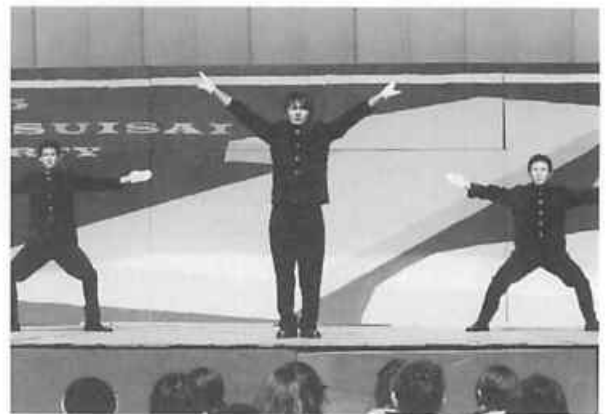
まず、同学部の同級生数人とワンダーフォーゲル部の部員に応援団に入るよう要請しました。ワンダーフォーゲル部へ要請したのは、部室が隣であることと応援団と同じように部員が1年生のみであること、そして存続の危機が共通していたということもあり何かと話を

する機会が多かったからです。応援団が軌道に乗るまでという期間限定ではありましたが、共に練習し相談にも乗ってくれた佐藤君には感謝しています。勿論同級生の中でも最後までついてきてくれた同じ数理科学科の黒木翔平君と作本和幸君の2名にも非常に感謝しています。

次に、他大学の応援団の実態を調べていてチアリーダーと共に活動している応援団があることがわかり、同様にチアリーダーも募集することにしました。夏に入るところだったと記憶しています。そこで出会うことができたのが応援団チアリーダー部初代で創始者である同じ1年生の川林さん達でした。彼女等の功績は今の活動状況やこれまでの経歴を見れば一目瞭然かと思えます。

#### ◎先輩との練習と後輩の入団

応援団としての活動について右も左も分からない中でしたが、河村会長を始め先輩方に相談したところ仕事が休みの休日に武夫原に来て頂きご指導頂くこととなりました。県外から練習に参加して下さっていた先輩もおりました。応援団復活後初めてのOB総会では応援団のジャージを作りたいことと団旗がポロポロだったので団旗もほしいとお願いをする私の我儘を聞き入れて頂いたのを覚えています。



(平成17年 熊粋祭)

1年経ち、後輩獲得に向け勧誘活動を行っていたところ安倍君が直接部室を訪ねてきたの



が安倍君との出会いとなります。彼の入団で漸く応援団としての活動が本格化していくこととなります。

以上が応援団復活までの経緯となりますが、私自身苦労や苦悩を感じたことはなく、休日に練習に参加して頂き何かと我儘を聞いて頂いた河村会長を始めとするOBの先輩方、応援団を無くさないよう手探りで活動し、私に繋いで頂いた前原さんを初めとする体育会本部役員先輩方、支えてくれた同級生達とチアリーダー部を作った同級生達、入団しその後の応援団を作り上げていった安倍君を始めとする後輩の皆さんの情熱があったからこそ今の応援団があると思っております。



(平成 17 年 熊粋祭)

### みんなに支えられた応援団、チア活動

33代 (チア2代) 井手口 遥(旧姓:本松)

卒業して約8年、学生時代を振り返ると、やはり一番先に思い浮かぶのは応援団で過ごした日々です。家族よりも長い時間一緒にいて、書きつくせない程いろいろな経験をさせてもらいました。一年生の時、初めてチアを観て、絶対入部しようと決めたのを今でも覚えています。当時はリーダー部もチアリーダー部も人数が少なく、毎週水曜日にみんなで学食に集まってミーティングしていましたよね!

リーダー部の先輩達はいつも優しく、何でも いいよ～と言ってくれました!リーダー部の同輩は個性派でたまに衝突、おもしろかつ

たです。



(平成 16 年 冬合宿-阿蘇)

チアリーダー部の先輩達は、頼もしくておもしろくてかわいい?なのに、チアや応援団の為にはなりふり構わず頑張るところがとっても素敵でした。チアリーダー部の同輩達は、今でも大好き・心の友?きっとあの4人でなかったら乗り越えられなかった事がたくさんありました。

そしてたくさんのチアリーダー部の後輩達、いつも助けてくれてありがとう。応援団リーダー部とともにチアが活動し始め、これからまた新しい形に変わる事があるかもしれませんが、みんなが元気に活動していけるように見守っています。がんばれ—————(\*^\_^\*)!!

### 支えていただいた四年間

38代 山根 元気

2009年5月、本学 全学教育棟の一室で36代、森団長にお会いしました。中学、高校とあまり活動的とはいえない生活を送って参りました私にとって、「応援団」なる組織は無骨で厳格であり、到底務まるものではないとの認識でした。しかしながら、当時弓道部(基本的に兼部は不可とされていました)へ入部が決まっていた私に対し、「弓道部長と話をしたい」とまで言ってくださった森団長の熱意に負け、入部者数の減少で廃部の危機と聞いたこともあり、入部を決めることとなりました。自身が入

ることでこの伝統が少しでも繋がる可能性となるのなら、という受動的な想いもあったというのが正直なところであります。

一回生の時は森団長の真っ直ぐ、ひたむきな応援活動への想い、笑顔と厳しさとのメリハリの利いた指導に加え、キャンプや飲み会といった私的な活動でも数多く誘って頂きました。また、九州応援推進ネットワークという応援団互助組織を介し、他大学の応援団と交流する機会を得たことは、応援合戦のなくなった活動の中でよい刺激を受けました。



(平成 23 年 熊本大学ホームカミングデー)

37 代 堺団長とは練習への向き合い方で意見を違え、距離を置くことがありました。その中でも、各種イベントに取り組む姿を見せて頂きました。私が就任する際の弱気な発言に対し森団長より一撃頂き、気持ちを引き締めてもらったこともあります。就任後、肝心の次代が生まれず、思い悩む最中、学部同期の川口が三年次という忙しくなる時期にも関わらず入部してくれ、翌年には 39 代団長として一年生 2 名を迎え、部を盛り直してくれました。どちらかというとな保守的な私は口うるさい存在であったでしょうが、それを受け入れ、真摯に取り組む姿が記憶に残っております。

入部して一年ほどで、二人きりにしてしまった谷、西本は週一程度、指導に現れる我々を本

当に嬉しそうに迎え、指導を聞いてくれました。4 年間の活動を通し、27 代 秋田氏には入団時より多くの話を伺い、時には話を聞いて頂きました。唯一、練習にお呼びして指導いただく機会を作れなかったことが未だに悔やまれます。

部活動の応援活動が減る一方で大学開催のイベントに多々参加させて頂きました。関東・関西・本学の同窓会での演技披露や例年の OB 会で熊本大学の、そして応援団の多くの先輩方にもお話を伺いました。

50 周年という節目に筆を取らせていただき、応援団生活を振り返れば、常に誰かのお世話になっていたことばかり思い出されます。まだまだ未熟者ではありますが、先輩方にいただいたものを後輩たちへと返してゆこうと思います。

これほどまでに貴重な経験をつませていただいている熊本大学体育会応援団という組織の末席に加えて頂き、感謝申し上げます。この度は熊本大学体育会応援団創立 50 周年、心よりお慶び申し上げます。 押忍

## 貴重な体験をした応援団生活

39 代目 樋口 なつみ

チアリーダー部 8 代目一同です。この度応援団が無事、50 周年を迎えられたことを心からお喜び申し上げます。



(平成 24 年介護施設しょうぶ苑訪問)

大学時代は応援団としての活動の中で、たくさんの貴重な経験を積むことができました。その中でも心に残っていることが2つあります。

1つは、大学近くの介護施設「しょうぶ苑」での演技です。誕生日会のゲストとしてお招き頂き、チアリーディングの演技と、リーダー部と一緒にエールを披露しました。施設の方々に非常に喜んで頂け、演技後には温かい言葉もたくさんかけて頂きました。地域の方々とのふれあいを通じて、応援団としての原点である「人を元気にする」ことを学ぶことができた、とても貴重な体験となりました。



(平成24年 ロアッソ熊本応援)

2つ目は、熊本のサッカーチーム、ロアッソ熊本の試合前に、スタジアムで演技をさせて頂いたことです。若い層のサポーターを増やすことで、もっと熊本を活性化させていこうという目的のもと、リーダー部と協力し合いながら演技をしました。学内を超えて、他の団体の方々と一緒になり、熊本のために活動できたことは、私たちにとって非常に有難い体験でした。

これからも先輩方が築かれてきた歴史と、これから新たに結ばれていく絆を大切に、一丸となって熊大を、そして熊本を盛り上げていける応援団であり続けることができれば大変嬉しく思います。

## 応援団チアリーダー一部で得たもの

40代 甲斐 彩之



(平成25年 かんちゃん&40代の面々)

熊本大学応援団 50周年おめでとうございます。この伝統ある部活に出会い、たくさんの経験をさせていただきました。大学4年間での思い出と得たものを書こうと思います。

応援団チアリーダー部での4年間で得たものはたくさんあります。その中でも、やはり素敵な仲間と出会えたことが何よりもうれしいです。コーチ、先輩、後輩とのつながりも強く、お互いに尊敬し合う関係でした。同期の仲間は、何でも言い合える仲で、家族と同じくらい大切です。苦しい時も楽しい時も、ずっと同じ時間を過ごしてきたからこそその絆があります。3年時の大会前にサプライズでもらったアルバムは一生の宝物です。そのアルバムを作ってくれていた時間や思いを考えると、本当に感謝の気持ちしかありません。

私たちの代が3年生の時に、チア部は創立10周年を迎えました。そして今年、応援団が50周年です。初代の方々の思い、それを引き継いでいった多くの先輩方、そんな歴史ある伝統の中に、少しでも携えたことに感謝しています。これからも熊本大学応援団が多くの人々の心の支えとなり、みなさんを笑顔にしていけるように、伝統を守っていきたくと思います。

最後に、熊本大学HPのWEBマガジンに私達の時に紹介されました⇒次頁に掲載

WEBマガジン「KUMADAI NOW」受け継いだ思いと共に目指すは夢の舞台！

# KUMADAI NOW

WEBマガジン 熊大なう。



## 熊本大学ホームページ WEBマガジンから

本記事は 熊本大学HP>WEBマガジンの記事を編集転載したものです

先輩たちが作ってくれたユニフォームのぬいぐるみ。宝物です！



### 全員が主役になれる！それがチアの魅力

今年、発足10周年を迎える「熊本大学 体育会応援団チアリーダー部BLAZES（ブレイズ）」（以下応援団チア部）。昨年は「全日本学生選手権大会」（インカレ）の決勝進出、またインカレと並ぶ全国大会「JAPAN CUPチアリーディング日本選手権大会」出場と、チアリーダーなら誰もが憧れる夢の舞台・国立代々木競技場に2度も立ちました。

応援団チア部は、主将の教育学部3年・甲斐 彩乃さんを筆頭にプレイヤー18人、マネージャー4人の22名。ほぼ全ての部員が入部するまでチアリーディング未経験にも関わらず、なぜ応援団チア部に入部しようと思ったのかを聞くと、異口同音に「入学式の演技を見て感動し、見学に行って先輩たちの仲の良さや憧れて、私もこの人たちの仲間になりたいと思った」という答えが返ってきました。「熊大チア部で出会えた仲間が財産です」と甲斐さんが語るように、応援団チア部は本当に仲がいい。チアの演技にも現れるそのチームの仲の良さや、応援団チア部の最大の魅力です。

ハードな練習を笑顔でこなす彼女たちにチアリーディングの魅力を尋ねると「一人一人の持つ魅力が最大限生かされることです！」と語ってくれました。「周りとは比べ身長が高くチアに向いていないと思っている子でも、トップ（\*1）を支える大切な役割がある。体が小さくて力がいないためにベース（\*2）が苦手な子も、練習を重ねればトップで輝くことができる。みんなが主役になれる、輝ける場所があるのがチアの魅力です。また、一人でも欠けたら技は完成しません。みんながそれぞれ最大限の力を出した時に一番の演技ができるんです。全員で喜びを分かち合えるのもチアの醍醐味ですね」。

どんな子でもチアができるということ、そして仲間と一緒に作り上げるチアがいかに楽しいかを知ってもらいたいと、現在は新入生の勧誘にも力を入れています。



「全員が楽しく笑顔でいられること」を何よりも大切にしている応援団チア部。



誰よりも声を出し、汗を流しながらチームをまとめる主将の甲斐 彩乃さん。



力強い演技で新入生の入学を祝うBLAZES。



「入学式の演技を見て感動して

## “道”を作ってくれた先輩たちの存在



毎年全国大会出場を果たす常連チームに比べて、創立10年という“若さ”の応援団チア部が代々木の舞台に立つまでに成長したのは、彼女たちを育て、交えてきた先輩たちの存在が大きかったといえます。

昨年の冬に新幹部となった3年生にとっての目標でありお手本となっているのが、1年生の頃に全国大会へと導いてくれた先輩たちです。

「全国大会に出場した2年前の先輩たちはどんな事にも真剣だった」と振り返る3年生。甲斐さんたち1年生は12人、2年生は6人の中、当時の3年生は9人。後輩の指導に時間を割きながらも、自分たちの練習も一切手を抜くことなく、できるまで練習し続けていたという先輩たち。完璧な演技に近づけるために、暗喩になるほど互いの思いをぶつけあっていたそうです。しかし、いったん練習が終われば本当に仲の良い先輩たちの姿を見て、こういう関係を作っていきたいと思うようになっていったといいます。

「落ち込んでいた時には声を掛けてくれ、少しでも気を抜くと本気で叱ってくれました。その分、大技を決めた時や大会で結果を出した時には全力で褒めてくれるんです。こちらの思いを汲み取り、やる気を出してくれるその厳しさと優しさ、そして諦めない強い気持ちを身を持って教えてくれました」と3年生は語ります。

「創立わずか代々木の舞台に立てたのは、コーチの熱心な指導と、チアと練習に対する先輩たちの強い思いがあったから。経験のない私たちを指導し育てながら、部を全国大会まで導いてくれた先輩たちの努力を、今その立場に立ってみてやうとわかるようになりました」と甲斐さんは語ります。

彼女たちにとって、先輩たちは“神様”と呼ばれるほどの憧れの存在。目標であり、超えるべき壁として、今も部員たちをけん引する力となっています。



先輩たちが連れて行ってくれた全国大会の舞台に今後もしつづけることが応援団チア部の大きな目標になった今、その目標に向けてまずやらなければならないことは、チームの関係づくりでした。自ら意見を言えない部員もいる中で、みんなが意見を言い合えるチームにするにはどうしたらいいかと話し合いを重ねてきたという3年生。それと同時に1年後、どのようなチームになっていきたいか、大会でどのような演技を披露し、絶対に何点獲得する！といった具体的な目標について、みんなでミーティングを重ねたと話します。「今、学年関係なくどんなことでも言い合える関係ができています。慣れ合いではなく、互いに尊敬と信頼ある関係が築けていることが嬉しい」と甲斐さんは語ります。

「この10年、応援団チア部は確実にレベルアップを続けてきました。しかし、これまでと同じ歩幅で今後も成長し続けることができるかがこれからの課題です」。この課題を乗り越えるためには、これまで以上に練習を重ねること、そして先輩たちから学んだ技と思いを後輩に受け継ぎ、次の代を育てていくことが先輩への最大の恩返しだと、3年生の思いはひとつです。今も学業が忙しい中、大粒の汗をかき休憩時間も自主練習をしながら3時間みっちり、必死に練習に励んでいます。

先輩たちに何倍も大きく成長したチームの姿を見てもらえるように、これまで培ってきた絆と信頼関係を生かして今年も国立代々木競技場を目指します。今しかない学生生活、今しか一緒にいけない仲間だからこそ、今この瞬間をみんなと全力で過ごしたいと語る彼女たち。その姿はキラキラと輝いて見えました。

## 憧れの存在を超えて今年も夢の舞台へ！



(2013年4月25日掲載)

お問い合わせ  
マーケティング推進部 広報戦略ユニット  
096-342-3122

## 金守先生の思い出

金守先生は、昭和43年（1968年）12月に応援団顧問に就任していただいた。以来教育学部教授を退官される昭和61年（1986年）までの長きにわたり顧問として、応援団活動へのご指導、ご助言をいただいた。毎年発行している応援団OB会誌には、先生の応援団への温かい想いが伝わってくる寄稿文が掲載されている。その中の一部を再掲させていただきます。

### 顧問教官であることの喜びと誇り

（昭和44年発行 剛毅第1号）

数年前、武夫原の片隅で応援団は、ささやかな産声をあげたように記憶している。夕闇せまる武夫原で同じ動作を、声をからしながら厳しく気合いをこめて反復練習をしている姿に、当時私はひそかに敬意の念を払っていた。

今や応援団は体育会の底辺を支える大きな存在にまで成長を遂げている。はからずも顧問教官としての依頼を受けた私ですが、団員諸君と接するたびに顧問教官になった喜びをしみじみかみしめている。一見荒々しい印象を受ける行動や動作の中に秘められた美しい友情や義侠心、自らの使命を自覚して自己を犠牲にして、一点の疑いすら抱かず、ただひたすらに黙々と学友の士気を鼓舞することに心血注いでいる諸君の美しい心情は、それらのものが失われつつある今の世代に、キラキラと宝石のように輝いている。

私は、応援団顧問教官であることの喜びと誇りを諸君に深く感謝するとともに、諸君の今後の努力と発展を心から期待している。

### 夕闇が迫る武夫原に響く歌声に…

（昭和46年発行 剛毅第3号）

武夫原に夕闇が迫る頃、今日も又、応援団の練習の声が研究室まで聞こえてくる。

「ああ、今日も皆元気にやっているなあ。」  
私も頑張らなくてとはと、自分を励ますことが最近たびたびある。近頃、学内における雑務的な仕事が多くなり、なかなか団員の諸君と話す機会がないまま、何となく諸君も研究室や我が家からやや足が遠のいているようだ。

昔は（昔とは大げさだが）団長を始め団員の諸君が何かと理由をつけて話し込みに来たり、或いはこちらが悲鳴をあげるくらい我が家にも押しかけてきた。

私自身も諸君と、杯を交わしたり、人生や学内問題等について勝手きままな話をするのが楽しみであり喜びであった。そのことが楽しかった思い出として残っている。

この十数年は私も熊大に在職していると思うが、今後、年をとればとるほど君たちとの語らいや思い出は大切なものになってくると信じているし、また大切にしていきたいと思っている。



（昭和47年12月  
演武会での挨拶）

卒業した諸君は、約束通り必ず近況報告を始め、大切なお嫁でももらう時は、それこそ事前報告の義務を怠らないようにしてもらいたいし、在校生の諸君は、私がかつ運動場に出られないからと敬遠せず、私の研究室や自宅に

押しかけて来て、たまには夜の巷に誘惑してもらいたいと心ひそかに思っていることを白状しておく。

応援団を愛し団員諸君の健闘をこころから祈っている。

## 応援団諸君との宴で感じたこと

(昭和 61 月発行 副読第 18 号)

早いもので熊大を退官してから、数か月余りになる。最初の頃は一抹の寂しさもあったが、人間には新しい環境に対する素晴らしい適応性があるもので、やがて新しい生活にも慣れ、最近では毎日張りのある充実した生活を送っています。

最近、11月中旬に7代団長だった河村君から電話があり、「実は忘年会を兼ね先生の家でOB会をやりたいんですが…」との話があった。ご存知のように我が家は、家内と二人の上、家内もあまり健康でないので、これは大変なことになると返事を渋っていたところ、さすがに銀行員(河村氏)だけあって、電話の向こうで私の気持ちを察知したのだろう。



(昭和 61 年 2 月金守先生退官祝賀会)

「先生、何もご迷惑をおかけしません。我々が、料理から酒まで全部準備し持参し、OBの奥さん同伴でお邪魔し炊事一切をやりまますから、先生と奥さんは、ただ座っているだけで結構ですから」とのことなので、一応快諾した。

その計画では、大体5、6人で、私も久しぶりに懐かしい諸君に会えると密かに楽しみにしていたところ、その前日に再び河村君から電話があり、実は参加者が10人くらいに増えるとのことであった。

「これは大変になった、10人も座れる食卓をどうしようか」など急に心配になった。

「こら！我が家は料理屋ではないぞ！！食卓などをどうするのだ」と思わず、つまらぬグ

チを言ってしまったところ、河村君の電話が切れてものの5分もたたずに、OB会幹事長の南君から電話があり…

「先生、ご迷惑をかけます。会場を変更しましょうか？」と如何にも心配そうに相談があった。これは、河村君が心配して早速、南君に相談したなと感じたので、「今から変更するといったら心当たりあるのか」と尋ねたところ「何とか探してみます」と頼りなさそうな返事なので、折角の好意ある企画を、このようなことで心配させて申し訳ないので、予定通り我が家で実施することにした。

当夜は待つほどに池松君夫婦がまず到着した。他の諸君の到着まで酒と肴を前にして待つのはなかなか難しいので、「池松！！ どうせ飲む酒だ、三人でそろそろ始めながら待とう」と早速酒宴が始まった。

やがて、3代目団長の古賀君が奥さんと一緒に、そして南君が順次集まって宴はますます佳境に入った。それぞれの諸君がびっくりするような数多くのご馳走と酒を持参してくれたので、本当我が家は何も準備しないまま豪華な酒宴になってしまい、賑やかで楽しい和気藹々とした宴がいつ果てるともなく続けられた。参加者を詳記すると、古賀、南、河村、池松、原田、守尾、阿南、花籠の諸君と古賀、池松の奥さんであった。



(昭和 61 年 2 月金守先生退官祝賀会)

そのうち、古賀君から「先生！このような会は年に2、3回やらないかんですな！」という提案があり、私も先生に諸君の好意が嬉しく満場一致で決定した。私にとっては、社会的にも

人間的にも大きく成長していく諸君を目のあたりにするのは、この上もなく幸せなことであり、特にだんだん立派になる諸君が、このように酒、肴持参で集まり、学生時代に戻り歌を唄い、肩を組んで「武夫原」を踊り、私たち老夫婦を心温かく激励して頂き、この上ない果報者だと思っている。正直なところ、この次の会合を古賀君や南君、河村君たちが相談して何時頃に決定するのか今から待ち遠しく思っている。

どうか、応援団のOB諸君や現役の諸君!!、私も退官して時間の余裕もできたので、機会があれば連絡して遊びに来てもらいたい。呼び出しなら、ますます結構で健康の許す限り出かけて、諸君と杯を交わしながら、昔話などしたいものだと思っている。寒さもこれから厳しくなると思うが、どうか健康にくれぐれ注意して益々のご活躍を心から祈ります。

## 若き日の金守先生

我々の知らない金守先生…、戦後の昭和20年代から陸上競技に打ち込み、教育者として戦後の日本を発展へと導いた姿が浮かび上がってくる。以下、熊大退官時の新聞記事から、要約して、その姿を追ってみる。

戦後の荒廃の中から産声を上げた国民体育大会。金守新一(65歳/熊大教育学部教授)は、その戦後の第1回大会(昭和21年)から第6回大会(昭和26年)までやり投げの選手として出場した。

金守は、昭和19年に東京高等師範体育科を繰り上げ卒業して、学徒兵として応召、そして常に死を意識した時代から一転終戦、国体で再び見た日の丸は終戦とともに燃え上がった陸上競技への情熱に拍車をかけた。

しかし情熱だけではどうにもならなかった。物資が欠乏し、まともな生活さえできない時代だった。昭和21年には五高で教職についたが、月給は食費で消えてしまった。国体出場の苦勞

は並大抵ではなかった。妻の英枝は自分の着物を入質し旅費の費用を捻出し、国鉄関係の陸上仲間に頼み込み汽車の切符を手に入れた。

ギュウギュウ詰めの汽車に、競技のやりを携えて数日かけて会場の石川県に着いた。昭和22年の第2回大会の事である。戦後のスポーツの復興は、オレたち高等師範生が率先してやるという気概が苦難を乗り切る支えとなった。



(熊大武夫原)やり投げをする金守先生-昭和21年

それから40年近くがたった。金守は熊本大学教育学部で後進の指導を続けた。専攻は体育実技。運動技能分析を手掛ける。運動方法学ともいう。その研究に「選手時代の経験が大いに役立っている」と語る。

しかし、「研究する立場にあっても、やはりスポーツは“教える”より“やる”方がいいね」と言っていて、週3、4回は花岡山に登る、更に30キロのダンベルを使った筋肉トレーニング。夏は更にプールで1000mの遠泳である。この年になっても、テニスをやっている時は「絶対に勝ってやる」という気で相手に向かうという。来年3月には退官する。でも「スポーツに関しては、手抜きをするのができない性分。死ぬまでスポーツマンでいたい」という金守の現役時代の精かんさが今も息づいている。

(昭和60年10月1日熊本日日新聞記事から編集)



## 和田先輩の思い出

和田初代団長はOB会誌「剛毅」に毎年、心に残る数多くのメッセージを寄せていただいた。その中のごく一部であるが、50周年記念号に再掲させていただきます。

### 孤高……我が熊本大学応援団

(昭和45年発行 剛毅第2号)

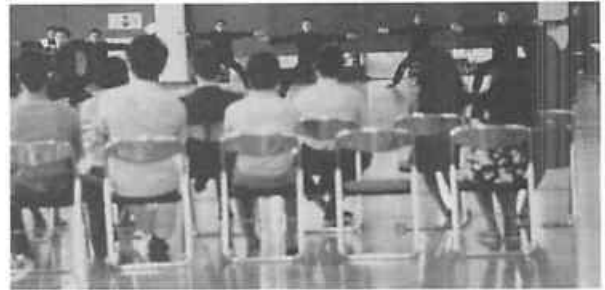
私の5年間の熊大生活のうち、後半2年間の全てをかけた応援団。喜怒哀楽…そう、それはまさに生活の全てだった。商大との合同練習、初めての団長会議、まさに本当の兄弟だった合宿、武夫原の砂の上を裸足で走った厳冬の早朝、理由もなく、あとからあとからとめどもなく涙のこぼれたコンパ、そしてとても思い出さすことできないさまざまなことが走馬灯のように脳裏をかすめ過ぎては、あの感激の発会式につながる。もう、あの日から3年の歳月が流れた、まさに感無量。



(昭和46年9月 第2回OB会 熊大正門)

太鼓が欲しかった日々、団旗が、校旗が、部屋が、演武が、練習場が、そして何よりも団員が欲しかった日々。それらの日々が教えてくれたのは、「求めなくてはいけない」ということだった。「限りなき欲望が限りなき前進につながる

ることだった。より堅固な「団結」を求め「和」を求め、より素晴らしい『応援団たること』を求める。いつまでもどこまでも、限りなく求める応援団でありたい。



(昭和46年9月 第2回OB会 記念演武会)

誰かが言った

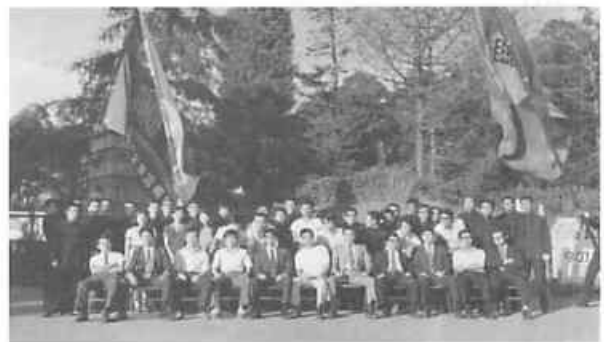
「何であろうと 人間が本気でやることはそのまま立派だ」

ウルタン〜〜実に懐かしいことばだ。

今やすでに5代目を数え、多くの団員を持ち、優れた演武と立派な校旗とを有し、部屋も練習場もある。私達が欲しかった外面的なものはほとんど揃い、その上、ある程度の実績と信用と名声をも得た。

そのことは、私達にとって、まさにこの上ない喜びだ。だが、その居心地の良さの上に、もしも胡坐をかきそうになった時、思い出して欲しい、ただ一つのことがある。それは、この集いが常に人間と人間との、友と友との心の触れ合いによって支えられているということだ。そして、またそのことの「誇り」だけが、私達の“世代”を支えてくれたのだ。

孤高……我が熊本大学応援団は、そんな一本の厳しい道に行く



(昭和46年9月 第2回OB会 熊大正門)

## 終わるのではない はじまるのだ

(昭和 49 年発行 剛毅第 6 号)

- 応援団 10 周年記念号 -

ありがとう。

何に対してなのか自分にもわからない。でも、今の自分を生かしてくれた何物かに対して、ただ、ありがとうと言いたい……そんな気持ちである。

「10 周年は女房同伴で集まろう」折りにふれて私達はこんな話をした。しかし、そんな話をしながら「夢だ」と呟いている、もう一人の自分をいつも感じた。その夢が、今、ここに、こうして現実となっている。どうして嬉しく、またありがたくない筈があろう。その喜びを、この集いの中で過ごしてきたみんなと、心ゆくまでかみしめていたい……今はそんな気持ちである。

過去は過ぎ去った日々でしかない。しかし、その過ぎ去った日々があつて、はじめて今日がある。今日の、この感動は、10 年という歳月が生み出したものなのだ……。と同時に決して忘れてならないことは、今日の、この感動が、「明日」を培っていくということだ。出来るか出来ないかは、やってみなければわからない。大切なのは、「出来る」と信じることだ。



(昭和 52 年 9 月 第 4 回 OB 会)

あの頃は……。太鼓が欲しかった。団旗が欲しかった。部室が、演武が、練習場が……。そして何より団員が欲しかった。欲しかったから求めた。求める気持ちに終わりはない……。そして、今こそしみじみ思う……。それが目的だったのだと。求める日々が、夢に近づく日々

だったと。何もなかった。だから夢があった。だから可能性があった。だから生き甲斐があった。10 周年を迎えた今、一体何があるだろう。これから何を求めていったらよいだろう。孤高……あくこともなく求め続けていく団員諸君にこれからの夢をたくしつ、私の拙い詩を 10 周年に寄せる。

終るのではない、はじまるのだ。

生きているかぎりいつでもどこでもそこで終るといことはない。

生きているかぎり、いつでもどこでもそこからはじまることができる。

若者に過去はない、若者にあるのは、常に現在……ただ今と未来だけだ

一生懸命生きろ、力いっぱい生きろ。

己を信じて精いっぱい生きてきたことに喜びと誇りを感じる日がきつとくる、必ずくる。

その日まで、黙って歩け。



(昭和 55 年 9 月 第 5 回 OB 会)



(平成 3 年 9 月 第 10 回 OB 会)

熊本大学応援団 50 年

# 各代の出来事



## ＝応援団10周年記念誌＝「応援団発足当時の思い出」(初代団長 和田英樹氏寄稿)の再編集版

1966(S41)  
2月

「応援団を作りたいと思うんですが、協力していただけますか」……私が、当時の体育会会長の田川君(応援団2代目団長)から、初めて依頼を受けたのは、昭和41年(1966年)2月、空手道部の追出しコンパが子飼の「サイトウ」で行われた席上でのことだった。その折、私は空手の練習中に骨折して、まだ、左足にはギプスがはめられ、松葉杖をつきながら、そのコンパにも参加していた状態であったのだが、軽い気持ちで「足が良くなったら」と、引き受けてしまった。

5月

第9回対商大春季定期戦のエール交換にただ一人でエールを切る

新年度になり、対商大春季定期戦の市中パレードがあるというので、例のごとく花畑公園に集結した。当時、私はエールひとつ知らない、一人の団員も持たない、文字通り名目だけの団長であった。いつものように商大と熊大がむかいあって挨拶をかわす。商大応援団のエールが終わると、「礼儀だからお宅もやってくれ」ということだ。私に出来るはずはない。応援団の作法……、そんなこと私が知っているわけもない。でも、やらねば戦う前から熊大が敗れたことになる。少なくともあのときはそう感じた。そして、この瞬間が、応援団結成への私の決意を不動のものにした。

力いっぱい、精いっぱい、戦おう…という意志を持つために

私は何も知らない者達から嘲笑をうけているのが恥ずかしかったのではない。私を笑っている相手の学校に対しての憤りを感じたのでもない。何のために己が今、この公園に集結しているのかさえ考えてみようともせず、自分の学校が当面の戦いの相手校から面前で笑われているのを見ながら、自分も一緒に笑っている連中の神経がたまらなかったのだ。一体、何のための結団式なのだ。あの頃までは、確かに戦う前から勝敗は決まっていた。参加することに意味を見出そうとするのは確かに尊いことだ。でも、力いっぱい、精いっぱい、戦おうという意志を持たずに何が参加だ。

6/18

九州地区インカレ応援団団長会議(於:佐賀大学)に出席

そこに集結した九州各大学の応援団を見て、正直言って、そこに存在する不可思議なものを痛感せずにはいられなかった。俺が求めていく道は……、俺がこれから作ろうとするものは……、こんなんじゃない！ その時、恐怖の下で一生懸命自分に言いきかせていたような気がする。ともあれ、熊本大学応援団は、その産声を高らかにあげる日をめざして陣痛の苦しみ真只中を歩き始めたのだ。

7/1～7/7

初合宿(熊商大応援団との合同練習を経て…於:工学部記念館)

応援の「お」の字も知らない者ばかりが集まって、暗中摸索、試行錯誤の一週間。熊商大との合同練習で(少なくとも、あの時の意識の中では)生死の間をさまよいながら練習方法を知る。

暑い日差しの中、我々は上半身は裸であった。合同練習の1、2の声が、熊商大グラウンドに広がる。顔からの汗が流れ前が良く見えない。このまま眠ってしまうかと思った。その瞬間、シコ立ちの練習が終わった。やっとの思いで立ち上がったら、押忍という声とともにランニングになった。私は最後の力を振り絞って走り続けた。そして2日目でも最後にランニングの時が来た。熊大の木部君がトップをきった時はヤッターと思った。この練習を支えたのは、熊大は商大には負けはしないという気持、自負心であった。応援団結成して初めての商大との合同練習は終わった。(3代団長:古賀氏寄稿文より)

7/15～7/18

九州インカレが佐賀(佐賀大学)で開催され遠征をする

エール交換では、8名のバックで80名の応援団にも負けなかったつもり。破れ太鼓にオンボロの旗。それでも胸を張って歩いた。演武が無くて、号令に合わせて空手のから突きをやった。

11/1

初演武…即興の巻頭言(於:県立図書館ホール) ※この頃応援団旗出来上がる。

前日、国文科の研究室で即席に作った“武夫原頭に草萌えて・巻頭言”の演武を初公開。この演武が永久に残るようになるとは、この時夢にも思わなかった。

## 初代

昭和41年～42年  
1966年～1967年

1966/6/29 ザ・ビートルズが初来日。日本武道館で翌日公演。11曲35分間だけのステージ

1966年 トヨタ・カローラ、日産・サニーが発売開始。日本のファミリーカー時代の幕が開く

1966年 巨人、新人の堀内投手が開幕13連勝を飾る

11/10

第10回対商大秋季定期戦での応援…そしてその後

定期戦終了後のある日の体育会室。応援団に残るか、空手道部に帰るか一人ひとりに質していった。空手部に入部してきた連中なのだから、空手部に戻って行くのは当然のことだった。でも、一人ひとりの口から、直ちに「空手部に戻ります」という言葉を聞いた時、私は、悲しみとも憤りとも、まさに表現しようのない感情にとらわれた。彼等も応援団を心から愛していた。一度でも、この中で生活したことのあるものなら、それは説明する必要のないことだ。心の中では誰もが悲しみをかみしめながらそう言っているのだと思うと、余計に自分の気持ちを抑えられなくなった。

でも、応援団存続の意志の先には道があった

それから、副島と二人でトボトボと私の下宿へ帰った。黙って歩いた。するとボツンと副島が言った。「団長、やりましょう……！」ありがとう副島！俺はお前の口からそれを聞きたかったのだ。団はまた、ふり出しに帰った。そして、意志あるところには、やはり道がある。体育会会長の田川、副会長の原、両君が役員を辞して入団した。南が入り、吉永、嶋田も入った。そしてまた、安倍もこの集いに帰ってきた。団は、再び練習を開始した。

(2代副団長・原氏、3代団長・古賀氏との練習風景)

1967(S42)  
1/14

クラブ対抗立山駅伝に参加、新年会開催  
体育会総会のあと26チームが参加して応援団は16位。このあと新年会を開催。

3/27~4/10  
4月

五葉会会室にて合宿  
初めての新生(第4代)を迎える

応援団は初めての新生を迎え、団員獲得に血眼になる。が、自然、私の母校である福岡県立豊津高校出身者がその大半を占めるという偏った形にならざるを得なかった。

7/11~13

九州インカレが福岡で開催され応援遠征  
九州南北乱舞合戦にトップで出場。  
第2学生歌、制覇、同期の桜、武夫原頭に草萌えて

(その日の日記から)

何も無いところに何かを作る  
そして そこに生まれた新しい存在に  
一人 また一人と集い合う 集まってくる  
喜びがあり 悲しみがある  
“生きている”ことをしみじみと感じる  
そうだ！  
人生は感動だ  
汗と涙で築きあげる感動だ

11/23  
11/24

第12回対商大定期戦にて開会式に臨む  
熊本大学応援団結成記念演武会開催(於:水前寺体育館)  
この日をもって我が熊本大学応援団は名実ともに出発した。

俺はもう要らない。学園の中に、今迄見ることが出来なかった新しい種子を俺が蒔いた。その萌芽は、それがもし、前向きな姿勢のものであるならば、きっと意味あるものに違いないと信ずる(日記より)



1967年11月23日 対商大定期戦開会式

この日、初代副団長副島靖英と私は、熊本大学応援団OBとなった。



1967(S42)  
11/15

第12回対商大定期戦にて応援  
→ プラスバンド部を併設して、リーダー部とプラスバンド部となる  
→ 初代追い出しコンパを開催(於:陣屋)

1968(S43)

昭和43年2月10日 熊本大学応援団結成記念写真を撮影



熊本大学応援団結成記念 昭和43年2月10日



熊本大学応援団結成記念 昭和43年2月10日

4/21

新入生(5代)歓迎コンパを開催(於:阿蘇草千里)



4/27  
5/2  
5/18  
6/5

"でんでん虫"が完成  
一年生への肝だめしが始まる(小峰墓地など)  
第13回対商大定期戦にて応援  
水曜ミーティングが始まる

6/7部室ができる

6/15学生部より太鼓が寄贈される

## 2代

昭和42年~43年  
1967年~1968年

1967/4/15 東京都に初の革新知事、美濃部亮吉氏当選。美濃部スマイル受ける  
1967/3月 自民党が非核三原則(作らず、持たず、持ち込まず)の基本方針をまとめる  
1967年 はがき 7円、封書 15円、大衆浴場 32円、瓶ビール 120円、瓶牛乳 21円

1968 (S43)  
7/2  
7/3~8

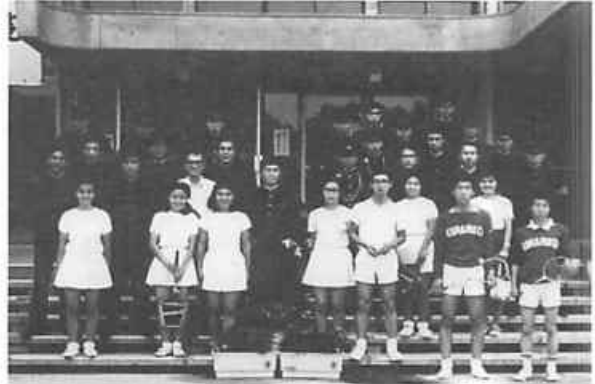
プラスバンド部に楽器が揃う  
合宿をする

7/11~14

九州インカレが長崎で開催され応援遠征



田川団長と団員、5代団員を迎えて



インカレ長崎の応援にて



9/1~7

合宿(三賢堂)

9/5

幹部交代(2代→3代)

1969 (S44)2月  
第2代追い出し  
(安心荘にて)



- 1968(S43)  
9/5 幹部交代(2代→3代)(三賢堂)  
9/15 アルバイトでボシタ祭りに参加  
9/16 新部室できる(武夫原北側)  
→ この頃、第3学生歌完成  
10/25 リーダー公開祭開催(於:市民会館)  
11/19 第14回対商大秋季定期戦にて応援



武夫原北側の新部室棟完成



リーダー公開祭



→ この頃、剣道部より基本の教授を受ける

→ 女子体操部より型を習う

12/15

江津湖駅伝大会を応援

12/21

立田山駅伝大会に参加

12/25

金守先生、応援団の顧問に就任していただく

12/26

第1回OB総会を開催

1969(S44)

1/11

リーダーシップトレーニングに参加(於:九州研修所)

新年のセレモニーが始まる

屠蘇 → 藤崎宮(エール) → 蜂楽饅頭会

1/13

新しいユニフォームを制作、評判は上々。



S43年(1968年)夏頃(3代、4代、5代) ⇒ S44年(1969年)2月頃



### 3代

昭和43年～44年  
1968年～1969年

1968/12/10 東京都府中市で三億円強奪事件が発生、1988年に全て時効となる

1968年 東大紛争起こる 1/29無期限スト 3/28安田講堂占拠 翌年度の東大入試中止

1968/7/7 参議院選挙でタレント議員当選 トップ石原新太郎、2位青島幸雄…



3月

春季合宿(於:工友寮)

火の国祭りに参加



立田山裏の魔の階段トレーニング

2代田川団長をリーダーに立田山階段に行った。階段数は165段…嫌な練習場であった。5~10回往復すれば、かなり疲労する。そして、2回ほど往復したところで、団長が「30回やろうか」と冗談めいて言った。そして、10回過ぎてもまた同じように登りだす。20回…まだやめない。とうとう冗談が本気になって30回やってしまった。さすがにこれで終わりだと思ったら、うさぎ飛び、あひるとやらされた…。(4代佐村団長寄稿)

4月

新入生歓迎コンバ(6代)を開催(阿蘇草千里)

新入部員10名 マネージャー3名

→ 市営バスで阿蘇へ

4/4~8

新入生を迎えての初合宿

5月

第1回熊本地区五大学総合体育大会の応援

前夜祭(於:水前寺体育館)

→ 易水流れ寒うして 勝利への拍手 ポシタ 第3学生歌 武夫原頭に草萌えて



6月

九州産交南福岡営業所にて10日間のアルバイト

6月末

幹部交代(3代→4代)

1970年2月 3代追い出し会



1969(S44)

6/28

幹部交代(3代→4代)

7/4~

合宿(浄照寺; インカレに備える)

7/11~7/19

第19回九州地区大学体育大会(熊本開催)

団長会議主催 市中パレード主催

連盟祭に招待される

演武実施(田原坂、第3学生歌、勝利への拍手、武夫原頭に草萌えて)



8/16~19

天草白鶴海水浴場で合宿兼キャンプ

9/15

アルバイトでボシタ祭りに参加

10/19

第一回団祭開催 (県立図書館大ホール)

10月

OB会誌「剛毅」第1号発行



## 4代

昭和44年~45年  
1969年~1970年

1969/7/20 アメリカの宇宙船アポロ11号が、月面「静かの海」への着陸に成功

1969年夏の甲子園 決勝の松山商一三沢高戦、延長18回0-0で史上初の再試合

1968/8/7 「大学の管理に関する臨時措置法」公布。国大協、紛争收拾に有害と反論

The 50th anniversary memory magazine

1969(S44)

11/1  
11/8~17

遠歩に応援団として初参加(団体4,6,7,9,10位 個人6,7位)  
対商大定期戦応援  
冬季インカレ応援  
江津湖駅伝応援  
立山駅伝参加



1970(S45)

1月  
2/7  
2/27  
3/31  
4/1~4/7  
5月  
5/18~25  
5月下旬

新年セレモニー  
第3代追い出し会(安心荘)  
マネージャー追い出し会  
火の国祭りに参加(白川公園)  
春季合宿(豊津高校)  
新入生歓迎コンパ(阿蘇草千里)(7代)  
五月合宿(浄照寺)  
第2回五大学総合体育大会応援



↑ 火の国祭り



↓ 新入生歓迎コンパ



↑ 春季合宿(豊津高校)  
五大学総合体育大会 ↓



1971年(S46)2月追い出し会(4代)



- 6/27  
幹部交代  
(春金荘)
- 7/1  
合宿(浄照寺)
- 7/12~15  
インカレ応援  
(福岡)
- 9/3~9/10  
夏季合宿  
(武夫原)
- 9/13  
同志社大学応援団  
との交歓演武会  
9/15 ポシタ祭参加
- 11/1  
阿蘇遠歩参加  
個人、団体1位!
- 11/8~11/16  
対商大定期戦
- 11月  
OB会誌2号発行
- 12/19  
立田山駅伝
- 12月江津湖駅伝
- 1/7 新年行事
- 1/19  
第2回演武会  
(市民会館)
- 2/27  
追出しコンパ  
(4代:知命堂)
- 3/31  
火の国祭りに参加
- 4/1~4/7  
春季合宿  
中津研修会館
- 4/29  
新入生歓迎  
コンパ(草千里)
- 5/9~5/16  
五月合宿  
浄照寺
- 5/22~6/5  
第3回五大学総体  
応援



↑ インカレ応援(福岡)



夏季合宿 ↓



阿蘇遠歩 ↓



ポシタ祭り参加 ↓



立田山駅伝 ↓



江津湖駅伝 ↓



## 5代

昭和45年~46年  
1970年~1971年

1970/3/31 日航機「よど号」が赤軍派学生らに乗っ取られる日本初のハイジャック事件起こる

1970/3/14~9/13、大阪府吹田市の千里丘陵で日本万国博覧会(EXPO'70)が開催される。

1970/11/25 作家の三島由紀夫等が陸上自衛隊東部方面総監部で総監を監禁、割腹自殺



↓ 火の国祭り参加



↓ 第2回演武会 ↓



春季合宿 ↓



1972年(S47)  
1月(5代)  
追い出し会



- 6/19  
幹部交代  
(知命堂)
- 7/1~7/8  
合宿(浄照寺)
- 7/9~12  
インカレ応援  
(大分)
- 9/1~9/4  
夏季合宿  
(阿蘇地獄温泉)
- 9/15 ポシタ祭参加
- 9/25  
OB会誌3号発行  
第2回OB会開催
- 11/1  
阿蘇遠歩参加
- 11/13~11/22  
対商大定期戦
- 12/10  
第3回演武会
- 12/18  
立田山駅伝
- 12月江津湖駅伝
- 1/7 新年行事
- 2/26  
追出しコンバ  
(5代)
- ※この頃から  
正六に通いだす
- 4/2~4/8  
春季合宿  
鹿児島大学



インカレ応援(大分) ↑



阿蘇遠歩 ↓

夏季合宿(阿蘇地獄温泉) ↑



- 4/29  
新入生歓迎  
コンバ(草千里)
- 5/10~5/17  
五月合宿  
浄照寺
- 5/18~6/3  
第4回五大学総体  
応援



第2回OB会 ↓



## 6代

昭和46年~47年  
1971年~1972年

1971/7/30 雫石上空で全日空と自衛隊機が衝突墜落。乗客乗員162人全員死亡

1971/7/17 プロ野球オールスター戦で、江夏が9者連続奪三振を記録

1971/5/14 横綱大鵬(30歳)、引退。優勝32回



↑ 第3回演武会



春季合宿(鹿児島大学)



1973年(S48)2月 追い出しコンパ(6代) ↓



- 6/27  
幹部交代  
(春金荘)
- 7/4~7/9  
合宿(浄照寺)
- 7/11~7/16  
インカレ応援  
(北九州)
- 9/1~9/8  
夏季合宿  
(武道館)  
※学生応援歌の  
作詞の募集開始
- 9/15 ポシタ祭参加  
10/28~11/11  
対商大定期戦
- 11/1  
阿蘇遠歩参加  
団体1.4位  
個人3.7.10位
- 11月  
OB会誌4号発行  
11/29新演武  
惜別の歌完成
- 12/16立田山駅伝  
12/25納会  
餅つき実施
- 1/7 新年行事  
1/19  
第4回演武会  
市民会館
- 2/27  
追出しコンパ  
(6代)
- 4/1~4/8  
春季合宿  
宮崎大学
- 4/29  
新入生歓迎  
コンパ(草千里)
- 5/14~5/21  
五月合宿  
本光寺
- 5月  
第5回五大学総体  
応援
- 6/13  
熊本大学応援歌  
「我が熊大」発表会



ポシタ祭り参加 ↑

阿蘇遠歩参加 ↓

対商大定期戦  
市中パレード  
←第4回  
演武会  
↓

## 7代

昭和47年~48年  
1972年~1973年

1972/2/19 連合赤軍浅間山荘事件 警察隊が包囲し2/18警察隊が突入、人質救出。

1972/5/15 アメリカの支配下にあった沖縄が日本に復帰し、沖縄県が発足。

1972/1/24 元日本兵・横井庄一さん(56)をグアムで見発見・救出 恥ずかしながら…流行る





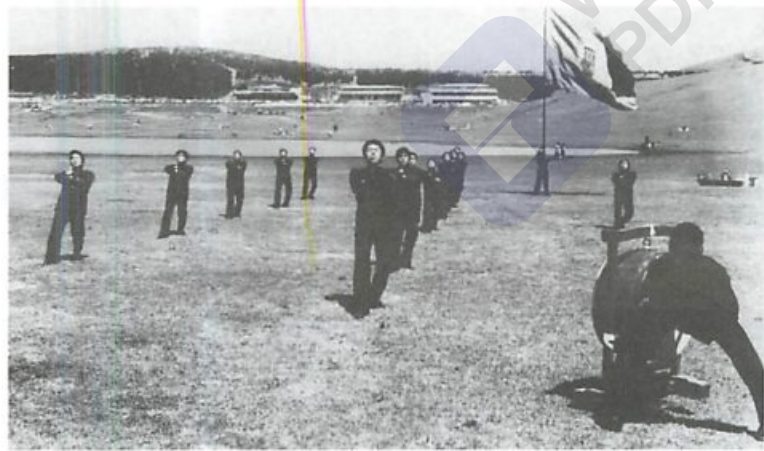
立田山駅伝 ↑



↑ 春季合宿 ↓



新入生歓迎コンパ(阿蘇草千里) ↓



1974年(昭和49年)2月第7代追い出し会 ↓



6/23  
幹部交代  
(春琴荘)  
7/1~7/8  
合宿(本光寺)  
7/12~7/16  
インカレ応援  
(鹿児島)  
8/31~9/4  
夏季合宿  
(阿蘇地獄温泉)  
9/15 ポシタ祭参加



インカレ応援(鹿児島) ↑

10/26  
プラバンとコンパ  
10/28~11/11  
対商大定期戦



夏季合宿(阿蘇地獄温泉) ↑

11/1  
阿蘇遠歩参加  
団体2.3位入賞

11/3~11/12  
対商大定期戦

OB会誌5号発行

12/13  
第5回演武会  
(市民会館)

12/15立田山駅伝

12/24納会  
餅つき実施

1/7 新年行事

2/23  
追出しコンパ  
(7代)

3/26~4/2  
春季合宿  
(九州大学)



第5回演武会 ↓



ポシタ祭り ↑

4/29~6/3  
第6回五大学  
総合体育大会

5/3  
新入生歓迎コンパ  
(阿蘇草千里)

5/8~5/15  
五月合宿  
浄照寺



## 8代

昭和48年~49年  
1973年~1974年

1973/11/29 熊本市の大洋デパート火災、3階以上を全焼、客と従業員104人が死亡

1973/10月 石油危機・モノ不足が起きる。トイレットペーパーや洗剤の買いだめパニック。

1973/3月 同年1月にベトナム和平協定調印。3/29、米軍の南ベトナム撤退完了



第5回演武会 ↑

春季合宿(九州大学) ↓



↓ 新入生歓迎コンパ(阿蘇草千里)



立田山駅伝 ↑

1975年(昭和50年)2月

↓ 追い出しコンパ(8代)



- 6/15  
幹部交代  
(知命堂)
- 6/30~7/7  
合宿(浄照寺)
- 7/11~15  
インカレ応援  
(宮崎)
- 9/1~8  
夏季合宿  
(武夫原)
- 9月  
新演武-蘇峰完成
- 9/15  
ボシタ祭りバイト
- 11/1  
第11回遠歩
- 11/9~17  
対商大定期戦
- 12/14  
第6回演武会  
(市民会館)
- 12/15  
第3回OB会  
(10周年記念)  
神水苑  
OB会誌第6号  
発行
- 12/21  
49年納会
- 1/11  
新年行事  
峰楽饅頭など
- 2/22  
追出しコンパ  
(8代)
- 3/31~4/7  
春季合宿  
牛深公民館
- 4月上旬  
新入生歓迎  
オリエンテーション
- 4/27  
新入生歓迎  
コンパ(草千里)
- 4/29~6/2  
第7回五大学総体  
応援
- 5/12~18  
五月合宿  
浄照寺



夏季合宿 ↓



インカレ応援(宮崎) ↑



第3回OB会 ↓



← 第6回演武会 ↓



## 9代

昭和49年~50年  
1974年~1975年

1974/3/10 元日本兵・小野田寛郎さんフィリピンで30年ぶりに救出された

1974/8/30 三菱重エビル爆破、東京千代田区丸の内の同ビルが爆破され多くの死傷者が出た

1984/9/14 「わが巨人軍は永久に不滅です」長嶋茂雄選手の引退試合でのセリフ



第6回演武会 ↑



春季合宿/牛深公民館 ↑



← 新入生オリエンテーション



新入生歓迎コンパ ↓



← 追い出し練習&コンパ



6/7

幹部交代  
(春琴荘)

6/24~6/28

早朝練習

7/6

火の国四大学  
応援合戦

武蔵塚までのランニング ↑

7/13~15

インカレ応援  
(佐賀)

8月下旬

夏季合宿  
(地獄温泉)

10/25~11/25

対商大定期戦

11/1

第11回遠歩



12/12.

第7回演武会  
(市民会館)

12/13

立田山駅伝  
3位入賞

12/22

50年納会



幹部交代 →

1/11

新年行事  
峰楽饅頭など

2/21

追出しコンパ  
(9代)

4/1~4/7

春季合宿  
武夫原

4/29

ばってん祭  
参加

5/2

新入生歓迎  
コンパ(草千里)

5/6~12

五月合宿  
浄照寺

5/15~6/5

第8回五大学総体  
応援

幹部交代後の初練習 ↓



夏合宿 地獄温泉 ↓



## 10代

昭和50年~51年  
1975年~1976年

1975/4月 サイゴン陥落でベトナム戦争が終結

1975年5月エリザベス英女王来日 9月昭和天皇陛下訪米

1975年「ワタシ作る人、ボク食べる人」CMが男女差別と指摘され放映中止(ハウス食品)



インカレ応援(佐賀) 一



阿蘇遠歩 一



第7回演武会 ↓



↓ 追い出し練習 一



- 6/7  
幹部交代
- 7/1~7/7  
早朝練習
- 7/3  
空手部との顔合せ
- 7/10~12  
インカレ応援  
(大分)
- 8/30~  
夏季合宿  
(工友寮)
- 10/30~11/205  
対商大定期戦
- 11/1  
阿蘇遠歩参加  
団体1位・明星
- 11/7  
合気道部演武会  
参加
- 12/17  
第8回演武会  
(市民会館)
- 12/21  
51年納会
- 1/10  
新年行事  
峰楽饅頭など
- 2/19  
追出しコンパ  
(10代)
- 3/31~4/7  
春季合宿  
荒尾
- 4/29~6/4  
第9回五大学総体  
応援
- 4/29  
新入生歓迎  
コンパ(阿蘇)
- 5/9~5/14  
五月合宿



夏季合宿 ↓

インカレ応援 ↓



新入生歓迎コンパ(阿蘇:草千里) ↓



## 11代

昭和51年~52年  
1976年~1977年

1976/7/27 ロッキード事件で田中角栄前首相逮捕された

1976/1月 鹿児島市立病院で五つ子誕生、大きな話題となる

1976年 ロッキード事件の国会証人喚問で使われた「記憶にございません」が流行語に...





歓迎コンパのあと部室にて |



11代追い出し練習  
1978/2月



6/4  
幹部交代  
(知命堂)  
6/27~7/2  
強化合宿  
7/9  
空手部との顔合せ



7/11~13  
インカレ応援  
(福岡)

8/31~9/4  
夏季合宿  
(学生寮)

9/17~18  
第4回OB会  
藤崎ホテル  
10/22~11/26  
対商大定期戦



インカレ(福岡) ↓

11/1  
阿蘇遠歩参加  
団体2.3位獲得

12/9  
第9回演武会  
(市民会館)

12/10  
立田山駅伝

12/15  
52年納会

1/10  
新年行事  
店休業  
お好み焼きへ

1/14  
成人式

2/25  
追出しコンパ  
(11代)  
藤崎ホテル

3/30~4/6  
春季合宿  
荒尾運動公園



夏季合宿 ↓

5/3  
新入生歓迎  
コンパ(草千里)

5/7~13  
五月合宿

4/29~6/3  
第10回五大学総体  
応援



## 12代

昭和52年~53年  
1977年~1978年

1977/9/28 日航機ハイジャック事件発生。ボンベイ空港で日本赤軍にハイジャックされた

1977/9/3 王貞治759号の本塁打達成し、ハンクアーロンの大リーグ記録を更新した

1975年「普通の女の子に戻りたい」キャンディーズがファンの前で引退宣言



第4回OB会 ↓



第9回演武会 ↓



5月合宿



春季合宿 ↓



- 6/3  
幹部交代  
(春琴荘)
- 6/17  
空手部との顔合せ
- 7/3~7/8  
早朝練習
- 7/11~13  
インカレ応援  
(長崎)
- 9月から部費値上げ  
500円になる
- 8/31~9/24  
夏季合宿  
(阿蘇)
- 9/15 ボンタ祭バイト
- 10/21~11月  
対商大定期戦
- 11/1  
阿蘇遠歩参加
- 12/14  
第10回演武会  
(市民会館)
- 12/20  
53年納会
- 1/10  
新年行事  
店休業  
お好み焼きへ
- 1/20  
成人式
- 2/24  
追出しコンパ  
(12代)
- 3/30~4/6  
春季合宿  
学生寮
- 4/21 入団式
- 5/3  
新入生歓迎  
コンパ(草千里)
- 5/7~12  
五月合宿
- 5/12~6/2  
第11回五大学総体  
応援



インカレ応援(長崎)

↑ 夏季合宿(阿蘇)



第10回演武会 ↓



← 春季合宿 →



## 13代

昭和53年~54年  
1978年~1979年

1978/5/20 激しい反対運動のなか新東京国際空港が開港

1978/8/10 日中平和友好条約調印式が行われた

1978年 国鉄「いい日旅立ち」の歌が大ヒット UFOピンクレディも大ヒット

The 50th anniversary memory magazine



一 五月合宿

新入生歓迎コンパ ↓



追い出し練習  
& 演武 ↓



6/3  
幹部交代  
(藤崎ホテル)

6/28～7/7  
早朝練習

6/30  
空手部との顔合せ  
7/11～20  
インカレ応援  
(熊本)

9/1～9/3  
夏季合宿  
(鹿児島)

9/5～9/7  
強化練習

10/20～11/17  
対高大定期戦

11/1  
阿蘇遠歩参加

12/13  
第11回演武会  
(市民会館)

12/20  
54年納会

1/13  
新年行事

1/19  
成人式

3/4  
追出しコンパ  
(13代)

3/24～3/30  
春季合宿  
学生寮

4/20 入団式

4/26～6/2  
第12回五大学総体  
応援

4/29  
新入生歓迎  
コンパ(草千里)

5/12～17  
五月合宿



インカレ応援(熊本) ↓

↓ 強化合宿



↓ 第11回演武会



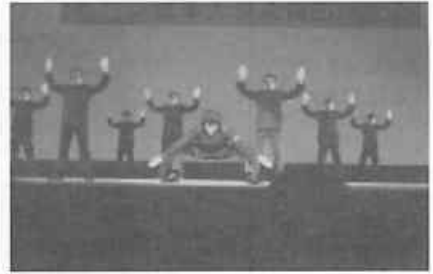
## 14代

昭和54年～55年  
1979年～1980年

1979年 ソニーのウォークマン爆発的ヒット(33,000円)

1979/5/3 鉄の女と言われたマーガレットサッチャー氏、ヨーロッパ初の女性首相になる

1979/1/26 三菱銀行猟銃人質事件が起き、警察官、行員の4名が犠牲になる



↑ 第11回演武会



↓ 新入生歓迎コンパ(阿蘇)



↓ 追い出し練習&演武 S56年3月

春季合宿 ↑



- 5/31  
幹部交代  
(藤崎ホテル)
- 6/28  
空手部との顔合せ
- 6/30～7/5  
早朝練習
- 7/11～13  
インカレ応援  
福岡
- 8/29～9/3  
夏季合宿
- 9/13～14  
第5回OB会  
藤崎ホテル
- 9/15 ポシタ祭バイト
- 10/25～11/15  
対商大定期戦
- 11/1  
阿蘇遠歩参加
- 11/23  
合気道部  
演武会参加
- 12/13  
立田山駅伝
- 12/19  
55年納会
- 1/7  
新年行事
- 1/9  
成人コンパ
- 1/20  
成人式
- 1/19  
第12回演武会  
(市民会館)
- 3/6  
追出しコンパ  
(14代・藤崎H)
- 4/1～4/7  
春季合宿  
大江合宿所
- 4/18 入団式
- 5/3  
新入生歓迎  
コンパ(草千里)
- 5/9～5/30  
第13回五大学総体  
応援
- 5/11～16  
五月合宿  
大江合宿所



インカレ応援(福岡) ↑

夏季合宿 ↓



第5回OB会 ↑

ポシタ祭り ↓



## 15代

昭和55年～56年  
1980年～1981年

1980/6/22 大平首相急死、吊い合戦となり初の衆参同日選挙で自民党圧勝

1980/8/19 新宿バス放火事件起こる ガソリンを投げかけ多数の死傷者が出る

1980年 ツクダが発売した「ルービックキューブ」が人気を集める





第12回演武会 ↑

春季合宿 ↓



↑ 新入生歓迎コンパ(阿蘇)

昭和57年3月  
15代追い出し会



- 5/30  
幹部交代  
(藤崎ホテル)
- 6/20  
空手部との顔合せ
- 6/27～7/4  
早朝練習
- 7/11～13  
インカレ応援  
鹿児島
- 9/1～9/3  
夏季合宿  
島原研修C
- 9/5～9/7  
強化練習  
武夫原
- 9/15 ポシタ祭バイト
- 10/24～11/14  
対商大定期戦
- 11/1  
18回阿蘇遠歩  
団体1位 ターティ  
中島とケッセンズ
- 11月 新演武  
翠巒完成
- 12/11  
第13回演武会  
(市民会館)
- 12/19  
56年納会
- 1/10 新年行事
- 3/7  
追出しコンパ  
(15代:藤崎H)
- 4/1～4/6  
春季合宿  
大江合宿所
- 4/24 入団式
- 4/29  
新入生歓迎  
コンパ(草千里)
- 5/3  
新入生歓迎  
コンパ(草千里)
- 5/8～5/29  
第14回五大学総体  
応援
- 5/10～5/15  
五月合宿  
大江合宿所



インカレ応援(鹿児島) ↑

↓ 阿蘇遠歩



↓ 第13回演武会



## 16代

昭和56年～57年  
1981年～1982年

1981/10/16 北炭夕張炭鉱ガス惨事が起き、93人が死亡した。

1981年 粗大ごみ…定年後家でゴロゴロしていて妻の目障りになる夫、そんな言葉が生まれる

1981年 ローキード事件で小佐野被告実刑判決



← 春季合宿

新入生歓迎コンパ ↓



五月合宿 ↓



5/30  
幹部交代  
(藤崎ホテル)

6/19  
空手部との顔合せ

6/28～7/3  
早朝練習

7/12～13  
インカレ応援  
北九州

8/28～9/12  
夏季合宿  
強化練習  
武夫原

9/11～9/12  
第6回OB会  
藤崎ホテル

9/15 ボシタ祭ハイ

10/23～11/13  
対商大定期戦

11/1  
阿蘇遠歩(雨中止)

12/18  
立田山駅伝

12/25  
57年納会

1/5 新年行事

1/13  
第14回演武会  
(市民会館)

3/6  
追出しコンバ  
(16代:藤崎H)

3/28～3/31  
春季合宿  
宮崎

4/2～4/7  
強化練習  
武夫原

4/23 入団式

4/29  
新入生歓迎  
コンバ(草千里)

5/7～5/28  
第15回五大学総体  
応援

5/9～5/14  
五月合宿  
大江合宿所



インカレ応援(北九州) ↑

↓ 夏季合宿



↓ ボシタ祭り



← レガッタ大会

第6回OB会 ↓



## 17代

昭和57年～58年  
1982年～1983年

1982/2/9 日航機が羽田沖で着陸寸前に墜落。パイロットは心身症で社会問題化

1982/2/ ホテル・ニュージャパン火災事故起きる。火災報知器作動せず社長が逮捕される

1982年12月 テレホンカードが使用開始される



第14回演武会 ↓



第6回OB会 ↓



春季合宿in宮崎 ↓



← 強化練習in武夫原 ↓



新入生歓迎コンパ ↓



59年3月10日 追い出し練習&演武 ↓



← 五月合宿



- 5/28 幹部交代  
(藤崎ホテル)
- 7/2 空手部との顔合せ
- 7/12~7/14 インカレ応援  
福岡
- 9/4~9/6 夏季合宿  
球泉洞キャンプ場
- 9/7~9/10 強化練習  
武夫原
- 9/15 ボシタ祭バイト
- 10/22~11/12 対高大定期戦
- 11/1 20回阿蘇遠歩 |  
個人5,6,7,8位入賞
- 12/16 第15回演武会  
(市民会館)
- 12/24 58年納会
- 1/9 新年事業
- 1/20 成人コンバ
- 3/10 追い出しコンバ  
(17代:藤崎H)
- 4/1~4/7 春季合宿  
武夫原
- 4/21 入団式
- 4/29 新入生歓迎  
コンバ(草千里)
- 4/28~5/26 第16回五大学総体  
応援
- 5/14~5/19 五月合宿  
大江合宿所



インカレ応援(福岡) ↑



夏季合宿 一



球泉洞キャンプ場 ↓



## 18代

昭和58年~59年  
1983年~1984年

1983/9/1 大韓航空機撃墜事件 サハリン沖上空でソ連の戦闘機のミサイル攻撃を受けて墜落。乗員29人と日本人28人を含む乗客240人全員が死亡した。

1983/10/12 ロッキード事件の田中元首相に実刑判決

1983/4/15 千葉県浦安市に東京ディズニーランドが開園

第15回  
演武会  
↓



新入生歓迎コンパ  
↓



五月合宿  
↓

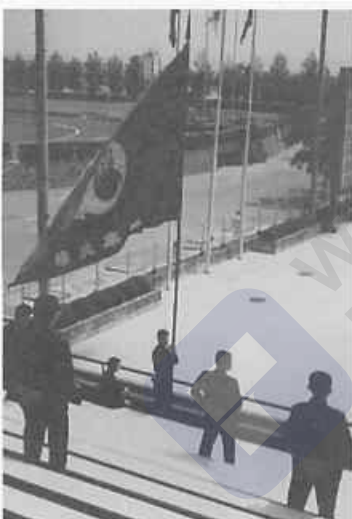
18代追い出し練習  
1985年(昭和60年)3月 →



- 6/2 幹部交代  
(上通り会館)
- 6/23 空手部交流
- 7/7 セタコンバ
- 7/13~15 インカレ応援  
(佐賀市)
- 8/27~31 夏季合宿  
強化練習
- 9/8~9 第7回OB会  
(20周年記念)  
藤崎ホテル
- 9/15 ボシタ祭り  
バイト
- 10月 対商大定期戦
- 11/1 第21回遠歩
- 12/13 第16回演武会  
(市民会館)
- 12/30 59年納会
- 1月上旬 新年行事  
峰楽饅頭など
- 1/15 祝成人コンバ
- 3月 追出しコンバ  
(18代)
- 3月 春季合宿  
強化練習
- 4/20 入団式
- 4/28 新入生歓迎  
コンバ(草千里)
- 5/13~18 5月合宿
- 5月 第17回  
五大学総体  
応援



↑ OB会に向けて夏合宿・強化練習

↑  
インカレ応援  
(佐賀)  
←

## 19代

昭和59年~60年  
1984年~1985年

1984/3/18 グリコ・森永事件発生

1984/7/28~8/12 ロサンゼルスオリンピック開幕  
東側諸国ボイコット、柔道で山下金メダル。カールルイス4個の金メダル4個獲得

1984/11/1 新札発行 1万円札(福沢諭吉)、5千円札(新渡戸稲造)、千円札(夏目漱石)





↑ 第16回演武会 ↓

← 第7回OB会(20周年記念) →



↓ 武夫原での春季合宿 ↓



↓ 新入生歓迎コンパ(阿蘇・草千里) ↓



← 新入生(22代)を ↓ 迎えての五月合宿

- 6/1 幹部交代  
(藤崎ホテル)
- 6/9 少林拳応援  
水泳応援
- 7/6 セタコンパ
- 7/11~13 インカレ応援  
(福岡)
- 8/29~31 夏季合宿  
(菊池溪谷)
- 9/2~8 強化練習  
(武夫原)
- 9/15 ボンタ祭り  
バイト
- 10/26~11/16 対商大定期戦
- 11/1 第22回遠歩
- 11/15 TKU杯野球
- 12/14 金守先生退官  
コンパ(体育会)
- 12/23 第17回演武会  
(市民会館)
- 12/30 60年納会
- 1月上旬 新年行事  
峰楽饅頭など
- 1/17 祝成人コンパ
- 2/22 金守先生退官  
祝賀会
- 3/8 追出しコンパ  
(19代)
- 3/31~4/5 春季合宿
- 4/19 入団式
- 4/26~5/24 五大学総体
- 4/27 新)歓迎コンパ  
(雨...)
- 5/12~17 五月合宿
- 5/31 三大学  
合同演武会  
(百道パレス)



水泳応援(熊大プール) ↓



インカレ応援(福岡) →



↓ 夏季合宿(菊池溪谷)



## 20代

昭和60年~61年  
1985年~1986年

1985/8/12 日航ジャンボ機、御巢鷹山に墜落

1985年 阪神タイガース27年ぶりに優勝、初の日本シリーズ優勝。パース三冠王。

1985年4月 日本たばこ産業(JT)、日本電信電話株式会社(NTT)創立。



↑ 夏季合宿(武夫原)



ボシタ祭りアルバイト ↑



金守先生退官祝賀会  
←



春季合宿 ↑



↑ 三大学応援団合同演武会(百道パレス)



追い出しコンパ(20代)  
62年3月 ↑



6/7  
幹部交代  
(緒方徳料理店)

6/8  
水泳応援

6/30  
インカレ結団式

7/12~14  
インカレ応援  
(宮崎)

8/30~9/3  
強化練習  
(武夫原)

9/5~7  
キャンプ  
(天草)

9/15  
ポシタ祭り  
バイト

10/22~11/15  
対高大定期戦

11/1  
第23回遠歩

11/9  
硬式野球応援

11/1  
第21回遠歩

12/18  
第18回演武会  
(市民会館)

12/30  
61年納会

1月上旬  
新年行事  
峰楽饅頭など

1/18  
祝成人コンパ

3月  
追出しコンパ  
(20代)

4月  
春季合宿

4/20  
入団式

4/25  
五大学総体

4/26  
新入生歓迎  
コンパ(雨...)

5/11~16  
5月合宿

5/24  
水泳新三大学  
戦応援



水泳応援 →



インカレ応援(宮崎) ↓



強化練習&キャンプ(天草)

↑↑



## 21代

昭和61年~62年  
1986年~1987年

1986/5/8 イギリスのチャールズ皇太子とダイアナ妃が来日。ダイアナ妃ブームに(5/13帰国)

1986年 「亭主、元気で留守がいい」 キンチョー防虫剤のCM大ヒット

1986/11/15 伊豆大島三原山大噴火 約1万人が1か月にわたって島外避難

マイク・タイソン(20歳)、プロボクシングで史上最年少のヘビー級王座に



← ポシタ祭り



第18回演武会 ↑



春季合宿 ←



↑ 水泳三大学戦応援 ←

昭和63年6月 追い出し(21代)

↓



- 5/30 幹部交代  
(藤崎ホテル)
- 6/7 水泳三大戦
- 6/29 インカレ結団式
- 7/11~13 インカレ応援  
(長崎)
- 8/28~9/1 強化練習  
(菊池溪谷)
- 9/12~13 第8回OB会
- 9/15 ポシタ祭り  
バイト
- 10/17~11/21 対商大定期戦
- 11/1 第24回遠歩
- 12/18 第19回演武会  
(市民会館)
- 12/30 62年納会
- 1月上旬 新年行事  
峰楽饅頭など
- 1/18 祝成人コンパ
- 3/12 追出しコンパ  
(21代)
- 3/29~4/3 春季合宿
- 4/30~5/27 五大学総体
- 4/29 新入生歓迎  
コンパ
- 5/9~14 5月合宿

第8回OB会 ↓



インカレ応援(長崎) ↑



ポシタ祭りー



↓ 遠歩



## 22代

昭和62年~63年  
1987年~1988年

1987/4/1 国鉄114年の歴史を閉じ分割民営化、JRグループ11法人に分割。

1987年3月 アサヒビールがスーパードライ発売開始、大ヒット！

1986/11/8 女子ゴルフ、岡本綾子が全米女子ゴルフ界で初の外国人賞金王に輝く。



第19回  
演武会 ↓

春季合宿  
←



新入生歓迎コンパ ↓

卒業式(22代) ↓



五月合宿 ↓

追い出し(22代)  
平成元年3月 ↓



5/29

幹部交代  
(結方徳料理店)

6/5

水泳三大戦

6/27

インカレ結団式

7/3~7/15

インカレ応援  
(熊本)野球・ハンドボール  
水泳・女子バレー

8/29~9/2

強化練習



水泳三大学戦応援 ↑

9/15

ボシタ祭り  
バイト

10/12~11/12

対商大定期戦

11/1

第25回遠歩

11/12

女子バレー

11/13

TKU野球応援



インカレ熊本開催、長期の応援続く… ↑

12/14

第20回演武会  
(市民会館)

1月上旬

新年行事  
峰楽饅頭など

1/18

祝成人コンパ

3/11

追出しコンパ  
(22代)

3/27~4/1

春季合宿

4/22~5/20

五大学総体

4/29

新入生歓迎  
コンパ

5/8~13

5月合宿



強化練習 ↑



ボシタ祭 ↓



## 23代

昭和63年~  
平成元年  
1988年~1989年

1988/3/13 青函トンネル開通。80年の歴史を持つ青函連絡船廃止。

1988/4/10 10年の歳月をかけて瀬戸大橋開通。宇高連絡船廃止。

1988年9月 昭和天皇陛下の病状悪化し、自肅ムード続く。

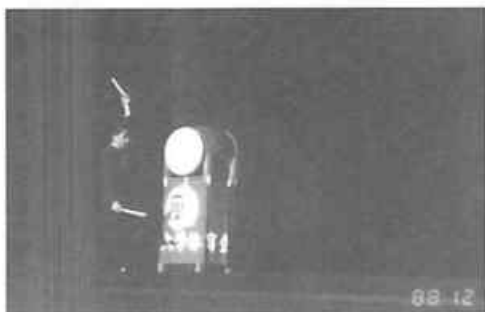




TKU杯野球応援 ↑



第20回演武会 →



新入生歓迎コンパ ↓



春季合宿 ↓



1989/3月 下田旅行 ↓



五月合宿 →



5/27 幹部交代  
(藤崎ホテル)  
5/28 水泳三大戦  
6/29 インカレ結団式  
7/8~10 インカレ応援  
(福岡)



8/18~24 強化練習

9/2~3 第9回OB会

9/15 ポシタ祭り  
バイト



← 水泳三大学戦応援

↓ インカレ応援(福岡)

10/21~29 対商大定期戦  
10/22野球応援  
10/28準硬式野球  
10/29男女バレー

11/1 第26回遠歩  
11/12 TKU杯応援



12/15 第21回演武会  
(市民会館)

1月上旬 新年行事  
峰楽饅頭など

1/18 祝成人コンパ

3/10 追出しコンパ  
(23代)

3/28~4/2 春季合宿



← ポシタ祭り

4/21~5/12 五大学総体

4/29 新入生歓迎  
コンパ

5/7~12 5月合宿

5/20 水泳三大戦

炎天下の強化合宿 ←



## 24代

平成元年~2年  
1989年~1990年

1989/4/1 消費税(3%)スタート。バブル経済で年末には東証株価3万8千円を付ける。

1989/6/24 戦後歌謡界の女王の美空ひばりさん死去。享年52歳。

1989年6月中国天安門事件、11月ベルリンの壁崩壊…激動の時代



第9回OB会 ↓



TKU杯野球  
応援 ↓



第21回演武会  
←



春季合宿  
↓



5月合宿 →



新入生歓迎コンパ ↓



5/26  
幹部交代  
(緒方徳料理店)  
6/3  
水泳三大戦  
6/28  
インカレ結団式  
7/7~9  
インカレ応援  
(鹿児島)  
7/8ハンド、バスケ  
応援



← インカレ応援(鹿児島)

8/26~31  
強化練習



炎天下の強化練習 ↓

9/15  
ボシタ祭り  
バイト



← ボシタ祭り

10/20~28  
対商大定期戦  
10/21野球応援  
10/27準硬式野球  
10/28男女バスケ

11/1  
第27回遠歩  
11/4  
TKU杯応援



↑ TKU杯応援 ↓

12/14  
第22回演武会  
(市民会館)

1月上旬  
新年行事  
峰楽饅頭など

1/19  
祝成人コンパ

3/9  
追出しコンパ  
(24代)

3/27~4/1  
春季合宿

4/20~5/  
五大学総体

4/28  
新入生歓迎  
コンパ

5/13~20  
5月合宿



← 第22回演武会 ↓

## 25代

平成2年~3年  
1990年~1991年

1990/1/13 共通一次試験に替わる大学入学センター試験に移行する。

1990年 ノーベル平和賞にソ連のゴルバチョフ大統領が選ばれる。

1990/4/1 大阪で「花の万博」開催される(~9/30まで)



第22回演武会



↑ 新年恒例の蜂楽饅頭10個食い



新入生歓迎コンパ↑



25代追い出し&卒業式  
1992年3月 ↓



5月合宿→



5/26

幹部交代  
(藤崎ホテル)

6/2

水泳三大戦

6/28

インカレ結団式

7/6~7

インカレ応援  
(北九州)7/7 準硬式野球  
応援

7/11~15

OB会に向けた  
強化練習①

8/22~26

OB会に向けた  
強化練習②

8/27~31

強化練習

9/2~5

OB会に向けた  
強化練習③

9/7~8

第10回OB会

9/15

ボシタ祭り

10/19~27

対商大定期戦

10/20 準硬式

10/26 ラクビー

10/27 TKU杯応援

11/1

第28回遠歩

12/21

第23回演武会  
(市民会館)

1/12

新年行事  
峰楽饅頭など

1/17

祝成人コンパ

3/7

追出しコンパ  
(25代)

3/27~4/1

春季合宿

4/18~5/16

第24回  
五大学総体

4/29

新入生歓迎  
コンパ

5/23

水泳  
商大定期戦

水泳三大学戦応援(熊大ブルー) ↑

インカレ北九州 ←

準硬式野球応援



第10回OB会 ↓



## 26代

平成3年~4年  
1991年~1992年

1991/5/23 雲仙・普賢岳で大規模火砕流発生、死者不明者38人となる

1991年 大相撲若貴ブームで盛り上がる。千代の富士引退。

1991年1月 湾岸戦争勃発。多国籍軍がイラク攻撃を開始した。



OB会に向けた強化練習



第23回演武会

春季合宿 ↓



五月合宿 ↓



新入生歓迎コンパ ↓



追い出しコンパ&卒業式 ↓



5/26  
幹部交代



5/31  
水泳四大戦

6/24  
インカレ結団式

7/4~6  
インカレ応援  
(福岡)

7/5ハンド・バスケット  
応援

7/6  
準硬式応援



8/26~31  
夏強化練習

9/15  
ポシタ祭り

10/17~27  
対商大定期戦

10/17男女バレー

10/25準硬式応援



— 夏強化合宿

インカレ応援(福岡) ↓



11/1  
第29回遠歩

11/29  
九州学生駅伝  
応援



ポシタ祭り ↓



阿蘇耐久遠歩 ↓

12/18  
第24回演武会  
(市民会館)

1/12  
新年行事  
峰楽饅頭など

1/23  
祝成人コンパ

3/6  
追出しコンパ  
(26代)

3/27~4/1  
春季合宿

4/18~5/16  
第24回  
五大学総体

4/29  
新入生歓迎  
コンパ

5/23  
水泳  
商大定期戦



準硬式野球の応援 ↓



## 27代

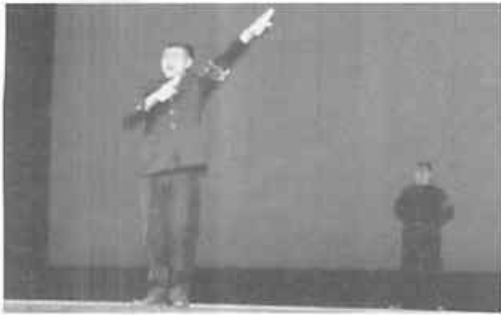
平成4年~5年  
1992年~1993年

1992/7/25~8/9 バルセロナオリンピック開幕。水泳200m平泳ぎ岩崎恭子金メダル獲得  
「今まで生きていた中で一番幸せです」流行語となる

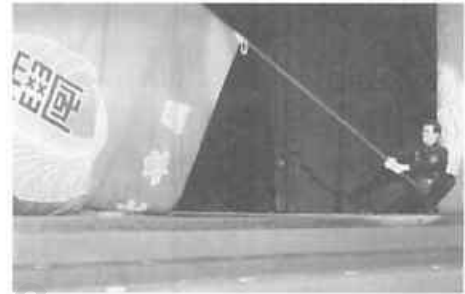
1992年 きんは百歳、ぎんも100歳」できんさんぎんさん人気者になる。

1992年 日本人初の宇宙飛行士毛利衛さん、スペースシャトルで8日間の宇宙飛行へ





第24回 演武会



新入生歓迎コンパ ↑



← 追い出しコンパ

水泳商大 定期戦応援 →



- 5/28  
幹部交代
- 5/30  
水泳四大戦
- 6/24  
インカレ結団式
- 7/10~11  
インカレ応援  
(佐賀)
- 7/10ハンド・陸上  
応援
- 7/11  
バスケ・水泳  
応援
- 8/26~31  
夏強化練習
- 9/11~12  
第11回OB会
- 9/15  
ボシタ祭り
- 10/17~23  
対商大定期戦
- 10/17男女バスケ
- 10/24準硬式応援  
野球応援
- 11/1  
第30回遠歩
- 11/23  
九州学生駅伝  
応援
- 1/12  
新年行事  
峰楽饅頭など
- 1/21  
祝成人コンパ
- 3/6  
追出しコンパ  
(27代)
- 3/27~4/1  
春季合宿
- 4/18~5/16  
第24回  
五大学総体
- 4/29  
新入生歓迎  
コンパ  
水泳  
商大定期戦



第11回OB会 ↓

新入生歓迎コンパ →



## 28代

平成5年~6年  
1993年~1994年

1993/7/12 北海道南西沖地震で奥尻島などで被害。死者行方不明者は239人。

1993/8/9 8党派連立の細川政権誕生。自民党の一党支配が崩れる。

1993年1月 曙が初の外国人横綱、貴花田(1月)、若花田(7月)が史上初の兄弟大関。



商大定期戦水泳応援 ↓



春季合宿 ↑



追い出し練習  
&コンパ(28代)



1994年(平成6年)5月 幹部交代(28代→29代)



1994/7月 インカレ応援 ↑



← 阿蘇遠歩(1994年/11月)

その後、休部状態となる。  
我々が汗を流した思い出  
の地、立田山の階段も  
年月を重ねていく。



2002年 体育会本部役員の前原氏が兼務の第31代団長になる

2003年から2005年の活動は、初代チアリーダー川林さん、32代梅木団長の  
50周年記念誌寄稿文から振り返ってみます

2003年(平成15年)4月 梅木久義君、川林菜穂子さんが熊本大学に入学

(梅木)熊大に入って何かを残したい…。偶然、体育会本部の「新入生向けのサークル紹介」冊子が目に留まりました。応援団のページは活動の写真や記事もなく、ただ『「部員募集中」だけが記載されていました。「ようし、応援団をやってみるか!」と思い、そのまま体育館本部に出向き「応援団をやりたいです」と申し出しをしたら、体育館本部にいた体育会役員の方が非常に興奮されたのを覚えています。

(川林)高校の時からあこがれていたチアリーディングを大学に入ってからやりたい……。その気持ちを実現するため社会人チームに入りましたが、熊大生は私一人だったので、熊大生の友人に声をかけて私を含めて4人の仲間ができました。次は「熊本大学にもチームをつくりたいね」という気持ちになり、体育会本部に同好会か部活動ができないか相談に行くと、体育会役員の方から応援団が復活すること、チアリーディングとして活動しないかとの話をいただきました。

当時、熊大応援団は1996年(平成8年)頃から団員がおらず休部状況になっていた。しかし、歴代体育会役員は、活動の実態が無くても応援団だけは残すべきだと、その後も部室等はいつでも使える状態で残してくれていた。その中心が体育会役員兼務の第31代応援団長の前原君だった。梅木君は早速活動を始めた。

(梅木)まず応援団部室の隣がワンダーフォーゲル部に協力をお願いしました。ワンゲル部も一回生だけの部員だけで存続の危機状況だったのですが、応援団活動が軌道に乗るまでの期間限定でありましたが、共に練習をして相談にも乗ってくれたのが佐藤君でした。そして同じ学部学科の黒木君、作本君も協力してくれて最後までついてきてくれました。そして、他大学の応援団を調べるとチアリーダーとともに活動している応援団もあり、チアリーダーの募集も一緒にしました。その時に出会ったのが、チア初代で同期の川林さんでした。

(川林)応援団の部室に入ると、団旗や太鼓、そしてたくさんの写真が残されていました。当時の思い出を語るOB、先輩からは、今でも変わらない応援団への熱い思いが伝わってきました。長い歴史のある応援団で活動していくのだと身が引き締まる思いでしたが、同時に、先輩方に見守っていただけることを心強く感じました。

29代~32代

平成6年~17年  
1994年~2005年

その後  
基礎づくり

応援団は出来たが、練習方法や演武などは全く分からない状況から一步一步基礎固めに歩き出した。

(梅木) 応援団としての活動について右も左も分からない中、河村会長を始め先輩方に相談したところ仕事が休みの休日に武夫原に来て頂き指導頂くこととなりました。県外から練習に参加して下さっていた先輩もおられました。そして、応援団復活後初めてのOB総会では応援団のジャージを作りたいことと団旗がボロボロだったので団旗もほしいとお願いをする私の我儘を聞き入れて頂いたのを覚えています。

1年経ち、後輩獲得に向け勧誘活動を行っていたところ、安倍君が直接部室に訪ねてきたのが安倍君との出会いとなりました。彼の入団でようやく応援団としての活動が本格化していくこととなりま

(川林) 1年後には、私たちにも後輩ができました。「入部を考えている」という電話を受けた時はうれしくてたまず、今でもそのやり取りを思い出せます。前原さん達にも参加していただいた合宿では、応援団部とチアリーダー部と一緒に練習をしました。その演技は、熊粋祭(現在の紫熊祭)のステージでお披露目することができました。チアリーディングの演技は、社会人チームの仲間にお手伝いをお願いし、一緒に演技をしました。

## OBとの合同練習(武夫原)



梅木、黒木、作本、安倍君等が練習に参加



2005年(平成17年)11月5日 2005熊大応援団OB会にて

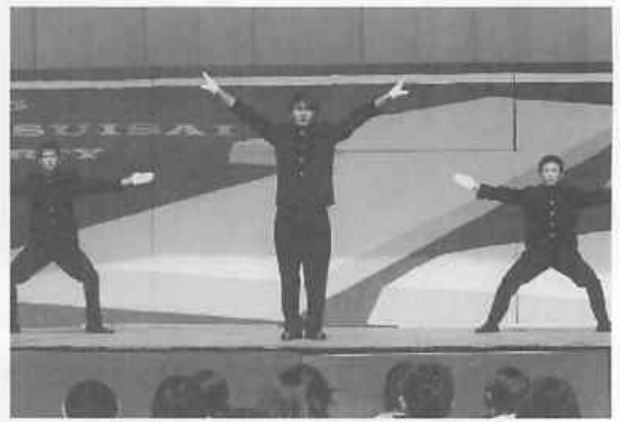
32代梅木団長のリーダーでの  
演武



創成期のチアリーディング部



2005年(平成17年)11月5日 2005熊大応援団OB会にて



同年同日学館前にて



32代～35代

平成17年～20年  
2005年～2008年

復活のリーダー部、  
チアリーダー部を  
振り返って

(梅木) 以上が、応援団復活までの経緯となりますが、私自身苦労や苦悩を感じたことはなく、河村会長を始めとするOBの先輩方が活動を支援していただき、私に繋いで頂いた前原さんを初めとする体育会本部役員の先輩方、支えてくれた同級生達とチアリーディング部を作った同級生達、入団しその後の応援団を作り上げていった安倍君を始めとする後輩の皆さんの情熱があったからこそ今の応援団があると思っております。

(川林) 私たちが幹部交代をして引退した後、チアリーダー部は協会に登録し、競技チームとして活動を続けていくことを決めました。その後、ちひろさんコーチ、かんちゃんコーチなどの指導者にも恵まれ、少しずつBLAZESを作り上げてくれました。何よりも、チアリーダー部の現在の活躍があるのは、先輩方が応援団に迎え入れて下さり、応援団として活動をスタートできたからこそだと感謝しています。

33代

2006熊大応援団OB会(11月4日) ↓

33代安倍リーダー一部長による演武



35代

2008熊大応援団OB会(11月2日) ↓



日野団長以下の  
リーダー部団員

平成16年(2004)-31代(梅木)  
5/16OBとの合同練習  
ボート部応援(江津湖)  
10/31熊粋祭ステージ

平成17年(2005)  
3/20-21春合宿(阿蘇)  
4/7応援団HP開設  
8/7全国七大学応援団  
合同演武会見学  
9/10-11夏合宿(天草)  
10/30熊粋祭ステージ  
11/13幹部交代  
32⇒33代

平成18年(2006)  
4/9アイスホッケー応援  
6/10新入生歓迎会  
6/25チアリーダー部  
お披露目会  
7/13第13回九州チア  
リーディング選手権大会

9/5-7夏合宿(天草)  
9/24九州応援推進  
ネットワーク設立  
10月対高大定期戦応援  
10/29下関市立大学  
馬関祭見学  
11/1遠歩出場  
11/2福岡大学七隈祭  
出場

11/3硬式野球応援  
熊大ホームカミングデー  
11/4熊粋祭  
学園大託麻祭出場  
11/18西南大学祭出場  
12/1幹部交代  
33⇒34代  
12/2島原・雲仙学生  
駅伝応援  
12/9Little Xmas 2006 in  
Zeep Fukuoka出場  
12/16忘年会

平成19年(2007)  
1/8福岡市成人式出演  
3/5-7九州応援ネットワーク  
リーダー合同合宿(阿蘇)

3/8合格発表で演武披露  
3/12卒業生追い出し会  
3/19-20春合宿(阿蘇)  
4/21総体開会式(学園大)  
5/3博多ドンタク出演  
6/17新入団員歓迎会  
6月アメフト部応援  
6/29RKBテレビ  
「九州青春銀行」出演

7/1九州チアリーディング  
選手権大会出場  
10月対学園大応援  
アメフト部応援

特別バージョン

32-36代

平成16年～20年  
2004年～2008年



平成16年5月 OBとの練習



平成16年10月熊粋祭



平成17年4月 新入生を迎えて



平成18年 託麻祭にも出演



平成18年4月 新入生を迎えて

リーダー部長から  
32-36代の年表と写真の  
提供があり、  
特別バージョンで  
50周年誌に加えた。



平成18年6月 BLAZESお披露目



- 11/3熊粋祭  
学園大託麻祭出場
- 11/17西南大大学祭出場
- 12/1島原・雲仙学生  
駅伝応援
- 12/14幹部交代  
34⇒35代
- 12/21忘年会

## 平成20年(2008)

- 3/8合格発表で演武披露
- 5/18新入生歓迎会
- 6/29第15回九州チア  
リーディング選手権大会

- 10月対学園大応援  
アメフト部応援

- 11/1遠歩出場  
学園大託麻祭出場
- 11/2熊粋祭  
熊大ホームcomingデー  
応援団OB会総会
- 11/14西南大大学祭出場
- 11/28九州応援ネットワーク  
合同演武会(九州大学)

- 12/5島原・雲仙学生  
駅伝応援
- 12/16幹部交代  
35⇒36代



平成18年7月 九州チアリーディング選手権大会



平成19年4月 新入生歓迎ステージ



平成19年11月熊粋祭

平成19年3月 新生応援団の第一期  
卒業

平成19年5月 博多どんたく出演



平成19年3月 九州応援推進ネットワーク合同合宿



平成20年4月 合格発表 祝エール



平成19年12月 幹部交代

36代

2009年(平成21年)11月28日 九州応援推進ネットワーク演武会(九州大学にて)



36代  
森団長の演武



2010年(平成22年)10月31日 熊本大学 熊粋祭

37代



36代~38代

平成21年~23年  
2009年~2011年

37代塚団長のよる演武



37代塚団長のよる演武



37代

2010年(平成22年)11月6日 2010熊大応援団OB会



38代山根団長のよる演武



38代



2011年(平成23年)11月5日 2011熊大応援団OB会

2012.(平成24年)11月3日 2012熊大応援団OB会



↓ 32代の川林(徳永)、黒木、梅木君…復活に貢献



39代

39代河口団長のエール  
(38代山根君と同期)



40代

2013年(平成25年)11月2日 2013熊大応援団OB会(和田名誉会長追悼式)



40代チアの部  
甲斐キャプテンと  
西本団長の近況  
報告



39代～42代

平成24年～27年  
2012年～2015年



2013(平成25年)11月2日 2013熊大応援団OB会(和田名誉会長追悼式)

2014年(平成26年)11月6日 2014熊大応援団OB会

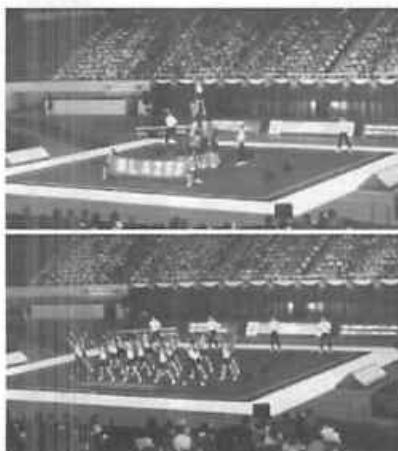


## 41代

40-41代の西本団長と  
チアリーダー部平尾キャプテン  
活動報告と助成金へのお礼



2015年(平成27年)12月12日



全日本学生チアリーディング選手権大  
会「Blazes」健闘！

2015.12.12に標記大会が、東京・代々  
木体育館で開催されました。国公立大  
学でここまで勝ち上がるチームは少な  
いそうです。チームワークのたまもの  
ですね。



2015年(平成27年)10月31日 2015熊大応援団

- ・熊大応援団創立50周年記念事業に向けての協議を行う。
- ・会議に先立ち、応援団演武歌の生収録を行う。



40-42代の西本団長と42代キャプテン永島さん  
祝賀会でのお礼の挨拶



42代

平成27年  
2015年



The 50th anniversary memory magazine



今度、会うのは平成28年5月7日の応援団創立50周年記念のOB会…。また会いましょう！



## 今も伝わる応援団の熱き想い (暦年のウルタンより)

### 編集後記から(OB会誌の生い立ち)

(昭和44年発行：剛毅第1号)

古賀3代目団長の時代からの懸案だったOB会誌が5か月くらいで、やっと出来上がり非常にうれしい。当初は、表題を“うるたん”にしようという意見が多かったが、しまらないので“剛毅”にした。“うるたん”がどんな意味か…みんなご存知です。次に応援団結成にご尽力くださった空手道部諸先輩の件ですが、今回はよく話し合うことができず、住所録には記してごさいません。プロフィールは桃坂総務長が、自分自身を除いて記したものです。プロフィールに“小生”とあったら、総務長を思い浮かべてください。そうすれば、一層おかしくなると思います。

総務長のは、誰が書いたって？ このきれいな字を書いた吉田会計長です。挿し絵を入れるのに苦労したなあ！どんな絵を描こうかというんな本をめくっているうちに夜が明けることもあった。しかし、今ではOB会誌を作り上げた満足感でいっぱい。最後にちっちゃな声で“森尾さん”、大きな声で“ご苦労さん”  
(第1号の表紙)



### 熊大応援団の誕生(歩み)

(剛毅第1号)

熊大に一人の男がいた。彼は熊商大に応援団があるのを知り、熊大にもと思った。昭和41年(1966年)の対商大定期戦でのエール交換に何も知らず一人で乗り込んで行き一人でエールを切った。考えてみたまえ！太鼓も旗も、一人のバックもなしに俺は熊大応援団だと奇声を発した男の姿を…。もしもあなたがその場に居合わせたなら多分噴出したであろう。

その通り、商大生ばかりでなく熊大生もが笑ったのである。何で熊大生が笑わねばならいいのか？その時に彼は羞恥心もなく、むしろ憤怒心でいっぱいだった。この怒りは男の意地となり、熊大応援団結成の礎となったのである。



(昭和43年11月 対商大定期戦)

それからというもの、団員を集めて見るに忍びないほどの厳しい練習が始まったのである。この練習がいかなるものであったか、“精神の肉体に及ぼす力からより、肉体の精神に及ぼす力の方がより偉大である”と彼に言わせた事から察しがつくであろう。それから一年半、熊大応援団は、博多の九電体育館で行われた応援団乱



舞合戦で脚光を浴び名実ともに認められただけでなく、他大学応援団に引け目をとらないほどに成長していることを実証したのである。一年半でこれまでにになったのは、前に述べた男の意地、和田英樹の意地の強さを物語っている。

その後、田川二代目団長、古賀三代目団長時代にさらに強固な地盤固めをやり、好かれる応援団を目指したが為に、熊本でのインカレで団長会議、市中パレードの主管を大成功裏にやり遂げられたのである。

現在、団員 24 名。一致団結して頑張っている。もう押すに押されもしない団体に成長をしている。今後も我々は、団結をモットーに、より高い段階へと成長していかねばならぬ。  
(昭和 43 年 11 月 23 日第 12 回商大定期戦の開会式)

## “剛毅”を通してつながる我が応援団

(剛毅第 1 号)

(第 4 代 佐村輝男)

ここにちゃちであるが、諸先輩方が愛しに愛しぬいた応援団の現状をお伝えすべく OB 会誌“剛毅”1 号が完成し喜びに堪えません。常日頃から連絡だけは密接にしているものの団員が団というものをつかぬ風にかんがえ行動し、悩み苦しんで目的を見出して行くか、また見出して来たか…というところまで知らせる手段がなかった。

団員は少なくとも、一度は計り知れない大きな壁にぶちあたるのである。それは「目的」という漠然とした壁である。応援団の目的とはいったい何なのか？人間誰しも目先の目的に対しては、希望を持って突進していくものであるが、目的が掴めずわからずに毎日が空を掴むような日々、それに厳しい練習がプラスされる団生活はどうだろうか。馬鹿でない限り絶望して投げ出すだろう。しかし、このような生活の中から悩み苦しんで目的を見出すところに意義があるのではなかろうか。また、それは誰もが羨むところではなかろうか。諸先輩方も多分、

かくなる悩みをお持ちになったことでしょう。その悩み、苦しみがあるからこそ、応援団の歴史が続く限り、80 歳になったお爺さん OB も、20 歳の青年も心をつなげて話し合え、信頼し合えるのである。



(昭和 44 年 7 月 九州インカレ-下通りパレード)

人間関係というものは、時が経つにつれて疎遠になるものである。でも我が団だけは違う。疎遠になるならば、なぜ大学時代に、何のために団一筋に賭けて来たのか…という疑問と焦燥感にかられるであろう。毎年一度しか発行されない“剛毅”によって戦友ならぬ団友を思いだし、戦場ならぬ武夫原に思いをはせ懐かしみ目頭を熱くし、機械化された社会の中で生きている諸先輩方の心にぬくもりを与えてほしい。

## 犬童一昭、よか男

(剛毅第 1 号)

犬童一昭 よか男  
全然もてないけど よか男  
雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ  
雪ニモ夏の暑さニモ負ケヌ  
丈夫ナ身体ヲモツ ヨカ男。  
女も馬鹿ね！



(昭和44年7月 九州インカレ-水前寺競技場)

※旗手は当時2回生の故犬童氏

(横顔-桃坂氏談)

応援団一の酒豪である。イモ焼酎で鍛えに鍛えた胃袋を持っているので、彼と酒を飲む時なんか、金がかかってしょうがない。また彼は自分の科(土木工学科)にふさわしい顔としており、力も大変強く、応援団では第2代旗手長として、いつも校旗を守って重要な任務を果たしてきた。今後が楽しいである。

### 「オッス」で全てが事足りる応援団(一回生)

(剛毅第1号)



(昭和45年4月 新入生歓迎コンパ:阿蘇草千里)

まったくの偶然で応援団に関係してしまった。今ではこれも運命とあきらめている。応援団は便利である。「オッス」の一言で全てが事

足りる。まさに単細胞である。バカになった男と男のぶつかり合う応援団では、現代の人間疎外など無関係である。これが応援団に入って一番良かったと思っていることである。これから人間的な逞しい男になろうと思っています。

### 楽しいから、面白いからやっているのではない…団生活(二回生)

(剛毅第1号)

思ったことを素直に述べよう。俺は何でこんな馬鹿みたいなことをやっているのか？ 自分で頭がおかしい時がある。いつも自己に挑み「自分に甘えるな」と言い聞かせ、下宿に帰ってホッとすることではないか。

そして、次の日も又“しごかれる”と思えば嫌になる。しかし練習がないと何か一本抜けた感じがする。考えてみると、楽しいから、おもしろいからやっているのではないようだ。感激、それも俺だけの感激のためかも知れぬが、それも年に一度か二度しかなかった。俺はその時、応援団を恋人のように感じた。あの時の感激を忘れたくない限り、バカ者と言われても俺はやるぜ！



(昭和46年4月 火の国まつりにて)

## 学館ロビーでの出会い、運悪く?(一回生)

(剛毅第1号)

執拗なまでの部員勧誘。応援団にはそれほど興味を抱いていなかったし、約2か月間よく継続できたものである。あの日、学館ロビーで運悪く(?)とっ捕まったことは、僕の大学生活において極めて重要な意味を含んでいたかもしれない。とにかく、諸先輩についていくのみである。そして大いに悩み、苦しみ、熊本大学応援団の本質を学びたい。



(昭和45年4月 学館前の応援団勧誘ブース)

## 豪放磊落な男、アッハッハの声が今も聞こえる(犬童氏への追悼文-副島氏)

(剛毅第11号)

今年のウルタンには書きたいことがあった。それは犬童の事だ。初めて会った日のことを思い出す。青い校旗が出来上がり、誰が持つかということになって、顔のいかつい、体力のある者から必然的に試すことにした。最初は2代目の者…少しの時間でダウン。何人かやって最後にずっと持てた唯一人の男が犬童だった。新品の青い校旗が空に上がって行き翻っているのを皆が見ている時、私は犬童の顔を見た。旗手に決まった。

私は犬童の下宿によく遊びに行った。物置みたいなのが階下にあって、それより少しましな二階にあった。それが犬童の部屋だった。昼食や夕食も一緒に近くの食堂で食べた。



(昭和46年2月 第2回応援団演武会)

二人の食事の時に飲んでいたのが、ピタシーというドリンクだった。階下の物置に山のように積んであった。当時は発がん作用があるということで問題になったチクロが含有していたということで売れ残っていたドリンクだ。

外見と中身が豪放磊落で統一された世間では見られぬ大きな男であった。「ソエジマさん、アッハッハ」という声が今でも聞こえる。チビた下駄、どら声(音痴)、もみあげ、坊主頭、酒、アッハッハ、ピタシー……

さよなら犬童!

死がこんなに近いとは、君ゆえに、君ゆえに感じる。



(昭和45年4月 新入生歓迎コンパ-阿蘇草千里)

## ウルタン 2 号編集後記

(昭和 45 年発行：剛毅第 2 号)

堂々完成 OB 会誌 2 号誕生！！

去年が初版だった OB 会誌を今年もようやく発行することができた。本当に良かった。40 頁足らずの小冊子ですが、この中には、短い文章ではありますが、団員一人ひとりの気迫、若さが溢れ、OB の人たちにも多少の疑問点はあれ、一応満足してもらえらるものと思っています。

最初の予定では、今年は応援団結成 5 周年にもあたり、去年よりも格調高く行こうと思ひ、全頁凸版印刷するはずだったのですが、何しろ予算不足の我がサークル故、そうする訳にもいかず、それではと考えたのが、これ（表紙のみ印刷）です。最後に編集にあたった下記の方々、どうもご苦労様でした。



### 【初の表紙デザイン】

表紙デザイン：茅畑リーダー長

編集：野村副団長、石丸総務長、白川直子

複写：守尾さん（ありがとうございました）

## 一層の羽ばたきを 維持は後退である

(剛毅第 2 号)

(団長挨拶)

初代、二代の先代の努力で応援団の基礎はなされましたが、しかし、まだ熊大応援団は若い。我々は一層羽ばたかなければなりません。

応援団の根本的理念は変わらなくても、その代々によって性格は異なってくる。団をただ維持するだけならば維持しているつもりでも、それは後退でしかない。我々は、普段の反省と努力、このありふれた言葉でのみ成長をさせることができる。それは容易そうに見えて容易でない。



(昭和 45 年 7 月 インカレ応援-平和台)

また、我が団員に望むことは各々が団そのものに埋没するあまり、自分を見失う危険性、あるいは偏った考え、生き方に走らないように注意して欲しいことである。更に広く眼を団以外に向け、その立場での自分、あるいは団と結びついた自分を考え行動し、幅のある人間に成長してもらいたいと思う。



(昭和 45 年 7 月 インカレ応援-福岡)

## 一回生のそれぞれの思い…8代

(昭和46年発行：剛毅第3号)

## (A 一回生談)

入団した時「応援団に入った感想を言え」と言われた。「いつ逃げ出そうかと考えています」と答えたのを覚えている。ところが、現在まだ逃げ切れずに毎日、苦しい練習を続けている。練習について行くのが精一杯で逃げ出す理由を考える余裕が今はない。今はただ何も考えず一生懸命に取り組み早く2回生に追いつけるようになりたい。

## (B 一回生談)

早いもので入団してもう3か月になる。練習がきつくて何度もやめようと思ったが結局辞められなかった。あと3年間、みんなと一緒にガンバろう！！

格言「応援団に入ることは馬鹿になることに他ならない」であるが、馬鹿になりきれなくて悩んでいる男である。

## (C 一回生談)

入団当初は、毎日の練習の苦しさばかり心に浮かんで来て、何でこんな苦しさを感じなければいけないのかをいつも考え続けてきた。応援団というカッコ良さに魅かれて入団したものの、カッコ良さなんか少しもなく、汗を流し泥にまみれての練習ばかりの毎日であった。

しかし、挫折しようとする「それは自分への甘えだ！」と諭し応援団を続けるように勧めてくれた先輩に、今は感謝しなければならない。

今は、自分に甘えることなく強くならなければならない。まだまだ、これまでと同じような苦しい道が続くであろうが、この苦しさを乗り越えた先輩たちがいるのは心強いし、自分もやり抜こうと決意を新たにしている。

## (D 一回生談)

応援団に入団して数か月がたった。苦悩の連続であった。何度も何度も応援団をやめようと思った。今もそう思っている。しかし応援団には、それを実行させてくれない何かがある。目に見えない漠然とした何かがある。引力に似た何

かが応援団という「オリ」の中から逃げ出させてくれない。私はそれが何かわからない。しかし私は今までその「オリ」の中で自分なりに一生懸命やってきたつもりだ。そしてこれからも一生懸命やるつもりだ。

フレイフレー クーマーダーイー 押忍

## (E 一回生談)

勧められるままに入った応援団だが、そのころはどんな練習をやるのかもよく知らず軽率だったような、またそれで良かったような…どっちともつかない気持ちがしている。練習がキツイ時は逃げ出した気がするが、練習のあとのコップ一杯のコーラーがうまい。



(昭和46年7月のインカレ応援(大分))

## (F 一回生談)

入団して体重も落ちたし体力にも少し自信ができました。途中何度もくじけて辞めようと思いましたが、結局今日まで続けてきてよかったですと思います。他の派手なクラブみたいにはっきりとした目標がない応援団ですが、応援団を辞めれば自分に負けたことになるので、力の限り頑張りたいと思います。

## (G 一回生談)

応援団に入って良かったか悪かったかまだよくわからないけど、最初のうちのように今は辞めようとは思わない。練習はきついしリーダー長の顔が嫌になる時もあるけど、何とか勉強と両立をさせたい。

(平成一回生談)

まだ、応援団についてあれこれ言う資格はないだろうが、ちょっと酒を飲みすぎるのではないかな。親が知ったら応援団どころの騒ぎじゃない。練習はキツイが、練習が終われば一切応援団のことは考えないことにしている。これからずっと続けていく自信はない。

(I一回生談)

応援団では、一人ひとりの動作がいかに大切かということ学んだ。人より動作が遅いと言われるが、そのうちよくなるんじゃないかと思っている。今一番楽しいことは、先輩や同級生と一緒に酒やビールを飲んで話すことだ。練習はきついけど気が長いよって思っている。

(Jマネージャー)

応援団についてフラフラと入ったものの自分の安易さに反省させられた。団員の皆さんが厳しい練習を終えて部室に戻ってくるのを見るにつけ、私だけ元気でいいのか…少し気が引ける気持ちがしていた。マネージャーの仕事は、外の人にはなかなか理解してもらえずつまらないと思っている人もいるが、私は私なりに、団員の皆さんが練習に励むと同様に自分に充てられた仕事を一生懸命、ただ一生懸命やろうと思っています。

## 怪我や苦しいから辞めたい…でも辞めたら全てを失う(二回生)…7代

(剛毅第3号)

(A二回生)

2年生の夏を迎えた。苦しいこともみんな楽しい思い出として残り、今も僕はこの応援団とともに暮らしている。練習がきつくて嫌だといながら黙々と練習に励むことがどんなに幸せなことだったのか！僕は身をもって知った。

故障して練習ができない、きついから嫌だと言って応援団から逃げることは、応援団生活の中で感じ得られるすべてを捨てることになる。応援団で感じる貴重なものは、練習よりももっ

とをもって大切なもの、練習よりももっともっと苦しいものであるかもしれない。これからは”忍”と”和”のもとで、僕は一団員としてこの応援団をしっかりと支えていきたい。

(B二回生)

応援団に慣れてしまっただけではいけない。常に新しいものを求め続けなければいけないと思います。練習も受け身ではなく自分から進んで能動的に取り組めば、必然的に自分の体を感じてくるようになります。また応援団は謙虚でなければなりません。他のクラブとのギャップが生じたら応援も有名無実化してしまいます。他クラブと信頼関係を結べたら何と素晴らしいことでしょう。

他のクラブとともに語り、彼らの苦しさを我々の体で感じ、他のクラブを理解しなければならぬと思います。厳しい練習、謙虚さ、そして押忍がなければ、応援であれ壮行会であれ、彼らの心に訴えるものはないような気がします。そして、応援団を通して自分の骨身を削るような辛苦、心の底から流せる純粋な涙、自分のけがれを洗い流すような発汗のある青春を送りたいと思っています。



(昭和49年2月の7代追出しコンパ)

(C二回生)

応援団を離れて生活することはできなかった。逃げて逃げて俺に襲い掛かってくる。唯一逃げる事が出来ると思っていた眠りの中でさえ、時として夢に現れる。「応援団、貴様は俺にとって何なんだ？」

常に俺の自由を取奪する奴、酒の美味しさを

教えてくれた奴、苦しいあとの喜びを教えてくれた奴、俺の肝を大きくし俺をとうとう「馬鹿」にした奴…。

俺は応援団だけで、この大学生活を終わりたいくないが応援団を除いて終わることもできない気がする。

(D 二回生)

押忍があり酒があり女があり、我が青春に悔いは無し。勉強もするよ。

(E 二回生)

応援団は僕にとって一つの“壁”、ただぶつかるとのみ！！

(F 二回生)

応援団の存在すらはっきりしていない何かを求めて、日々練習、団行動をしていきたい。

## 押忍の世界 応援団の世界(幹部)…6 代目

(剛毅第3号)



(昭和45年7月のインカレ福岡から)

(A 幹部)

午後5時から厳しい練習…「押忍」の会釈により始まった。その練習は個人の血となり肉となり肉体的な自信になっていく。さらに精神的により高い次元に導いてくれる。そして「押忍」で練習は終わる。この応援団の「押忍」は始まりと終わりの挨拶だけでなく、僕とあなたとの心の懸け橋となり更に広がっていく。 押忍

(B 幹部)

他人に対して不平、不満を抱いていても応援

団の練習で精一杯体を使うと、自分の弱さや心の狭さに気づいて不思議と不平不満がなくなり、スカッとした気分になるものだ。この寛容と感謝の精神が20数名のいろんな人間が一つとなり、長年にわたって応援団を発展させてきた一因ではないかと思う。

(C 幹部)

朋あり、遠方より来たる。また楽しからずや

(D 幹部)

これほど 俺を鍛えてくれるものは他にない  
これほど 自分自身を見つめさせてくれたものは他にない

これほど人を見させてくれたものは他にない  
今これほど熱中しているものは他にない  
ありがとう“熊本大学応援団”

(E 幹部)

自分に厳しく他の笑みを

厳しく苛酷な練習に全力を尽くし

己を鍛錬する

碁を打ち将棋を指すが如く思慮深く

一挙手一投足は大胆に

(F 幹部)

入学前には考えられないことばかり体験した。応援団に入団したことは運命だったかもしれないが、最良の道かどうかはわからない。でもこれだけは言える。

厳しい、しかも肌を突き合わせての限界を極めるごとくの練習を通して真の友情が芽生えたようだ。そして応援団を通して大いなる『馬鹿』にも出会えた。この生き様としての『馬鹿』とは、大筋のところを捉まえて動かない人物のここのようだ。大学4年間ぐらいは、小利口ものにならずに『馬鹿』で通そう。

## 一回生の通る道、悩む道(9代)

(昭和47年発行：剛毅第4号)

(A 一回生)

ごく平凡な男が、3か月前になんとなく応援団に勧誘され入団した。毎日、歯をくいしばって苦しい練習に耐え、勧められるまま酒を飲み、ともに大いに語る。そして、時々悩み考えるが何もわかっていない。ただ、ひとつ言えることは「現在、自分は熊本大学応援団一回生であるということ。やめてはすべてがおしまいだ。



(昭和47年11月 対高大定期戦-下通り)

(B 一回生)

運命の4月13日、それは私の大学生活の方向を変えさせた日である。神のいたずらか、不意に学内ではあまり見かけない学生服の人に呼び止められた。サークルの勧誘だという事はわかっていたが、開けば応援団という。

「こいつあ、まずいのに捕まった」私の頭の中は、早く切り抜けてしまおうという事で一杯だった。ただ敵もさるもの、終始笑顔を決やさず巧みに引きずり込んでくる。延々30分、遂に私の心は、ひとつ入ってみようかと思うようになった。そして、約15分後に落城、応援団受付まで足を運ぶ羽目になった。

高校時代は合唱部に在籍していた我輩にとっては、まことに大転換である。翌週からは、今まで経験した最もキツイ練習が始まったのだ。ランニング、腕立て伏せ、腹筋、階段、うさぎ飛び、お手振り振り…。どれをとってみても、言語を絶するほどキツかった。それから、

酒を飲まされた時の苦しさ、小生元来、胃が弱くすぐに腹をやられてしまう。せっかく練習で強くなった腹が再び情けない状態になってしまう。全く嫌になる。

考えてみると入部当時は、何も考えずによく体もついていけたものだ。でもまだ体もキツイ。早く強くなりたい。それにこの三か月の間、両親とのトラブルが耐えない。何かにつけて、「やめろ、やめろ」と言う。勉強に専念してもらいたいのだ。こっちは必死の弁明をするが、なかなか理解してもらえない。

…大学生活は既に始まりたるも今では応援団で一日暮れていく。貴重な大学時代、もっと視野を広め、大いに人生勉強その他をやりたい!

(C 一回生)

入団してはや3か月、毎日懸命にやってきたつもりだが惰性に陥ることもあったのではないだろうか。ここで今一度奮起し、現リーダー長が言われることだが、自分に楽をさせようとせず、自分を苦しめて、その苦しみに倒されぬように努力するぞ!

(D 一回生)

月日というのは遅いようであって早いもの。入団して3か月になります。毎日の練習がきつくて逃げ出したいと思うことがありますが、練習についていく事が瀬一杯でそんなことは、いつのまにか忘れてしまいます。今後も自己に甘え、安易に妥協することなく一日一日を少しでも進歩したいと思っています。





## 暑くても心は爽やか インカレ鹿児島

(昭和48年発行：剛毅第5号)

インカレは、いつも何か新鮮なものを感じさせてくれる。今年のインカレは、晴れわたった青空に噴煙を噴き上げる桜島を望む鹿児島で行われた。我々の行った応援は、バレーボール、水泳などの限られたものであったけれども、また新しい経験をしたと感じられずにはいられない。初めてのリーダーとして選手を応援した時の感動、勝った時の喜び、負けた時のくやしさが、また違った立場から見られたことは何かしら自分に得られるものがあると思う。



(昭和48年7月 インカレ-鹿児島)

バトミントンの応援をした時に閉め切った室内で汗を流して、屋外に出た時の爽やかさ、陸上競技場での海から吹いてくる強風の中、硬式テニスの壮行会…それらのものが、まぶたを閉じると今更のように浮かんでくる。このような感動を忘れることなく、来年のインカレを目指したい。

## 楽しいキャンプ合宿

(剛毅第5号)

今年は地獄温泉での合宿であった。8/29 午後1時に部室に集まり炊事班分け、食事メニューが決められ、合宿の幕開けとなった。

1日目、龍田口駅から列車に乗り阿蘇地獄温泉に向かった。立野から高森に向かう汽車は蒸

気機関車(昭和L)であった。そしてバスに乗換えて無事に地獄温泉に着いた。

1日目、練習なし。昼過ぎから山に登った。帰ってくると風呂に入りゆったりとした気分になった。まさか風呂に入れるとは…。

2日目、練習開始。早朝練習では久しぶりのランニングに集団から遅れがち…。午後は演武練習などを行ったが途中から雨にたたられる。

3日目、この日は腹を壊して寝込んでしまった。でも、みんなは合宿の雰囲気慣れてトラップなどが大流行、こんなことなら将棋を持ってくるのだったと悔やむことしきりであった。雨にたたられて草千里に行ってソフトボールを楽しむことは出来なかったが、缶けりや竹竿ゴルフが大流行であった。

4日目、この日午後からは、夜峰山に登りエールの練習、途中霧がさつと晴れたのには歓声があがった。垂玉温泉の横の滝に行き橋の横で班別に記念写真を撮った。打ち上げの最後は、少々乱れてしまったが、1回生と2回生の考えの違いに痛感させられた。

応援団にしては非常に珍しく、レクリエーションを兼ねたような合宿であり、「時にはいいなあ」と2回生の方がそろって言われたが、自分にははっきりとはわからない。ただ、今までの合宿とは違う何かがあると思うし、わき合いあいた雰囲気生まれたと思う。



(昭和48年7月 インカレ-鹿児島)

## 退団届 心の葛藤 未来への出発点

(昭和49年発行：剛毅第6号)

記憶をたどってみれば、昭和43年頃である。高校の松林のなかで、和田さんとの出会い、熊大応援団というもの存在を知った最初の時でありました。そうして、昭和46年にあこがれの大学生活が始まり、和田さんが作った応援団にも入りました。

ここまでは意気揚々と希望に燃えた若者の姿がありました。しかし、応援団に入って一週間もたたないうちに、重大な問題にぶつかりました。「挫折」です。こんなきつい練習を続けていくと、自分が描いた大学生活の全てが、めっちゃくちゃになってしまうのではないかという不安にとりつかれたのでした。そしてこの気持ちちは、日に日に私の心の中で大きくなっていきました。

その時の心境を語る資料が、実は私の手許にあります。「退団届」です。それを書いた時から、今日まで誰にも手渡すことなく机の引き出しの一番奥に大切に保管していたのです。今、封を切って、当時の心境を思い出してみようと思います。その前に全文を紹介します。



(昭和46年7月 インカレ-大分)

『一退団届一まことに勝手ながら応援団を退団させていただきたいと思います。つきましては、応援団の練習を始めて一週間そこそこで、このような決心をしましたのは、まことに根性のない駄目な男だと思っています。最初応援というものは、格好がよいものであこがれていた

のですが、日がたつにつれて苦しみだけになりました。毎日練習が終わって下宿に帰ってただ寝るだけ、そして朝早く起きることもせず、このような生活を毎日続けていくことに耐えられません。また、今後長く続けられる自信もありませんし、早く心を決めた方が、ご迷惑をかけることも少ないと考えました。以上簡単ではありますがありますが今の僕の心境です。』

私は、この時の心境を一笑にふしたり、否定したりはしません。なぜなら、この決断が、自分の大学生活を左右することになったからです。こんな私が、今応援団をやり通してこの原稿を書いているのです。自分でも信じられないくらいですし、すばらしいことだと思います。自分が応援団生活で得た数え切れないくらい多くのものを、後輩達がまた同じように獲得してもらいたいと思います。10年間は、一区切れてありますが、同時に未来へ続く出発点です。

## 自分の求めるものが応援団にあった

(剛毅第6号)

応援団に入って1年数か月がたった。最初はものすごく不安であって、簡単に誓約書を書いたことに大きな後悔を覚えた。でもその不安は本当に些細なつまらないことばかりであった。

それから厳しい練習が始まった。きつかったが、私はその場その場での戦いであると想定した。高校まで運動らしいものをしたこともなく、クラブ活動さえもやったことなく、満足することを残さなかった自分であった。

だからこそ、入学した時は心から触れ合える友や先輩、そして自分が一心に打ち込める何か欲しかった。精神的にも、肉体的にも強い人間にもなりたかった。そして、応援団というのが私の前に姿を現した。

毎日、先輩の後をただ、くっついて行っているだけで私が求めていたものを私は見出すことができた。苦しい練習、その後のコーラー、団員間での付き合い、日々充実感があつた。い

ろんな立場での先輩の励まし、忠告が身に沁み、自分は苦境に落ち込んだ時はいつもよみがえってきて自分の支えとなった。



(昭和 49 年 9 月 夏合宿-武夫原)

そして、インカレ、合宿、演武会を経験して二回生になり、大学内での多種多様な考えや生き方に揉まれるうちに、応援団が息苦しく感じ始めた時期もあった。でも、そのたびごとに、日々の厳しい練習に耐えて最後まで自分と戦い、深い人間関係を形成する応援団活動が自分にとっては必要なもの、絶対譲れない生き方、考え方であることを再認識した。

### 立田山ランニングでの妄想

(昭和 50 年発行：剛毅第 7 号)

いつものとおり、立田山へのランニングが始まる。最初、我がクラスの女の子が帰るのに出会うかもしれない、がんばろう、なんて思って走っていると、つまずいてころんでしまった。しまった、追いつかなくてはと思いながら坂道を上がっていく。横を自転車に乗った人が振り返りながら行き、ガキが掛け声の真似をする。「バカ、見世物じゃないんだ、くやしかったら一緒に走ってみろ」

貯水池前に行くとアベックがいた。うまくやっているな。まだ余裕がある。休む間もなく階段へ。老夫婦が「がんばれ！」と声援を送る。「おじいちゃん、これはそんなに生やさしいものじゃないんよ」

疲れて上へあがると、またアベックがいた。後ろから突き落としてやろうか。少し気が立っている。もう余裕などない。今日は「腕立て」が最高の回数だった。「やりゃあ、いいもんじゃあないんだ、あほ」ああ、これはまずい。この原稿を出してから、幹部ににらまれるかも知れない。



(昭和 53 年 5 月 五月合宿-)

熊本市街を見ながらお手々振り振り。あのアベックがまだいる。いいかげんにしろ！ その時、「〇〇、よそ見するな」ハイハイ、わかりましたよ。お兄さん・

「よし、帰るぞ！」と言いながらも例のごとく心臓破りの坂で、うさぎ、あひる、かめ。「ハイハイ、わたしゃ、うさぎさん」なんてふざけて、こまわり君みたいなことを言いながらもやっと済んだ。

帰りにクラスの者とすれ違った。この時とばかり、最後の力を振り絞ってカッコよく走った。後でよく考えてみると、ジャージの表裏が反対だった。

なお、この文章は、一部フィクションが混ざってあります。まじめで熱心に練習に取り組んでいる作者より

### 足の長い小生の苦労とは…

(剛毅第 7 号)

応援団といえば「立田山」と「エイサー、ホイサー」の掛け声を連想する人が多いようです。

そこで、僕はなぜ立田山に登るのかと聞かれたら、僕は即座にこう答えるでしょう。

「そこに山があるからだ」と…。

小生、「最初は他のクラブに入っていたが、途中で何となく応援団なるものに魅かれて、入ってしまった者です。

最初の練習で思ったことは「早まった！」今でもこのしごきのごとき練習には慣れません。小生の足は長いのですが、肺活量が少なくランニングはとても苦しいです。次にお手々振り振り…。足とともに長い手なので、みんなよりとても力が入るのです。そして四股立ちでは、やはり長い足では股間を作用点とする「てこの原理」でとてもきついのです。あひるも長い足が絡まっとうまく前には進みません。

とにかく、この練習を克服するには長い足を短くするか、根性しかないようです。中学、高校とクラブらしいクラブを経験していない小生に欠けているのは後者であることは、ずっと前から承知のことでした。応援団がこれを目覚めさせてくれるような気がします。ただ、日曜日の応援のための代休がないのが玉に疵です。



(昭和51年8月 夏合宿-武夫原)

## 塩と臭いにまみれた学ランと過ごした一週間(二回生のがんばり)

(昭和54年発行：剛毅第11号)

応援団にとって、その使命を果たす最も大切な行事であるインカレが今年もやってきた。今年の熊本インカレは、まさに地獄のインカレだ

った。7月13日ボクシングの壮行会を皮切りに7月20日まで何と8日間の日程だった。天気は最初の2日間のみ雨、7/13からは連日暑い日が続き、自分の学ランにも応援団の勲章である塩の縞と独特の臭いがこびりついてた。

今年は自分がリーダーになって応援したので、とても気合が入っていた。硬式野球、水泳の応援、壮行会等があり、一日中スケジュールがびっしりだった。後半になると相当疲れもたまり、のども枯れて大変きつかったが、とにかく熊大に勝ってもらいたくて、一生懸命応援をした。たとえば、一度やってみたかったボシタ連呼の連発を他団員の反感を覚悟で敢行して、1イニング7回やった。終わった時は、さすがに足が痛かったが、とても気分が良かった。



(昭和54年7月 熊本-インカレ)

しかし最高に燃え上がり気合が入ったのは、最終日7/20の準硬式野球の対商大戦の応援だった。相手の応援団も来ていた。自分の体験では初めての応援合戦となり、グラウンドでは野球、スタンドでは応援合戦の2つの試合があっただろう。野球の方は押され気味だったが、応援は絶対に負けないぞと思い、最後まで力を振り絞って応援した。結局、野球の方は惜しくも負けてしまったが、インカレ中、最高の応援ができた。

こうして、今年のインカレは終わったが、暑い中一週間以上も応援を続け、とても苦しかったが、何か貴重なものを得たような気がして、塩と臭いにまみれた学ランをそのままにとっておきたい気持ちになった。

## 暑い夏、地獄のインカレ、人生の糧…

(一回生のがんばり)

(剛毅第11号)

インカレそれにしても熊本の夏は何と暑いのでしょうか。インカレというと、すぐにあの暑さを思い出す。強烈な直射日光の中、一瞬あたりが、真っ白になるような錯覚に陥ります。その暑い中、黒い服、黒い靴、おまけに黒い靴下まではいて、汗をだらだら流して、目をギンギン光らせて、大声を張り上げていたのだから、何ともたまげろ。他の人が見たら、さぞ気が狂っているように見えた事だろう。

それにしても、何で今年に限ってわざわざ熊本で開かれたのだ！そのため10日間という長い団活になってしまった。私は生涯においてあれほど長い10日間を過ごした記憶はない。



(昭和54年7月 熊本-インカレ)

あと2年遅く、あるいは2年早く熊本開催になってくれたらよかったのに…。もしも2年遅かったら僕たち一回生がその頃幹部になっており、下級生の苦しむ姿を横目に…。ウッシッシ…。もし2年早かった、今の幹部がちょうど今年の僕達みたいに、さんざん苦しんでいたのだ、イっひっひ。

このインカレで一番記憶に残っているのは、やはり水泳の応援だ。何故かというと考えてみてください。選手の方は水の中をアゴ(トビウオ)の如く、スーイスイ泳いでいるのに…。こっちというと風も吹かない炎天下、黒装束に身を固め、黒い革靴だ。靴の上に卵を落としたら、

きっとおいしい目玉焼きが出来たに違いない。その焼け付く靴も何のその…長い、長いインカレの打ち上げの生ビールを思い浮かべつつ10日間を乗り切った。

でもいざ打ち上げの時になると、興奮しすぎた私は、不覚にもコップ一杯飲むか飲まないうちに鼻血を垂らしてしまったのであります。

『長く苦しい10日間であったけれども、これ乗り越えたという自信こそが、明日の人生の糧になるのだ。』…と幹部がおっしゃた。

## 応援団は体で感じるしかない

(剛毅第11号)

応援団に入団したのは昨年の4月、その4月は地獄だったなあ。生協付近で各サークルの部員勧誘でやたら賑わっていたが、新入生はたまったものではない。自分も応援団に捕まった時は、本当に「しまった！」と思った。「これは人生の一大事」とばかりに、下宿に戻っても、講義にでても考えることは応援団に入ったこと…。いかにしたら応援団に入らずに済むかどうかである。でも今思えば一笑するにすぎない。果たしてどういう心境の変化が僕の中に起こったのか。入学したころは応援団なんて眼中になかったのに…。これは他の団員にも共通していることだろうし、先輩たちも同様ではなかろうか。



(昭和54年8月-夏季合宿にて)

でもその1年後、団員勧誘に四苦八苦している。いくら応援団が素晴らしいか、いかに心の

糧というべき存在であるかを、新入生に訴え勧誘しても伝わらないし通じない。つまり、応援団に入って自分自身が体得するしか方法がないのである。これは長所というべきか短所というべきか難しい問題だ。しかし、これだけは言える。

“熊大応援団 入部して後悔することはなし”

## 見えない頂上、はいつくばって登るのみ

(剛毅第11号)

応援団に入部して一年半がたった。今俺は地獄の二回生である。

一回生の時に思ったのは、練習、応援など面で一回生より二回生の方が楽に思えた。でも二回生になって初めて、それが間違いであることが分かった。練習において一年生よりくたばってはならないし、苦しい顔を見せてはならない。その精神的重圧と云ったら、一回生の頃の練習と比べ物にならない。応援も一回生より大きな声で気合を入れてやらねばならない。すべての面で二回生は一回生に負けてはならない。



(昭和55年3月の春合宿-立田山階段でのアヒル)

そうかといって下ばかり気取られていると上から怒鳴られる。一年生からは突き上げられて幹部からは小言を言われる。間に挟まった二回生はとにかく苦しいのであるしかし耐えなければいけないのである。いくら苦しくても絶対に弱音を吐かず耐えて、耐えて耐え抜くことが二回生なのだ。

応援団というものは大きな山なのだ。そしてその頂上は雲に隠れて見えない。俺は今、この大きな山の中腹にしがみついている。目の前には、いくつもの難所が控えている。その難所を一つづつ乗り越え、たとえスピードが遅くてもいい。はいつくばって着実に前進し、雲に隠れた頂上を極めるまで一生懸命頑張りたい。

## 優しさに包まれた私…優しさが持てるように

(昭和55年発行：剛毅第12号)

優しさ…とは、何と温かく、柔らかい響きを持ったことばであろうか。

最近、私は「優しさ」という言葉を考えると、自分がどれだけ多くの人の「優しさ」に包まれているかということに気づくのである。まず第一に、思い浮かぶのは家族の事、肉親の愛情はとて言葉では言い表せるものではない。次に友達。少し元気がないとすぐに「どうしたの?」と声をかけてくれる。そして忘れてはならないのが応援団なのである。

幹部の方に、二年生の方に、一年生のみんな…それぞれがそれぞれの立場からいろんな優しさをのぞかせる。まさに私は、人々の優しさに守られながら生活を送っているといっても過言ではない。



(昭和56年5月:新入生歓迎コンパ)

対して、私自身はどうかというと、恥ずかしいよりほかにないように思う。応援団に限ってみても、皆の優しさを踏みにじるようなことだけはしたくないと思いつつも、つつい顔を

出す怠惰や甘え、ぐち不平が出てきます。短気な私は、心もぎすぎすになりがちで、精神的余裕などからは程遠い。精神力や気力などといったものを要求されるこの応援団にあって、マネージャーがこう精神力が弱いのであれば、どうしようもないではないかといつも反省ばかりである。

がらりと性格は変わるとは思われませんが、こう書くことでせめて良い方向に導くべとしましょう。いつまでも、あたたかく柔らかい陽だまりのような「優しさ」を心の中に持ち続けたいですね。

### 雨にたたられ 幹部の小言 辛いのは二回生

(剛毅第12号)

その時、私は降りしきる雨の中にいた。学生服はもちろんのこと、カッターシャツやその下のシャツ、パンツに至るまでグショグショになりながら、それでもじっと立っていた。博多駅からバスに乗り九州大学前に降りた直後から雨が降りだしたのである。せっかく二回生としてインカレに燃えていたのに、雨で落ち込んでしまった。



(昭和55年7月：インカレ遠征-福岡)

でも、それでも引くに引けない熊大応援団だ。こうなれば、思い切り大声を張り上げて燃え尽きようと頑張った。とにかく、今年は雨が多くて応援よりも移動に多くの時間を費やすために、団員の意気がなかなか上がらなかったというのが実感である。幹部からは夜毎、小言を言

われるし、かつといって二回生だからだらける訳にもいかず、中堅の辛さをひしひしと感じたのが今年のインカレだった。

### 練習の辛さも OB 会の感動でうれしさに変わる

(剛毅第12号)

応援団の夏といえば…そう、なんです。夏合宿です。8月28日から9月3日まで武夫原で合宿、そして9月5日からは強化練習がありました。最初は冷夏を象徴する雨のため、早朝練習に代わる合宿所での硬い床の上での正座から始まりました。それでも3日目からはカラリと晴れて夏合宿らしい練習になりました。10時から12時までの基礎体力づくりは、ひたすら暑さと自分との闘いで、限界体力(?)との闘いでした。気分がもうろう、昼食が食べられない者が続出です。午後の演武練習も暑くて頭がボケーとしてきましたが、そんなときに頭からかけてもらう水は最高でした。



(昭和55年9月の第5回OB会から)

練習について行こうと必死でもがいているうちに6日間の地獄は去っていきました。でもダメ押しの強化練習が待っていました。OB会を目前にしてひたすら演武練習に励みました。そして、OB会を迎えました。OB会の圧巻は何と言っても「巻頭言」でした。武夫原頭に草萌えて♪…と体育館狭しと、舞い踊り歌われる姿は、まさに壮観という以外にありませんでした。OBの心の奥深くで応援団が生き続けてい

ることに、たまらないくらいに感動をしました。そのあとのコンパでは、多くのOBの方から話を聞いたのも大変有意義でした。

翌日のソフトボールでは、我ら1、2年生チームは長老チームと対戦をして、若さで圧勝と思いきや、長老チームの打撃が爆発してなんと33点も取られてしまいました。

そして、OB会は終わりました。多くの感動を僕らに残していきました。苦しい地獄のような練習を耐え抜いたからこそ、OB会の成功がうれしく感じられました。OBの言葉の一つ一つが心に残り、忘れえぬ夏になりました。

### 灼熱地獄のあとの大きな喜び

(昭和56年発行：剛毅第13号)

骨格と筋肉の動きが重い。体温を調整するための発汗機能は低下していた。少しだけ傾いた太陽は容赦なく後頭部をたたいている。アスファルトの道路から立ち上がるかげろうの中を進む。黒づくめの集団、その眼はほとんど虚ろであった。

“暑さにこんな力があるなんて！！”

黒潮寮に帰り、地獄の拘束を解かれると天国へと走る。すっかり火照った体に水をひたすらぶっかける。「ああ、生きていた。今日を乗り越えた…」そして明日だ。



(昭和56年7月の鹿児島でのインカレ)

苦あれば楽あり。単純な一句だが、大きな真実を含んでいる。苦の中に忍耐があり、絶望があり、そしてまた希望がある。

思い起こせば苦しいことばかりで、その後は楽しいことばかり。苦しければ苦しいほど楽しさは倍増する。要はいかに必死で苦にぶつかるとか。そして、その後は酒池肉林…。やった者だけが味わえるものがある。

### もう甘えは通用しない。常に限界をもとめて

(剛毅第13号)



(昭和57年3月の春合宿)

自分はなぜ応援団というところに入団したのだろうか。今でもよくわからない。4月の新入生勧誘につかまり、また寮で同じ階の応援団先輩からいろいろと話を聞いて多少の興味は持ったのだが、むしろ不安や後悔の気持ちの方が大きかった。大学に入ったらとにかく何かクラブに入りたかった。中学、高校を振り返ると、とても満足のいくクラブ活動ではなかったし、クラブを通して良き先輩や後輩、友人関係は得られなかった。だから大学では充実したクラブ活動をして生涯付き合えるような人間関係を持ちたいと願っていた。それもちょっと変わったクラブに入りたいと思っていたが、まさか応援団などというところに入ろうとは思ってもなかった。熊大応援団との出会いはまさに偶然と言えるだろう。

早いもので入団してから、もう7か月過ぎた。その間コンパも数多くあった。まだ酒を美味しく飲める境地には至っていないが、コンパのあの雰囲気は好きだ。馬鹿みたいに騒ぎ、歌い、



語り、そして泣いた。内向的な自分にとっては、このような心を開ける場が必要だ。いろんな事もあった。5月合宿、幹部交代、早朝練習、インカレ、強化練習、遠歩…。きついばかりだった。しかし、それを確実に乗り越えてきたことで、4月入団当時の自分に比べて、今の自分はいくらか成長をしたと信じたい。来年も再来年も同じことが巡ってくるが、そのたびごとに違った心構えを持って確実に自分のものにして行こう。

応援団の練習はきつい。涙が出るくらいだ。しかし入団して7か月過ぎて演武会を目指しての練習をやっている今、「一回生だから…」という甘えはもう通用しない。今まで甘え育ててきた自分を鍛えなおさなければならない。常に限界を求めていけるような自分でありたい。

### 嫌であり新鮮な刺激のある応援団

(剛毅第13号)

大学という世界に飛び込んでそろそろ8か月も過ぎようとしている。あの入学当時のあわただしい毎日は送っていたが、最近は、たいした変化もない日々をそれなりに過ごしている。そんな一日の中で僕の生活をかき乱しているのは、まちがいなく応援団なのである。



一日のうちの午後5時から7時頃までという短い時間であるが、僕の心をかき乱し身体をいじめる。時にはすごくそれが嫌であり、時にはそれが何かしら新鮮な刺激でもある。そんなふ

うに、とにかく応援団は僕の心の中でドスンと居座ってしまった。

応援団っていうものを以前よりは好きになった。これから先も続けるだろうなあ。やり始めたら最後までやり終わるまで意地になってするところがあるからなあ。いつか応援団一色に染まる日が来たりして…。

(昭和56年7月の鹿児島でのインカレから)

### 初めてのOBとの出会い、緊張から親しみへ(二回生)

(昭和57年発行：剛毅第14号)

夏合宿、強化練習を終え9月。その日がやってきた。写真でしか見たことのない顔、人づてにしか聞いたことのない言葉、その現実の姿を今、目の前にするのです。緊張の糸が張りめぐらされた床の上を歩くような気持ちで先輩方を迎えました。



(昭和57年9月第6回OB会)

OBを交えた合同練習では、昔なつかしい古びたジャージを着て、汗をかく先輩の姿を見たとき、何か先輩に対して抱いていた「畏れ多くもかしこくも…」という感じは崩れ、いい意味でもっと親しみやすい感じを受けました。立田山の坂道を先輩たちと一緒に駆け上がりましたが、先輩たちはどんな思いがあったのでしょうか？すがすがしい笑みをこぼす先輩の顔が印象的でした。

コンパでは、演武会の緊張もほぐれ、先輩たちと杯を交わしいろんな話を伺いました。いつまでも若い先輩たちの情熱を込めた話に驚かされ放しでした。ここに我が応援団の発足の礎があるんだという気がしました。

開けて翌日、昨日の酒はどこえやら…やる気満々で気力充実の先輩方とのソフトボール試合です。うわさを聞いていた僕らにとっては、負けてなるものぞとばかり、気持ちを高めて臨んだものの、その“OLD POWER”の前にあっけなく玉砕され、ただあっけにとられるばかりでした。

楽しい時間は思ったより短く、2日間の日程を終えたOBの皆さんは、それぞれの世界に戻って行かれました。祭りの後の寂しさにも似た感情にひとりながら思いました。

“また、2年後に会いましょう。次は20周年です。”

## 初めてのインカレ（一回生）

（剛毅第14号）

インカレの強化練習の時、先輩が「インカレは想像を絶する」とか「ぶっ倒れる」とか怖い話をしてくれたので、2日も3日も続いたらどうなるのだろうと思っていた。とにかく張り切って応援しに行こうと思っていた。

1日目 幸いにも小雨模様だったため、夏の暑い日差しからは避けられた。午前と午後は水泳の応援。成績なんか気にしてられない。ひたすら、リーダーを見て実践するだけであった。1500m自由形も数回あった。夢中になれた。熊大ファイトもかけた。しかし、その日のミーティングでは幹部からとても怒られた。

バレーの試合は小刻みに展開していくためリーダーは難しそうであった。

また、リーダーとこれだけ離れてする応援は初めてだったため戸惑ってしまった。それから、壮行会も行ったがみんな気合が入っていた。団

生活の中で、また一つを山を乗り越えてほっとした…。



（昭和57年7月インカレ北九州から）

## 一回生の一日

（剛毅第14号）

午前8時。目覚ましの音に目を覚ます。しばらくして頭が回転し始めるが、前日の練習で疲れた体が思うように動かない。やっとのことで起きて、朝食をとるため生協に向かう。

午前8時40分。真面目に1限目の授業に出席するが眠い。2時限目は眠気も取れて勉強に打ち込むと言いたいところだが、そうもいかない。その日の練習が気になってくる。昼食を済ました後は満腹で気持ちが良くなり、3時限目に出るのが億劫になる。練習の事も考えて自主休講にすることもしばしばである。

午後4時40分。いつものように部室に向かう。その足取りは鋼鉄の重りでも引きずっているかのように重い。ただし、水曜日は軽い。

午後4時59分。茫然。

午後5時。「跳躍！！」リーダー長の掛け声と同時に練習が始まる。「二列、じゅーたい！！」一番嫌なランニングだ。

「よし、今日は遅れんぞ！！」と思うのもつかの間。足がだるい。回転数が減ってくる。見る見る間に皆が遠ざかる。自分が情けないと涙することもある。何故、こんなきつい事をしなければいけないのか…腹を立てることもある。

だが、次の瞬間、何も考えずにひたすら走っている自分に気づくこともある。不思議である。

ランニングが終わるとすぐに、腕立て伏せ、うさぎ、あひる、かめ、おんぶであり、しこ立ちであり、腹筋などなどである。どれをとっても、まさに「地獄の2丁目」である。

「解散」練習が終わり、体中の力が、すうっと抜けていく。このひとは極楽である。

午後8時。いつものごとく「太陽軒」で夕食をとる。

午後9時。シャワーを浴び洗濯を済ませ一段落ち着いてテレビでも見る。そんな時ノックの音がする。70%の確率で麻雀仲間がやってくる。それ以外は、応援団一回生仲間か出身校の友達である。



(昭和58年5月5月合宿)

午後12時。結局一人になって床に入り考えることは、やっぱり応援団のことである。明日の練習では、どうしよう、こうしようと思うのだが、よく考えてみると前の日も同じようなことを思っていたなあ…と思いきや可笑しくなる。

午後12時〇〇分。ぐっすり眠りに入る。

このように応援団に明け応援団に暮れていく生活の自分だけど、今は耐え忍ぶことが必要

かもしれない。とにかく、押忍の2文字に賭けてみようと思う。熊大、ファイト！！

### 自分に素直に、そして積極的に生きたい

(剛毅第14号)

早いもので二回生になって半年以上が過ぎた。これまでの自分を反省してみて、一回生をリードしていく立場として、至らない面がまだまだあるように思う。練習中、応援中、そして練習外においても…。

本当に最近月日の経つのが早く思えて仕方がない。入学時のドタバタがついこの間の事のように。このままだと、自分も時の流れに押し流されて、いつの間にか、ただの過去の人になってしまいそうだ。これじゃいけない、何かを残さなければ。いや無理に形のあるものを残す必要はないのじゃないか。虚勢を張って生きることはない。もっと自分に素直に生きよう。そして、自分に与えられた使命、義務というものを積極的に果たしていこう。すべては明日のために…。



(昭和58年5月5月合宿)

ところで、自分は体育会本部の役員も務めてきて、それ相応の責任をひしひしと感じている。また、応援団二回生という立場もあり、この2つの立場を踏まえ、自分の力を試していきたい。これからも「可能性」を追求していきたいと思う今日この頃である。

## ある一回生の葛藤

(剛毅第14号)

学ランを着れば高校生にしか見えない僕を熊大応援団の一員だと誰が思うであろうか。練習中に幾度休ませせて下さいと言おうと思ったことか。結局（ここで休んだら後悔するような気がして……）そのまま終わりでまて行ってしまった。練習が終わるとほっとする。汗をこれだけ毎日流せるなと感心する。

一日一日の練習にぶちあたるしかししょうがない。この先、団員として自分は変わっていくのだろうか。演武練習をすると、僕はリーダーに合わせる事が出来ず幹部によく怒鳴られる。自分では遅れないようにしているつもりだが……。実戦にしても壮行会にしてもみんなが力を合わせてやらなければ意味のないものになってしまうからこわい。とにかく練習頑張ります。



(昭和58年-5月合宿)

## 今は辞めるわけにはいかない 不器用な自分

(昭和59年発行：剛毅第16号)

小学生のころ、単行本で出ていた「嗚呼、花の応援団」を見て、応援団とはああいふ無茶苦茶なことするのだと幼心に思っていたが、面白いと読み漁っていた。中学校の頃の体育大会では、応援団は見ずにチアガールだけしか見ていなかった。高校生になっても体育大会での応援団だけだったが、中学校よりはきつい練習をし

て凄みもあった。声も潰すものもいた。でも体育大会の団長になると大学に落ちるというジレンマがあったから、別段、応援団をしたいとも思わなかった。



このように、本当の応援団に接触しなかったため、生協前の勧誘に出くわした時に、どういふものか興味があったし、1か月だけやってみようと入団した。今では苦しい練習が続き、家に逃げ帰りたい心境であるが、惰性で応援団練習に取り組んでいる。今は惰性でいかないと応援団を辞めてしまうかもしれない。中学の時から柔道の練習も高校の勉強も惰性でやってきた。応援団に入って性格が変わった。柔道をしている時は密かに蔭で練習をやるのが好きだった。知らない相手とやる時のためには、日々暗い練習をしなければならなかった。応援団では、自分を表に出して明るく活動をしなければならない。今は応援団を辞めるわけにはいかない。途中で辞めるほど器用じゃないから…。

(昭和59年8月：夏合宿)

## 学館前の歩いた道が応援団の道だった

(剛毅第16号)

それは、忘れもしない4月11日の午後のことであった。学部の入部式を終えた私は、スーツ姿で生協に入会しようと学館への道を急いでいた。それが間違いのもとだった。もしあの時、裏門から出ていれば、私の大学生活は今と百八十度変わっていたであろう。しかし、現実には学館前で、突然腕を掴まれた。

「応援団ですが、ちょっと話を聞いてください。」と言われた。その「ちょっと…」が甘かった。楽しそうな写真ばかり見せられたあげく…。「マネージャーは可愛い人ばかりで、すぐに仲良くなれるぞ!」とかニコニコして説明された。



(昭和 59 年 4 月 新入生 歓迎コンパから)

高校時代に応援団に入っていた私は、それが勧誘の常とう手段であることを知りつつも、先輩方の熱意に負け、最初の「ちょっと」が2時間半になった挙句に、ついに入団届に署名してしまった。それから3か月が過ぎたわけであるが、もう無我夢中であった。練習は2時間だが、その長いこと、長いこと。高校時代とは練習の密度が違っていった。ランニングが苦手な私にとっては、あの『二列縦隊!』という声が、死の宣告のように重く胸にのしかかってくる。

立田山が、すぐ近くにあるのを恨む時もある。武蔵塚、八景水谷、熊本城、江津湖、本妙寺など、観光の名所であるはずの所が、まったくそれどころではない。それに、入団当時間かされたことのなかった「強化練習」などもあり、苦しんでいます。練習前は、ただでさえ尿意が近いのですが、緊張のあまり何回もトイレに走ります。しかし、練習が終わった後の解放感は、何物にも替え難いものがあります。

そして、練習に勝るとも劣らないくらい私を苦しめたのがコンパです。「熊本はイモ焼酎ばかり飲んでるぞ」と聞いていましたが、なるほど聞きしに勝るものがありました。酒が全く飲めない私にとっては、入団式、新歓コンパは地

獄でした。しかし、幹部交代コンパのときからは、その考えが変わりました。あの大会の儀式をみてからです。やはり酒は強くならなければいけないと強く感じました。これから数えきれないほどのコンパをこなしていくうちに少しは強くなるでしょう。まだ、入団したての何もわからない一回生ですが、とりあえずは、目の前に迫った「インカレ」を目標に頑張りたいと思います。

## まあ話を聞け、から始まった応援団生活

(剛毅第 16 号)

(第 19 代 故藤川さんの剛毅文章から)

一年生の4月、雨のしとしと降っていた夕方、生協で夕食を食って帰ろうとしている時だった。私は寮の友人と二人で歩いていたのだが、体のごつい先輩、多分、前川先輩だったと思うが、友人と一緒に腕をつかまれてクラブの話だけでも聞いてくれと、椅子に腰かけさせられた。まず、最初に私は「クラブは何ですか?」と聞くと、「応援団だ」と答えが返ってきて、すぐに椅子を立とうとしたが、それより早く押さえつけられて話を聞かされた。



(昭和 58 年 9 月 強化合宿)

写真を見せられたり話も聞かされたが、いっこうに耳に入らず、ただ早くこの場を去りたい気持ちだけだった。幸い、隣の友人は話が上手で、うまく勧誘を振り切ったみたいだったので帰れると思った。実際、帰れるはずだった。ところが、帰れると思ったら今度は応援団に入るのも面白いんじゃないかと思い始めたのであ

る。誓約書を書いてしまったのである。こうして応援団生活が始まった。

でも聞くと応援団をやるとは大違いで、練習は非常にきつかった。ただやめようとは思わなかった。私は、応援団が好きではなかったが、応援団員は皆好きだった。応援団には酒があった。酒については嫌な思い出がたくさんある。1年生の時、夜10時から飲んで夜中の3時頃までアカシヤにいたのは覚えているが、朝目覚めると水野先輩の部屋であった。

それから朝食を食べに生協に行ったのだが、最後の味噌汁を一気に飲んだ途端に、食べた朝食を全部吐いてしまった。そして、再び水野先輩宅に戻り練習前まで寝ていた。

こんな苦しい応援団生活を2年あまり続けて今は、幹部となって神様になった気分は最高だが、反面、上に立って引っ張っていくことの難しさを知ってきたこの頃である。ただ、自分が今日まで続いた理由は何なのかと聞かれたら、自分が馬鹿であったこともあるが、団員の人間性が好きだったと思う。苦しい時を共に過ごした仲間意識があった。これからも熊大応援団は続いていく事だろう。

### 押忍一耐え難きを耐え 忍び難きを忍ぶ (第20代幹部)

(昭和60年発行：剛毅第17号)

「押忍」この二文字と出会って3年…何回この言葉を発したことか。一回生の頃、生協の食堂で、大声で「押忍！」と叫ぶのがなんとなく誇らしげな気がして快感だった。二回生になり、一回生から「押忍！」と言われるようになり、少し偉くなった気がした。

そして幹部になった。一、二回生の「押忍」の仕方が悪いと怒る。応援団活動は、すべて行く着くところは「押忍」だ。応援団とは「押忍」の二文字で表現される。「押忍」とは、単なる挨拶や返事ではないということだ。押忍の意味を考えなければならない。日常生活全般に「押

忍」の心を發揮して「押忍」を追求しなければいけない。



(昭和61年3月春合宿)

### 二回生の今…すべてが山積み

(剛毅第17号)

11月も終わりに近い今、自分は飽和状態です。つまりすべき事が山積みしているという状態です。とても喜ばしいことです。自分はこの余裕なき状態が好きだからです。これからもそうあればいいと思います。これは試行を放棄したために状態が変化しないことはありません。自分は今2回生であり、ここの応援団の感覚を伝えるべき立場にいます、体現者たり得ている

か甚だ疑問ですが、やらねばなりません。自分は智に働き流されず意地を通さなければなりません。そうすれば住みやすくなると思います。



(昭和60年3月春合宿)

## 統制長の独り言(時の過ぎ行くまに…)

(昭和61年発行:剛毅第18号)

統制長と呼ばれ続けて半年が過ぎた。自分のどこをとっても統制長と呼ばれるにはまだまだ甘い部分がある。この半年、いったい自分は何をやってきたのだろうか…と振り返る時がある。

幹部になった時は、二回生3人、一回生3人で始まった。春までは二回生は5人だったが、2人が退団届をだした。その2人を団に戻そうと説得したが、夏のインカレ前には退団してしまった。そんな状況の中で一、二回生には十分に目を配れなかった。インカレが終わるまで悪戦苦闘の日々であった。体重もかなり減った。そして現在に至る。



(昭和60年12月演武会から)

「おい、統制長!! お前、何やとるんか!」夢を見る時、必ずこの言葉がでてくる。どこにでもいるような、ただのちっぽけな人間に過ぎないこの俺が、返答できるだろうか…。結局、自分の弱さ、未熟さ、甘さに気づくだけである。

幹部になっても半年。先ほどの言葉を夢でみながら、突っ走ってきた。時には回り道しながら…。ほとんど回り道だったかもしれない。しかし、これからも変わりはない。一、二回生を怒鳴り鍛える。それしか方法はない。悩ませて、泣かせて、怒らせて、考えさせる以外に何も生まれやしない。

応援団…練習が全てではない。むしろ練習以外で応援団というものを徐々に知っていく。一、

二回生は人数じゃない。団員一人ひとりのハートさ。『辛く、苦しい、それだけなのにバカになれた一年目』『上に下に挟まれて孤独、寂しさ耐えねばならぬ。それでも下がかわいい2年目』『ここまでくればしめたもの。やってやるさ燃え尽きるまで…3年目』

何故ここまで続いた応援団、答えは一つ、ただ一つ、応援団が好きだから…。それしかない、ウン、やっぱりそれしかない。押忍!!

## 校旗をもって思う(一回生の気持ち)

(剛毅第18号)

ある金曜日の夕方、自分はテニスコートの前に学ランを着て立っている。「旗を上げて」の号令、目の前にあった旗を立てる。

“今日の風はどうかな?” メヒ

コ、必勝の歌、第一学生歌が続く。最後はエールだ。リーダーに合わせて校旗を下さなければならない。当然のことながら、自分…いや校旗が目目されているだろう。しっかり下さなければ…。いつか飲んでいる時、どこかの部の先輩が言ったことを思い出した。「あんな大きなものを下したり上げたりするのを見ていると、力が湧いてくる」「あまり恰好はよくないですが、お役にたてるなら…」と心で思う。今度は「旗を下して」の号令、周りの人が自分…いや校旗に押忍をする。大変なものを持っているものだといつも思う。



(昭和60年12月演武会)

他大学の演武会のパンフレットを見た。「旗手、それは不動の精神を持って、風に影響を受けずじっと旗を支え持つ」と書いてあった。自分はといえば、不動どころか、風が吹いたらどこへと飛んで行ってしまいそうだ。演武会では、この旗に恥じないようしっかり旗を持ちたいと思う。

## ウルタンの面白さ

(剛毅第18号)

今までのウルタン「剛毅」を読んで、自分たちと同じ時期を過ごされた先輩たちの気持ち、今の自分の気持ちと同じところが多々あるのには、本当に熊大応援団なんだと再確認いたしました。また、ウルタンを1年生の時に読み感じたこと、そして2年生になって読み返して感じたものが違うのは、1年以上の経験があるからかな…と思った。



(昭和62年9月第8回OB会から)

合宿、幹部交代、インカレ、演武会、数多くのコンパの出来事がウルタンに書かれている。それぞれの文には、その時の気持ちがそのまま書かれている。特に合宿については、今も昔も変わらないところが多い。多分、これからも同じように苦しかったことや、幹部に対するグチが、ずっと語り継がれていくのではないだろうか。これがウルタンだと思うし、これなしではウルタンは語れないのかと思う。

OBの方々の現在の生活や思い出話も自分たちの励みになるし新しい発見もある。これからもうウルタンが発展していきますように…。

## ねえ、応援団マネージャーしない？

(剛毅第18号)

月日がたつのは早いもので、私が熊大に入学してから、もう10か月も過ぎようとしています。私が、この憧れの熊大に入学でき、そして、何となく応援団のマネージャーになっているんなことがありました。

マネージャーになった当初は、コンパのたびにOBの方や他の団員さんに聞かれました。

「どうしてマネージャーになったの？」

返答に困った私は、自分でもどうして何だろう…と答えを探していましたが、出てきた言葉は、次の一言でした。「何となく…」が一番びったりするようでした。

最初のうちは、部室に行くのが怖かったものです。押忍の声を聞くたびにビクッとしたものでした。先輩マネージャーは平気でいられるのが不思議でした。そのころの私の憂鬱の種は、同期のマネージャーが入ってこなければどうしようでした。会う人ごとに勧誘して声をかけていました。



(昭和60年12月：第17回演武会にて)

「ねえ、応援団マネージャーしない？」

その甲斐あって、6月の終わり頃に満理ちゃん、その一週間後にわーちゃんが入ったわけです。これでひとまず私の憂鬱も消えました。



そしてマネージャー3人そろって迎えたのが幹部交代でした。この時は、自分が一番酔ったような気がしました。三次会の「竜神」ではみんなが歌いだしたのに、何故か自分は泣き出してしまい、帰りはふらふらしながら家に帰りました。次の日の水泳応援の間、胃が痛くて、痛くて、もう酒は飲まないぞと決意したものでした。応援団マネージャーになって、初めて生酒を飲み、初めて人が潰れるのを見て、初めて焼酎ロックで飲むことを知りましたが、今では当たり前のように注がれています。

マネージャーになったお蔭で人並みに飲めるようになりました。団員の方には本当に良くしてもらってマネージャーになって良かったなあと思っています。マネージャー業もあと少しですが、最初の頃の緊張感を忘れずに、マネージャー3人で力を合わせて頑張っていくと思っています。

## 太鼓と私

(平成2年発行：剛毅第22号)

熊大応援団には2つの太鼓がある。平太鼓と立ち太鼓だ。不思議に思われる方もおられると思いますが、僕が本当に好きなのは平太鼓の方だ。しかし、初めから平太鼓が好きだったわけではない。部室の片隅に置いてある立ち太鼓を見ては「あっちの方をたたけたらなあ…」と何度思ったことでしょうか。

他サークルの応援、壮行会、そして毎日の練習はいつも平太鼓だった。本当にこの平太鼓には、度々苦い思いをさせられた。僕は憎んでいたのかもしれない。

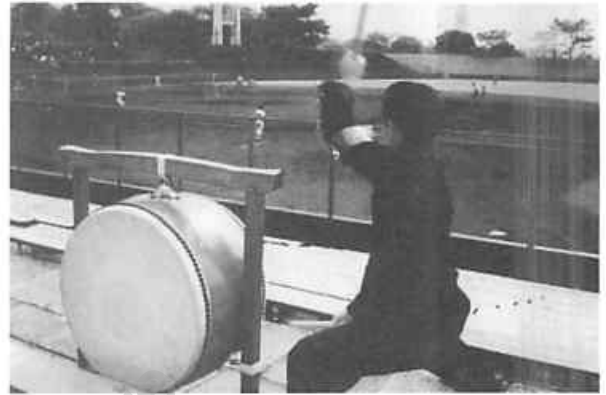
そんなある日、太鼓の革が破れた。そういえば、もうだいぶ革が薄くなっていたのを思い出す。

「ああ、すまなかった…」僕は反省した。

「俺だけじゃなかったなあ。俺が苦しかった時、お前も苦しかったんだなあ。水泳応援の時も、野球の応援の時も勝手に連れ出して、そ

のたびに痛い思いをさせたのか…。そういえば、あの帰り道、お互いにくたびれた顔をしていたな」

太鼓は生き物に例えられる。僕はその後太鼓をたたくときは、強くしかし愛情を持ってたたくことにしている。



(平成2年11月TKU杯での応援)

## 2回生の感動—17回演武会

(剛毅第22号)

今回の演武会は、前回とは違う何か得体の知れぬプレッシャーを感じながら迎えた。そして、本番…。みんな燃えた。たった3時間余りのためにどれだけ練習してきたか、何度も何度も怒られて注意されたか…。



(平成2年12月 演武会)

本番中は何度も涙が出てきた。そのたびにこれでもか、これでもかと思いやり遂げた。翠樟が終わったとき、実戦演武が終わったとき、蘇峰が終わったとき、ボシタが終わったとき、巻頭言が終わったとき、涙が出てきた。最後に幕が下り「熊大ファイト」がかかる。言い終わっ

たとき全身から力が抜けていくのを感じた。それと同時に目が潤んでかすんでしか見えなかった。でも旗を下さなければいけない、精一杯涙が出てくるのを我慢した。自分だけではなからう。他の団員達も…。

この団員たちの涙が観客の心に伝わったのであれば、これほど嬉しいことはない。第17回演武会は自分たちにとって言葉では言い表すことが出来ないほど、最高の時であった。この日まで蔭になって支えてくれた人に感謝の気持ちで一杯になった。ありがとうございました。

## 恐怖の5月合宿

(剛毅第22号)

5月合宿、それは我ら一回生にとって最初の壁であった。「まだ終わらない、まだ、終わらない…やっと終わった」と毎日の練習のたびに思った。自分にとっては（誰にとっても同じだろうと思うが）恐怖！恐怖！恐怖の朝練が続いた。小学校当時の朝のラジオ体操も、これほど嫌ではなかった。毎朝、合宿所から疲れのとれない体を引きずって部室までやってくる。自分の体がやっと機能し始めたときは、もう朝練の途中、それから先は最後まで自分の体を最後まで持たせることだけに集中する。



(平成2年8月：夏季強化合宿)

朝練が終わった休む間もなく食堂に行って朝食の準備をする。空腹感はあるのだが体が食べ物を受け付けてくれない。

もうタタタの状態で講義を受ける。先生の声は子守唄になってほんのひと時の安らぎが訪れる。そんな状態だから5月合宿は最後まで持たなかった。腹痛などで途中ダウンしてしまった。そして今なお、5月合宿の思い出として、この腹痛は自分の体に襲ってくるのだった。

## 負けたくないから走った(遠歩完走記)

(剛毅第22号)

晩秋の晴れ渡った夜、阿蘇の夜空に号砲が鳴り響いた。同時に多くの若者が走り出して行った。上空では満天の星が彼らを激励しているようにきらきらと輝いている。「熊大ファイト」をかけながらダッシュしている者もいる。

自分は、彼らの後ろ姿をみながらのんびりと走り出した。みんなと一緒につもりだったが、阿蘇の山を下りた頃は、仲間の姿は見えなくなってしまった。孤独感にさいなまれながら走っていると疲労感にまで苦しまれてきた。1回生には負けられないし、同期の2回生負けたくないし、幹部には勝ちたいし、OBには負けるわけにはいかないと思い気力を振り絞ってテクテクと走り続けた。沿道の人声援や差し入れのおかげで何とか武蔵塚の手前まで走ることが出来た。



(平成2年11月：遠歩が終わっての学館前にて)

しかし、そこから足が痛み出し白々と明けていく朝日を背に、のろのろと走ったり歩いたりを繰り返していく。でも赤門までたどり着いた。最後の力を振り絞ってゴールを目指して駆け

出した。長い道のりを走り切り大地に疲れた体を投げ出していると、上空では明るい太陽が私の健闘を讃えてくれているかのように輝いていた。

## 自分の団長像と違うその現実

(平成7年発行：剛毅第25号)

応援団に入って3年、長かったようで短い3年間だった。一回生、二回生のとき、きついばかりで何回もやめようと思った。やっと幹部になり立派な役職をいただいたが思うようなことはできなかった。演武会もできなかったし、応援や壮行会にしても自分が太鼓をたたき、そのあと即エールをきるようなことが毎回のようにつづいた。僕個人の持つ団長像とは、練習の時も応援の時も細かいことはごたごた言わずドンと構えていて最後に出てきておいしいところを持っていくといった感じだったが…。



(平成6年4月：新入生歓迎コンパ)



(平成6年5月：五月合宿打ち上げ)

しかし、OB会は無事に終わることが出来たし、試合の応援に関しては昨年、一昨年に劣らず活発にできたと自負している。廃団まで考えたこともあったが、OBや他の部の励ましを受けて、何とか今日までやって来れた。幹部交代まであとわずか。残る日々を精一杯過ごしたい。

## 一人きり二回生の一年の振り返り

(剛毅第25号)

今年も新入生歓迎コンパが開催された。自分は1年次の6月に入団したので、歓迎コンパは新入生と同じく初めてだ。その新入生は入団することに決まったわけではない2人が参加した。

この2人が入団してくれたらなあ…と心からそう思った。でも、その1年生もその後、自分のやりたい方に進んでいった。それはそれでいいと思った。



(平成6年5月：水泳応援)

5月合宿は、自分が一人で起床当番をすることになった。頑張ろうと思っていたが、風邪をひいてしまい合宿が中止になってしまった。こんなことで中止になってしまい幹部の方に申し訳なく思った。自分が情けなく反省ばかりの5月合宿だった。

今年もインカレの時期がやってきた。今年もリーダーもさせてもらい檄文も読んだ。非常に緊張したが無事に出来てほっとした。すでに開催地で試合をしている選手もおり、自分も緊張しながらも応援に行く日を待っていた。そして

自分も開催地の佐賀に向った。応援の緊張感は独特のもので期待と不安の入り混じった何とも言えない気分になる。どれだけ応援できたかわからないが、自分として応援に行けてよかった。



(平成5年9月 第11回OB会)

OB会が行われた。普段はお目にかかれない先輩方に会える数少ない機会であり、緊張することもあったが非常に楽しかった。OBの方と一緒に練習をしたり演武を見てもらったり、一緒に演武をしたり実にいい思い出が出来た。コンパでもいろんな話を聞かせてもらい、一緒にお酒が飲めてうれしかった。ただ、翌日のソフトボールに参加できなかったのは非常に残念だった。翌日もソフトボールに参加できるように酒に強くなりたいと思った。

またまた遠歩の時期が来た。昨年は7時間30分のタイムだった。今年の目標は7時間を切ることにした。相変わらずスタート前の阿蘇は寒くて早く走りたかった。スタートしてしまえば、あとはもう最後まで走るしかないので覚悟を決めた。途中、体調も良かった。チェックポイントを通るたびにみかんを手にしながらひたすらゴールを目指す。7時間を切れると思いき走り続けたら、まだ太陽も見えない時間にゴールした。5時間50分だった。7時間どころか、6時間を切ったのだからとても嬉しい遠歩だった。

自分も20歳になり、やっとお酒も飲めるようになった。成人祝いコンパでは、初めて上座に座らしてもらった。それも右と左にマネージャーが座って「両手に花」の状態で祝ってもらった。そのうちだんだんと気分が良くなって、酔いが回ってきたなあと思っていたら記憶がなくなってしまった。気が付けば自分の部屋で寝ていた。あとから先輩やマネージャーに聞けば、いつもとほとんど変わらず、「相変わらず」であったとのこと。でも、プレゼントや色紙もらったのはうれしかった。



(平成6年5月 幹部交代 28⇒29代)

2年生を終える今振り返る。1年の時は、とにかく先輩たちについていくことだけで精いっぱい、2年生になってからは幹部と自分だけになってしまって非常につらかった。

毎日、「明日はやめよう」と思っていたが、何とかここまで続けさせてもらうことが出来た。



(平成6年7月 インカレ応援)

# 太鼓リズム表

21代 山中和之氏 作

## 武夫原頭に草薙えて

● ● ● ● ▼△  
ぶふげんとうにくきもえてー  
● ● ● ● ▼△  
はなのかあまくゆめにいりー  
● ● ● ● ▼△  
たつたのやまにあきゆいて  
● ● ● ● ▼△  
かりがねとおきつきかげに

● ● ● ● ▼△  
たかくそびゆるさんりょうの  
● ● ● ● ▼△  
れきしやうつるじゅうよねん

## 第一学生歌

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
しろがねのーひかりあふれー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
こみーどりにーむせぶまなびやー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
わかきのぞみわかきのぞみ  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
ああーじゆうのかーぜーー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
ミネールヴァの一もりになごむー

## 第二学生歌

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
みどりひらくすじーー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
あらたよーのぞみみちてー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
とこーわかひのーかがやきもゆるー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
くまだーいあああー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
われらのががえんー

## 第三学生歌

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
もりのーみやこにーひーらーけたーる  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
ふるきれしをー しーのーばせーてー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
きぼうのくあならびたつ  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
ああーせいしんの  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
きはーみちてきーはみちて  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
けんがーくのつーちー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
おーとーたかくー

## 必勝の歌

乱打 ●  
「やー」「オス」(3回)

● ● ● ● ▼△  
ちをすすり  
● ● ● ● ▼△  
なみだして  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
からえしみはたたくせのさなか  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
さんたるひかりーー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
みよやー くれなひのーはたがしら  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
くまだいけんじのいきのせい  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
たてばおさめんみはたのもとに  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
ぐんゆうみだれけんおるともー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
いかにわたすべきあだびとに  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
ひっしーのちからをつくすとー

## 学生応援歌我が熊大

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
もえいーずるみどりのもりに  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
わきあがるわれらのちしを  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
わこおどのいぶきはここにいざきたれ  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
わがくまだいわがくまだい  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
みよくまだいのそこちから

## 道湯歌

詩吟  
乱打 (段々大きく) ●●●●

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
せかいにほこるおおあそのー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
けだかきさまをあおぎみよー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
ごおきのかぜはふきやまずー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
ひろくこのよをさますなり  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
きけおおえんだんおたけびを

3 ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● (リズム変更)

## 同期の桜

乱打 ●●●●  
うーうーうー 「ヤア」

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
きさまとおれとーは  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
どおきのさくらー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
おなくまだーいの  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
にわにさくー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
かーたいゆうじよー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
ちかあつたなかま  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
いつかみのーぜ  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
おおえんだーん

## 易水流れ

乱打 (段々大きく) ●●●●  
(歌にはリズムなし)

## 梅花咲く

○ ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
「いー」

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
つばきはななくんぐのー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
にこうをすぐるほしずくよー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
オリブのもりにひほもえて  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
うたほがらかにさかもりの  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
かんげきふかきわかきひの  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
騎りを永遠に忘れじな  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
「うー」 (3回)

## 田原坂

○ ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
「しゃかほい」 「やー」「よいしょ」

● ● ● ● (段々早く乱打) ○ ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
「うー」 「田原坂」

○ ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
あめはーふるふるー  
○ ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
じんばはーぬれるー 「ヤアー」  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
こーずにこーされぬー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
たばるーざあかー

乱打 ○ ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
「うー」 「よいしょ (3回)」

段々早く 段々ゆっくり  
「やあてななめ ●●●●●

● ドン  
○ ド  
▼ カラ  
△ カッカ

## 惜別の歌

乱打 乱打 小・中・大  
「フレー」「フレー」 ●○●●●●

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
とおきわかーれにー  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
たーえかねて  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
このたかどのに  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
かなしむなかれ  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
たびのころもを  
● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

「熊大ファイト」 「オス」 「オス」

# 剛毅

熊本大学応援団演武 歌集

## 1 武夫原頭に草萌えて

(巻頭言)

仰げば星斗爛熳として  
永遠の真理を噛く  
頭をめぐらせば蘇山遠々として  
我ら若人の情熱をそそる  
天地の恵み豊かなる肥後の一角  
立山の麓 白川の畔  
これぞ我ら熊本大学応援団健児が地なり  
いざや舞わんかな狂わんかな唄わんかな  
我等が剛毅朴訥の調べを  
武夫原頭に草萌えて  
アイン ツヴァイ ドライ

- 1 武夫原頭に草萌えて 花の香甘く夢に入り  
立田の山に秋逝いて 雁が音遠き月影に  
高く聳ゆる三寮の 歴史や移る十余年
- 2 夫れ西海の一聖地 濁世の波を永遠にせき  
健児が胸に青春の 意気や溢るる五高魂  
その剛健の質なりて 玲瓏照らす人の道
- 3 時潮のめぐりたゆみなく 移りてここに十年の  
思いや狂う胡北の地 断雲乱れ飛ぶところ  
斬魔の剣音さえて スラブの末路今ぞ見る
- 4 時艱にして義を思い 塵世に節を偲ぶかな  
ああ新興の気を負いて 浮華の巷に我立てば  
思いは馳する朴訥の 流風薫る銀杏城
- 5 さらば我が友叫ばずや 時と人とを論すべく  
見よ龍南に一道の 正気ありてぞ日の本の  
青年の名に力あり 二十世紀に光あり  
二十世紀に光あり

## 2 熊本大学第一学生歌

- 1 白銀の光あふれ  
濃緑にむせぶ学び舎  
若き望み 若き望み  
ああ 自由の風  
ミネルヴァの森になごむ
- 2 桑海の時の流れに  
たゆまざる学びを誇る  
若き望み 若き望み  
見よ千古を秘めし  
蘇岳の気高き姿

## 3 熊本大学第二学生歌

- 1 緑開く九州路(くすじ)  
新世の望み満ちて  
常若(とこわか)の陽輝き燃ゆる  
熊大ああ我らが学苑
- 2 天地鎮む蘇岳  
絶ゆ日なくおろし火噴きて  
誇りあふるる歓喜を歌う  
熊大ああ我らが学苑
- 3 鐘は響く永遠に  
みんなみの究理の園  
あらしの夜も灯消えず  
熊大ああ我らが学苑

## 4 熊本大学第三学生歌

- 1 森の都に開けたる  
古き歴史を偲ばせて  
希望の白亜並び立つ  
ああ清新の気は満ちて気は満ちて  
建学の槌音高く
- 2 蘇岳東に連らなりて  
火を吐く姿若人の  
熱き情念(おもい)に似たるかな  
ああ俊英は集いたち集いたち  
若き世代の証なす
- 3 時の流れは変わるとも  
堅き信念(おもい)を培いて  
真の道を踏まんかな  
今ぞ潮は満ち来たり満ち来たり  
平和世界の騎手たらん

## 5 熊大第一応援歌(必勝の歌)

- 1 血をすすり涙して  
勝ち得し御旗 濁世の最中  
さんたる光  
見よや紅の旗頭  
熊大健児の意気の所為(せい)
- 立てば治めん御旗のもとに  
群雄乱れ剣折るとも  
いかで渡すべき仇人に  
必死の力を尽くすとも
- 2 血をすすり涙して  
勝ち得し御旗 幾春秋の  
暮れにしあれど  
いかで渡すべき仇人に  
さらば誓わん我が友よ
- 命は軽し熊大の誉れ  
正義は堅し熊大の勲  
やがて大呼せん勝鬨を  
有明(ゆうめい)湾頭に響くまで

## 6 熊大学生応援歌(我が熊大)

- 1 萌い出づる 緑の森に  
湧き上がる 我等が血潮  
若人の息吹はここに いざ来たれ  
我が熊大 我が熊大  
見よ熊大の この力
- 2 煙立つ 阿蘇の頂  
波白き 天草の灘  
雨嵐こ武夫原に まき上がれ  
我が熊大 我が熊大  
見よ熊大の この力
- 3 遥かなる理想(すがた)求めて  
培いし心と身体  
燃えさかる闘志を胸にいざ行かん  
我が熊大 我が熊大  
見よ熊大の この力

## 9 田原坂

- 1 雨は振る降る  
人馬は濡れる  
越すに越されぬ  
田原坂  
シャカホイ シャカホイ
- 2 右手(めで)に血刀  
左手(ゆんで)に手綱  
馬上ゆたかな  
美少年  
シャカホイ シャカホイ
- 3 臥さば大地に  
仰がば天に  
哀歌響かん  
応援団  
シャカホイ シャカホイ

## 7 熊大同期の桜

- 1 貴様と俺とは同期の桜  
同じ熊大の庭に咲く  
堅い友情誓った仲間  
いつか実るぜ応援団
- 2 ああ銀杏の栄光を  
貴様と俺とで分かち合う  
苦難乗り越え励まし合おう  
意地とど根性応援団
- 3 生まれ故郷は違っていても  
同じ意気地に燃えて立つ  
仰いだ夜空の北斗の空に  
高く聳えよ応援団

## 8 熊本大学応援団逍遥歌

- 1 世界に誇る 大阿蘇の  
気高き様を 仰ぎ見よ  
剛毅の風は 吹き止まず  
広くこの世を 醒ますなり  
聞け応援団 雄叫びを
- 2 不屈の精神(こころ) 龍南の  
我が学び舎に 集いあう  
五千の友に 脈々と  
白川のごと 流るべし  
見よ応援団 熱き血を
- 3 立田の山に さつき咲き  
寄せては返す 有明の  
春秋四歳は 短くも  
友情(なさけ)は永遠に 忘るまじ  
知れ応援団 この情念(おもい)

## 10 椿花咲く

- 1 椿花咲く南国の  
二更を過ぐる星月夜  
オリブの森に炎は燃えて  
歌朗らかに酒盛りの  
感激深き若き日の  
誇りを永遠に忘れじな
- 2 ああ南国の沖遠く  
潮の流れは尽きずして  
白銀の陽に溢れては  
はからずも入る白日夢  
生命の旅の寂しさに  
虚生の夢の今しばし
- 3 春蘇える筑後野に  
清和の光溢れつつ  
今逍遥の道すがら  
命の調べ颯爽と  
生きとし生けるものはみな  
若き力に燃ゆるかな

## 11 惜別の歌

- 1 遠き別れに 耐えかねて  
この高殿に 登るかな  
悲しむなかれ 我が友よ  
旅の衣を ととのえよ
- 2 別れと言えば 昔より  
この人の世の 常なるを  
流るる水を 眺むれば  
夢はずかしき 涙かな
- 3 君がさやけき 目の色も  
君くれないの くちびるも  
君がみどりの 黒髪も  
またいつか見ん この別れ





## 熊本大学応援団OB会規約

### 第1章 総則

第1条 熊本大学応援団OB会(以下、本会と称する)は、第一にOB会員同士、また現役応援団との親睦を図り、かつ現役応援団の各種行事への活動支援を行うこと。第二に熊本大学出身者として現役学生の模範として、その人格を伸ばしていくことを主たる目的とする

### 第2章 組織及び事業

第2条 本会の会員は熊大応援団のOBとする。

第3条 本会規約の第1条に定める目的達成のために必要な事業を行う。

### 第3章 役員・会議

第4条 本会には次の役員を置く。

- |          |    |         |      |
|----------|----|---------|------|
| (1) 会長   | 1名 | (2) 副会長 | 若干名  |
| (3) 事務局長 | 1名 | (4) 会計  | 1名   |
| (5) 広報部長 | 1名 | (6) 理事  | 各代1名 |

第5条 役員の選出方法は下記のとおりとする

- (1) 会長は総会で選出される。
- (2) 副会長、事務局長、会計、広報部長は、会長の推薦により総会で承認される。
- (3) 理事は、各代の互選によって選出される。
- (4) 役員の任期は、2年とする。

第6条 役員の職務は下記のとおりとする。

- (1) 会長は、本会を代表し会務を統括する。
- (2) 副会長は会長を補佐して総会の議長となる。また会長が職務を遂行できない場合は代行する。
- (3) 事務局長は本会の管理運営を統括する。
- (4) 会計は本会の会計業務を統括する。また、総会時に会計報告をしなければならない。
- (5) 広報部長は、本会のホームページを統括する。
- (6) 理事は担当する各代の会員へ情報を周知し、幹事会へ意見を具申する。

第7条 本会は下記の会議を開催する。

- (1) 定期総会は年一回開催をする。第2条に定める会員で構成をする。
- (2) 臨時総会は会長が必要と認める場合、ならびに幹事会で必要と認める場合に開催する。
- (3) 幹事会は会長、副会長、事務局長で構成するが、求めに応じて他の役員も出席できる。
- (4) 総会の議決は、概ね30人以上の会員出席と出席者の過半数の同意によって議決される。
- (5) 本会の会議には、現役団員もオブザーバーとして出席できる。

### 第4章 会員

第8条 会員資格は下記のとおりとする。

- (1) 熊大応援団を巣立った者、マネジャーとして活動した者を会員とする。
- (2) 中途退部者で入会希望の者、会員の推挙よる者は、総会の議決によって会員とする。
- (3) 名誉会員を迎えることもできる。

第9条 会員は下記の義務が生じる。

- (1) 定期総会・懇親会には可能な限り出席をすること。
- (2) 上記総会に欠席の場合は、OB会運営費(年額1000円)を納付しなければならない。

### 第5章 補則

第10条 本規約は、平成23年11月5日より施行する。

第11条 本規約の施行に伴い、昭和43年制定の「熊本大学応援団O・B会規約」は廃止する。



何もないところに何かを作る  
そして そこに生まれた新しい存在に  
一人 また一人と集い合う 集まってくる  
喜びがあり 悲しみがある  
“生きている” ことをしみじみと感じる  
そうだ！

人生は感動だ

汗と涙で築きあげる感動だ

昭和42年(1967)7月 初代団長 和田英樹氏の日記から